

爲ん。是の如きの人は復た世樂に貪著せず、外道の經書手筆を好まず、亦復た喜びて其の人及び諸の惡者の若し屠兒、若し猪羊、雞狗を畜ふもの、若し獵師、若し女色を街賣するものに親近せじ。是の人は心意質直にして、正憶念有り、福德力有らん。是の人は三毒に惱まされじ。亦嫉妬、我慢、邪慢、増上慢に惱まされじ。是の人は少欲知足にして、能く普賢の行を修せん。普賢若し如來の滅後、後の五百歳に若し人有りて、法華經を受持し、讀誦せん者を見ては、應に是の念を作すべし。此の人は久しからずして、當に道場に詣りて、諸の魔衆を破し、阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を轉じ、法鼓を撃ち、法螺を吹き、法雨を雨すべし。當に天人大衆の中の師子法座の上、に坐すべしと。普賢若し後の世に於て是の經典を受持し、讀誦せん者は、是の人復た衣服、臥具、飲食、資生の物に貪著せず、所願虚しからず、亦現世に於て其の福報を得ん。若し人有りて之を輕毀して言はん、汝は狂人ならんのみ、空しく是の行を作して終に獲る所無けん。是の如き罪報は、當に世々に眼無かるべし。若し之を供養し、讚歎すること有らん者は、當に今世に於て現の果報を得べし。若し復た是の經典を受持せん者を見て、其の過惡を出さん。若し實にもあれ、若し不實にもあれ、

此の人は現世に白癩の病を得ん。若し之を輕笑すること有らん者は、當に世々に牙齒疎缺、醜唇平鼻、手脚繚戻し、眼目角昧に、身體臭穢にして、惡瘡膿血、水腹短氣、諸の惡重病あるべし。是の故に普賢若し是の經典を受持せん者を見ては、當に起ちて遠く迎ふべきこと、當に佛を敬ふが如くすべしと。

□我慢邪慢、増上慢、慢を種々に分つてあるが、其の中に於て我慢とは自己を恃んで他を凌辱する類をいふのである。邪慢とは自己に徳無くして徳有るが如くに思ひ、教法を輕侮する類をいふのである。増上慢とは前にいふ如く、未だ得ざるを得たりと思つて自ら昂ぶる類をいふのである。□眼目角昧、所謂斜視の者をいふのである。

是の普賢勸發品を説きたまふ時、恒河沙等の無量無邊の菩薩、百千萬億旋陀羅尼を得、三千大千世界微塵等の諸の菩薩、普賢の道を具しぬ。佛是の經を説きたまふ時、普賢等の諸の菩薩、舍利弗等の諸の聲聞及び諸の天龍人非人等の一切の大會皆大に歡喜し、佛語を受持して禮を作して去りにき。

□普賢勸發品、勸發とは人に勸めて佛道に志すの心を發さしむることである。普賢菩薩が東方の國から來て汎く吾等娑婆世界の者に勸めて發心せしむるのである。



無量義經梗概

或時釋迦牟尼佛は王舍城に近き耆闍崛山の中に住したまひ、大衆のために法を説かれた。其の大衆の中には文殊師利をはじめとして多くの菩薩が居た。此等の諸菩薩は何れも非常に徳の高い人々で、久しい修行を重ねた結果として、今では

其の心禪寂にして常に三昧に在り、恬安愔怕にして無爲無欲なり。顛倒亂想また入ることを得ず。静寂清澄に志玄虚漠なり。之を守りて動ぜざること億大千劫無量の法門悉く現在前せり。

といふほどに勝れたる智慧を具へたる身であつた。されば何れも佛の化導を賛けて、一切衆生の爲に法を説き、是れ諸の衆生の眞の善知識是れ諸の衆生の大良福田是れ諸の衆生の請ぜざるの師是れ諸々の衆生の安穩の樂處救處護處大依止處なり。として仰がれて居た。それ故に

如來の地に於て堅固にして動ぜず願力に安住して廣く佛國を淨め、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。

とは衆の共に認むる所であつた。阿耨多羅三藐三菩提とは即ち佛智のことである。此等諸菩薩は既に佛を距ること



遠からぬものである。

又此の大衆の中には佛の大弟子として知られたる舍利弗、迦葉、阿難等の多くの人々も居た。此等の人々は何れも、

皆阿羅漢にして諸の結漏を盡して復た縛著なく、真正の解脱なり。

とある。結漏とは即ち煩惱の事である。此等の人々の外に、國王長者より庶民に至るまで有らゆる階級の者が居た。又獨り人間界のみならず、天上界の者も多く來り集つた。此等の者は何れも皆佛が法を説いて、その心に大なる歡喜を與へらるべきことを知り、香を焼き華を散じて種々に供養し、靜かに坐して佛の言を出さるゝを待つて居た。時に大莊嚴菩薩は諸菩薩と共に座を起ち、佛前に至つて胡跪合掌し、恭しく偈を説いて佛に對する讚歎の意を表した。諸菩薩は既に佛を距ること遠からぬ境界に在るものであるから、其の説ける所の偈は能く佛の具へたまへる徳を悉して、遺憾なきものである。其の偈は

大なる哉大悟大聖主垢無く染無く所著無し。

といふを以て始まり、先づ佛が絶對の理を究め、絶對の覺を得たまへることを讚歎する。次には其の徳が自ら其の姿に現はれて、

毫相月の如くに旋り頂に日の光あり、旋髮紺青にして頂に肉髻あり。

といふが如き三十二相となつたのを讚歎し、

稽首して法色身の戒定慧解脱知見聚に歸依したてまつる。稽首して妙種相に

歸依したてまつる。稽首して難思議に歸依したてまつる。

といふ。次には佛が一切衆生の爲に法を説いて、それ／＼に利益を與へたまへるを讚めて、

若し聞くこと有るは意開けて、無量生死の衆結斷ぜざること莫し。

といひ、また

清淨無邊にして思議し難し。

といひ、

我等咸く復た共に稽首して法輪轉するに時を以てしたまふに歸命したてまつる。稽首して梵音聲に歸依したてまつる。

といふ。さて佛が此の如き洪大なる智慧を具へ、此の如き無量の慈悲を具へたまふことは、其の久しい間苦行を積みたまへる結果であるから、此の事を稱へて、

遍く一切の衆の道法を學して、智慧深く衆生の根に入りたまへり。是の故に今自在の力を得て、法に於て自在にして法王たり。我復た咸く共に稽首して、能く諸の勤め難きを勤めたまへるに歸依したてまつる。

といふを以て終る。此等の勝れて尊い諸菩薩が斯くまで深く歸依せるによつても、佛の徳の洪大無邊なることは能く知らるべきである。(以上で德行品第一終る。)



大莊嚴菩薩は諸菩薩と共に此の偈を説き終り、共に佛に向つて、「今吾等は佛に問ひ奉りたいことがある、御許しがあらうか」と申した。佛は之に答へられて、其の問のよく時を得たることを稱せられ、

如來は久しからずして當に般涅槃すべし。涅槃の後普く一切をして復た餘の疑ひ無からしめん。

と仰せられた。般涅槃とは入滅のことである。佛は四十餘年の説法を終り、もはや遠からずして入滅せらるべきであるから、疑はしいことは何なりとも尋ねて置くが宜いと仰せられたのである。仍て大莊嚴菩薩は

菩薩摩訶薩、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得んと欲せば、應に何等の法門をか修行すべき。

と問ふた。是れは根本的な大問題である。此等諸菩薩は久しく修行を重ねて、既に佛に近い者になつて居るのであるから、愈々佛の境界に到達し得べき爲に最後の問題を掲げて、佛の御教へを求めたのである。佛は之に答へて「それには一の法門がある、之を名けて無量義といふ」と仰せられ、更に悉しく其の義を説明せられた。

菩薩無量義を修學することを得んと欲せば、應に一切諸法は自ら本來今性相空寂にして大無く小無く生無く滅無く住に非ず、動に非ず、進ならず退ならず、猶ほ虚空の如くにして二法有ること無しと觀察すべし。

とある。此處に諸法といふは即ち萬有のことである。萬有の本體は有らゆる差別を超越せるものなることを示され

たのである。

然るに凡夫は小き自己の利害得失に囚はれて、相争ひ相闘ふが故に、種々の苦を生じ種々の惱みを受くるのである。即ち

諸の衆生虚妄に、是は此、是は彼、是は得なり、是は失なりと横計して不善の念を起し、衆の惡業を造りて六趣に輪回し、諸の苦毒を受けて無量億劫にも自ら出ると能はず。

とある。佛は之を憫むのあまりに、之に對して教へを説かるゝのである。菩薩たるもの亦佛の御心を吾が心として彼等衆生に對すべきである。其の説法は聽く者の性質によつて、それ〴〵に異らなければならぬ。即ち

性欲無量なるが故に説法無量なり。説法無量なるが故に、義も亦無量なり。

是れ無量義の名ある所以である。しかし

無量義は一法より生ず。其の一法とは即ち無相なり。是の如き無相は相無く相ならず、相ならずして相無きを名けて實相と爲す。

といふ點が最も大切である。實相を知るとは即ち絶対の眞理を捉へ得たることである。此の如き智慧の力が即ち一切衆生を救護する力となつて現はるゝのである。故に

是の如き眞實の相に安住し已りて、發する所の慈悲明諦にして虚からず、衆生の



所に於て眞に能く苦を抜く。苦既に抜き已りて復た爲に法を説き、諸の衆生をして快樂を受けしむ。

とある。此の拔苦與樂といふことが佛の説法の目的である。

佛が以上の如く説かれたのを聽聞して、大莊嚴菩薩は更に疑問を提出し、今まで四十餘年間に佛の説きたまへる所と、今説きたまふ所との異なる點を明かに示したまへと請ふた。佛は之に答へて、今まで説ける所は皆方便の教へに過ぎぬことを明され、

我先に道場菩提樹の下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。佛眼を以て一切の諸法を觀するに宣説すべからず。所以は何ん諸の衆生の性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば種々に法を説きにき。種々に法を説くこと方便力を以てす。四十餘年には未だ眞實を顯さず。とある。而して更に譬喩を設けて、佛の説きたまへる法が衆生心の垢を淨むるは宛も水の如しといひ、

水は俱に洗ふと雖も、而も井は池に非ず、池は江河に非ず、溪渠は海に非ず。如來世雄の法に於て自在なるが如く、所説の諸法も亦復た是の如し。初中後の説皆能く衆生の煩惱を洗除すれども、而も初は中に非ず、而も中は後に非ず。初中後の説は文辭一なりと雖も、而も義は各異なり。

とある。佛は更に鹿野園に於た初めて説法せられた時から今日に至る迄、聽く者の力に應じて種々に法を説かれたことを述べられ、又之を聽く者が各その力に應じて得る所の有つたことを擧げて、

故に知んぬ説は同じけれども、而も義は別異なり。義異なるが故に衆生の解異なるが故に得道亦異なる。

と説き示された。斯く種々の方便を以て法を説かるゝは佛の洪大なる慈悲に依るものである。故に

一切の諸佛は二言有ること無く、能く一音を以て普く衆の聲に應じ、能く一身を以て百千萬億那由他、無量無數恒河沙の身を示し、一々の身の中に又若干の百千萬億那由他阿僧祇恒河沙の形を示す。善男子、是れ則ち諸佛の不可思議甚深の境界なり。

と説いて、此の一段の説法を終られた。時に三千世界の大地は六種に震動し、空中よりは天華が降り、天の伎樂の聲が響き、集れる大衆は皆非常なる悦びを感じた。(以上で説法品第二終る。)

爾の時に大莊嚴菩薩は佛の所説の微妙甚深なることを稱讚し、『此の如き教へを一たび聞く時は、一切の法を持つべき力を得るが故に、再び心に邪見の生ずることなく、如何なる魔にも妨げられぬであらう』といひ、更に

是の經典は何れの所より來り、去つて何れの所にか至り、住つて何れの所にか住



する。

と問ふた。佛は之に答へて、

是の經は本諸佛の室宅の中より來り去つて一切衆生の發菩提心に至り諸の菩薩所行の處に住す。

と仰せられ、更に是の經を學ぶことによつて生ずべき十種の功德を説かれた。

此の十種の功德といふは、要するに菩薩道を行ずるによつて生ずべき利益を數へ上げられたるものである。其の第一の功德といふは、

菩薩の未だ發心せざる者をして菩提心を發さしめ、慈仁無き者に慈心を起さしめ、殺戮を好む者に大悲の心を起さしめ、嫉妬を生ずる者に隨喜の心を起さしめ、愛著有る者に能捨の心を起さしめ、諸の慳貪の者に布施の心を起さしめ、憍慢多き者に持戒の心を起さしめ、瞋恚盛なる者に忍辱の心を起さしめ、懈怠を生ずる者に精進の心を起さしめ、諸の散亂の者に禪定の心を起さしめ、愚痴多き者に智慧の心を起さしめ、未だ彼を度すること能はざる者に彼を度する心を起さしめ、十惡を行する者に十善の心を起さしめ、有爲を樂ふ者に無爲の心を志さしめ、退

心有る者に不退の心を作さしめ、有漏を爲す者に無漏の心を起さしめ、煩惱多き者に除滅の心を起さしむ。

とある。彼を度するとは他の人を救ふことである。有爲といひ有漏といひ、何れも煩惱に充されたる心より出る行である。以上に於て、吾等の心を擾し、人生を暗くする邪念の殆んど凡てを擧げ、之を除くべき途を示されてある。第二の功德といふは、是の經を學んで能く諸法の實相に達するものは、種々無量の義を明かにし得べきことである。されば

一法より百千の義を生じ、百千の義の中より一々に復た百千萬數を生じ、是の如く展轉して乃至無量無邊の義あり。是の故に此の經を無量義と名く。

と説かれてある。

第三の功德といふは、是の經を信する者が能く多くの人を感化して、共に大乘に歸依せしむることである。即ち此の人は

生死に出入すれども怖畏の想無く、諸の衆生に於て憐愍の心を生じ、一切の法に於て勇健の想を得。

といふが如き健氣なる心を有するが故に、

衆生を擔負して生死の道を出しむ。未だ自ら度すること能はざれども、已に能



く彼を度せん。猶ほ船師の身は重病に嬰り四體御まらずして此の岸に安止すれども、好き堅牢の舟船の常に諸の彼を度する者の具を辨ぜる有り、給ひ與へて去らしむるが如く、是の持經者も亦復た是の如し。

とあつて、其の功德は極めて大なるものである。

第四の功德といふは是の經を持つ者が常に菩薩の眷屬となり、普く世の人に崇敬せらるべきことである。即ち譬喩を以ていへば、

國王と夫人と新に王子を生ぜん。若は一日若は二日若は七日に至り、若は一月若は二月若は七月に至り、若は一歳若は二歳若は七歳に至り、復た國事を領理すること能はずと雖も、已に臣民に宗敬せられ諸の大王子を以て伴侶と爲し、王及び夫人愛心偏に重くして常に與に語らん。所以は何ん、稚小なるを以ての故に。とあるが如く、是の經を持つものも、未だ真理の極を覺ること能はざるに、諸大菩薩の眷屬となり、一切の人に崇敬せられ、

深く諸佛秘密の法に入りて、演説する所違ふこと無く、失無く、常に諸佛に護念せられて慈愛偏に覆はれん。新學なるを以ての故に。

とある。斯く常に佛に護念せらるゝが故に、後には漸く佛の境界に近づき得べきに定まつて居る。

第五の功德といふは、是の經を持つ者は大菩薩の具ふるが如き不思議の力を有するに至るべきことである。即ち是の人復た具縛煩惱にして未だ諸の凡夫の事を遠離すること能はざれども、而も能く大菩薩の道を示現し、一日を演べて以て百劫と爲し、百劫を亦能く促めて一日と爲し、彼の衆生をして歡喜信伏せしめん。

とある。それは譬へば龍の子が生れて七日にして既によく雲を興し又能く雨を降すと同様である。

第六の功德といふは、是の經を持つ者が説法する時は、聞く者が之によつて煩惱を除き、一切の苦を斷ずること佛の説法を聽聞すると異なる所なきことである。それは譬へば

王子復た稚小なりと雖も、若し王の巡遊し及び疾病するに、是の王子に委せて國事を領理せしむ。王子是の時に大王の命に依りて法の如く群僚百官を教令し正化を宣流するに國土の人民各々その要に隨ひて、大王の治するが如く等しくして異なること有ること無し。

といふが如くである。斯の如き人が末世に出現すれば佛法必ず世に弘まつて汎く衆生を利益すべきである。

第七の功德といふは、若し是の經を聞いて歡喜し信樂し、希有の心を生じ、受持し讀誦し書寫し解説し、説の如く修行し、之を世に弘めて一切の苦惱の衆生を度せんと欲するならば、その功德は莫大であつて、

即ち是の身に於て無生法忍を得生死煩惱一時に斷壞して、菩薩の第七の地に昇



らん。

とある。無生法忍とは生死の變化の爲に全く其の心を擾されぬ境界のことである。第七の地といふは菩薩を十階に分つてある中の、下より數へて第七階のことである。

第八の功德といふは、若し是の經を受持し讀誦し書寫し頂戴し、法の如くに奉行し、能く戒を持ち忍辱を守り、能く布施の行を勵み、深く慈悲を發して、廣く人の爲に是の經を説くならば、其の一切の人を利益することは洪大なるものである。即ち

若し人の先より來都て罪福ありと信ぜざる者には是の經を以て之に示して、種々の方便を設け、強て化して信ぜしめん。經の威力を以ての故に其の人の信心を發し、忽然として回することを得ん。信心既に發して勇猛精進なるが故に能く是の經の威德勢力を得て得道得果せん。

とある。此の如き人は菩薩として上位に在るものであるから、久しからずして無上菩提を成じ得べきである。

第九の功德といふは、是の經を聞いて歡喜踊躍し、受持し讀誦し書寫し供養し、廣く衆人の爲に是の經の義を分別解説する者があれば、その功德によつて、

即ち宿業の餘罪重障一時に滅盡することを得、便ち清淨なることを得。

尙ほ其の德によつて、十方の國土の無量の衆生を感化し得るが故に、

一切二十五有の極苦の衆生を拔濟して、悉く解脱せしめん。

とある。二十五有といふは、凡そ生ある者の住む所を大別して二十五としたので、『有らゆる世界』といふ義である。

第十の功德といふは、若し是の經を得て大歡喜を發し、希有の心を生じ、自ら受持し讀誦し書寫し供養し、説の如くに修行すると共に、又他の者を勸めて、共に受持し讀誦し書寫し供養し解説し、法の如くに修行せしむるならば、これは菩薩として最上の行である故に、

能く無數阿僧祇の弘誓の大願を發し、深く能く一切衆生を救ふことを發し、大悲を成就し、廣く能く衆の苦を抜き、厚く善根を集めて一切を饒益せん。而も法の澤を演べて洪に枯涸を潤し、能く法の樂を以て諸の衆生に施し、一切を安樂ならしめ、漸く超登して法雲地に住するを見ん。

とある。法雲地といふは菩薩として最上の地位であつて、佛と相距ること僅かに一步である。以上數へられたる十種の功德は低きより漸く高きに達し、結局菩薩の極位に至れるものである。

此の十種の功德を述べ終つて、佛は是の如き大乘の教を修行することの最も貴き所以を重ねて説き、能く一切衆生をして凡夫地に於て、諸の菩薩の無量の道芽を生起せしめ、功德の樹をして鬱茂扶蔬増長せしむ。



と仰せられた。此に於て大莊嚴菩薩をはじめ諸菩薩は是の如き貴き教へを與へたまへる佛の大恩を謝し、必ず之を世に弘めて、一切衆生をして之に歸依せしむべきことを誓うた。佛は之を聞きたまひ、諸菩薩を讚めて

諸の善男子汝等今眞に是れ佛子なり。弘き大慈大悲をもて深く能く苦を抜き厄を救ふ者なり。一切衆生の良福田なり。廣く一切の爲に大良導師と作れり。一切衆生の大依止處なり。一切衆生の大施主なり。常に法利を以て廣く一切に施せ。

と仰せられた。大衆は皆大に歡喜し、共に佛を禮拜して去つた。(以上で十功德品第三終る。)

無量義經の梗概は此の如きものである。此の經に於ては釋迦牟尼佛が今まで四十餘年間に説かれた所は皆方便の教へに過ぎぬことを打明られてある。然らば方便の後に説かるべき眞實の教へは如何なるものであるか。又此の經に於ては、一法よりして無量義を生ずることが説かれてあるが、然らば其の一法とは如何なるものであるか。此の問題に答へんが爲に、之に續いて法華經が説かるのである。

佛說觀普賢菩薩行法經梗概

或時釋迦牟尼佛は毗舍離國に在る大林精舍の重閣講堂に在して、諸の比丘に向ひ「今より三月の後に於て我は入滅するであらう」と告げられた。之を承つて尊者阿難、長老摩訶迦葉並に彌勒菩薩の三人が、恭しく佛を禮して如來の滅後に云何してか衆生菩薩の心を起し、大乘方等經典を修行し、正念に一實の境界を思惟せん。云何してか無上菩提の心を失はず、云何してか當に煩惱を斷ぜず五欲を離れずして、諸根を淨め諸罪を滅除することを得、父母所生の清淨の常の眼にして、五欲を斷ぜずして而も能く諸の障外の事を見ることを得べ

と問うた。即ち正しき懺悔滅罪の法を問うて末世の衆生の爲にせんと思つたのである。佛は之に答へて、

如來昔者闍崛山及び餘の住處に於て、已に廣く一實の道を分別せしかども、今此の處に於て、未來世の諸の衆生等の大乘無上の法を行ぜんと欲せん者、普賢の行を學し普賢の行を行ぜんと欲せん者の爲に、我今當に其の所念の法を説くべし。と仰せられた。耆闍崛山とは即ち靈鷲山で、佛は此處で法華經を説かれたのである。その法華經の最終に普賢菩薩勸發品がある。此より説かるゝ所は、遙かにそれに接するのである。



普賢菩薩は東方の淨妙國に在するのであるが、大乘を誦し、大乘を修し、六根の清淨ならんことを願ふものは、普賢菩薩を見ることが出来るのである。即ち

心を專にして修習し、心々相次で大乘を離れざること一日より三七日に至れば、普賢を見ることを得。

とある。尤も重き障の有るものは尙ほ久しく修行を積んで後に見ることを得るのである。普賢菩薩は白象に乘じ、安詳として徐かに歩む時に大なる寶蓮華を降らす。其の行者の前に近づく時に、白象の牙の上に玉女があつて鼓樂絃歌し、その聲は甚だ微妙である。行者は深く歡喜し、更に大乘の經典を讀誦して、十方の諸佛、多寶佛塔及び釋迦牟尼佛を禮し、又普賢及び諸の大菩薩を禮し、

若し我宿福ありて應に普賢を見たてまつるべくば、願はくば尊者遍普して我に色身を示したまへ。

と願ひ、更に修行を重ねべきである。それは

晝夜六時に十方の佛を禮し、懺悔の法を行じ、大乘經を讀み、大乘經を誦し、大乘の義を思ひ、大乘の事を念じ、大乘を持つ者を恭敬し、供養し、一切の人を視ること猶ほ佛の想の如くし、諸の衆生に於て父母の想の如くせよ。

とある。此の如き淨らかなる心となつた時に、普賢菩薩の眉間より光明を發し、十方の世界を照す。その光の中に、

十方の世界の菩薩が亦普賢の如くに白象に乗つた姿を認め得るのである。行者は之を見て身心歡喜し、

大慈大悲者我を愍念したまふが故に、我が爲に法を説きたまへ。

と請ふ。時に諸菩薩は同音に大乘の經法を説き、行者を讚歎する。これが普賢菩薩を觀る最初の境界である。

此より行者は更に大乘を念じて晝夜共に怠らぬ時は、夢の中に於ても普賢の吾が爲に説法せらるゝ様を見るやうになる。斯くして又更に進境を見、

普賢の深法を説くを聞きて其の義趣を解し、憶持して忘れず。日々是の如くにして其の心漸く利なり。

といふ迄になると、普賢は之に教へて十方の諸佛を憶念せしむるのである。行者は先づ心眼を以て東方の佛の端嚴なる姿を見、漸々に他の諸佛にも及び、

心想利なるが故に遍く十方の一切の諸佛を見たてまつる。

といふに至る。此に至つて心に歡喜を生ずると共に、更にまた己を責めて、

大乘に因るが故に大士を見ることを得、大士の力に因るが故に諸佛を見たてまつることを得たり。諸佛を見たてまつると雖も猶ほ未だ了々ならず。目を閉づれば則ち見、目を開けば則ち失ふ。

といひ、五體を地に投じて諸佛を禮し、



常に世間に在して色の中の色なり。我何の罪ありて見たてまつることを得る。

と深く懺悔するのである。斯く懺悔し已れば普賢菩薩更に此の人の前に出現して、行住坐臥にその側を離れず、夢の中に於ても之が爲に法を説く。行者は諸佛菩薩の所説の法を心に忘れず、夢に過去の七佛を見たてまつり、又その大乘經典を稱讚したまふを聞いて心に歡喜を覺え、遍く十方の佛を禮拜する。茲に於て普賢は行者に向つて其の過去に於て犯せる一切の罪事を説いて、

黒惡の一切の罪事を、諸の世尊に向ひたてまつり口に自ら發露せよ。

とて懺悔を勧むるのである。

斯く懺悔し已れば其の心清淨にして、諸佛現前三昧を得るやうになる。諸佛現前三昧といふは、その心常に寂靜にして散亂せず、常に諸佛と共に在る想を爲して居ることである。斯くて後法華經にあるが如くに六根清淨なることを得て、

身心歡喜して諸の惡想無く、心是の法に純にして法と相應す。

といふ境界となり、無量の佛を見たてまつる。その時に諸佛は右の手を以て行者の頭を摩で、之に語りたまはく、

善い哉善い哉、大乘を行する者、大莊嚴の心を發せる者、大乘を念する者なり。我等昔日菩提心を發せる時皆亦是の如し。汝懺懺にして失はざれ。我等先世に

大乘を行ぜるが故に今清淨正遍知の身と成れり。汝今亦當に勤修して懈らざるべし。此の大乘經典は諸佛の寶藏なり、十方三世諸佛の眼目なり、三世の諸の如來を出生する種なり。此の經を持つ者は即ち佛身を持ち即ち佛事を行するなり。當に知るべし是の人は即ち是れ諸佛の所使なり。諸佛世尊の衣に覆はる。諸佛如來の眞實の法の子なり。汝大乘を行じて法種を斷ぜざれ。

此の語を聞いて東方を見ると、東方の世界は瑠璃を地と爲し寶樹相列り、その下に一々師子の座あつて光明を放ち一々に普賢菩薩と白象との姿がある。しかし佛の御姿は更に見えぬ。行者は即ち自ら責めて、

我何の罪あつて但だ寶地寶座及び寶樹を見て諸佛を見たてまつらざる。

といふ。その時に一々の座の上に佛の御姿が現はれる。行者は心大に歡喜して更に大乘の經典を誦習する。その時空中に聲あつて此の行者を讚歎し、

汝大乘を行する功德の因縁により能く諸佛を見たてまつる。今諸佛世尊を見たとてまつると雖も而も釋迦牟尼佛分身の諸佛及び多寶佛塔を見たてまつること能はず。

とある。因て行者はなほ勤めて大乘經典を誦習すると、即ち夢の中に於て釋迦牟尼佛が大集と共に靈鷲山に在して法華經を説きたまふさまを見る。行者は大に歡喜すると共に、なほ『我を懃むが故に我が前に身を現したまへ』と



請ふ。茲に於て釋迦牟尼佛及び分身の諸佛はじめて其の前に現はれたまふ。時に普賢菩薩の身の光また行者の身を照し、行者は、

自ら過去無數百千の佛の所にして大乘經典を受持讀誦せることを憶ひ自ら故の身を見ること了々分明なり。

といふが如き通力を具ふるに至り、大地より涌出せる蓮華の上に坐せる諸菩薩は、更に行者に對して六根を清淨ならしむるの道を説く。或は「汝當に佛を念すべし」といひ、或は「汝當に法を念すべし」といひ、或は「汝當に僧を念すべし」といひ、或は「戒を念すべし」、「施を念すべし」、「天を念すべし」といふ。また

汝今應に諸佛の前に於て先の罪を發露して至誠に懺悔すべし。

といふ。又更に

無量の世に於て眼根の因縁をもて諸色に貪著す。色に著するを以ての故に諸塵を貪愛す。

と戒め、

色汝が眼を壞つて恩愛の奴と爲る。故に色汝を使ひ三界を經歷せしむ。此の弊使をもて盲にして見る所なし。今大乘方等經典を誦す。此の經の中に十方の諸佛色身不滅なるを説く。汝今見ることを得て審實にして爾りや不や。眼

根不善にして汝を傷害すること多し。我が語に隨順して諸佛釋迦牟尼佛に歸向したてまつり汝が眼根の所有の罪咎を説け。

と勸むる。行者は因て吾が眼によつて作れる罪を發露して、諸佛と普賢菩薩との哀愍覆護を請ひ、五體を地に投じて、大乘を正念して心に忘れ捨てず、眼根はじめて眞に清淨となる。斯くて後また多寶佛塔の大地より涌出するを見たてまつりて、心更に歡喜し、また普賢の所に至つて合掌し、「大師我に悔過を教へたまへ」と請ふのである。

既に眼根の罪を懺悔し已り、眼根は全く清淨になつたのであるが、なほ此の外にも遠い過去からの罪が残つて居る。因て普賢菩薩は行者に向ひ、次には耳根の罪を懺悔せよと教ゆるのである。即ち普賢は

汝多劫の中に於て耳根の因縁をもて外の聲に隨逐し妙なる音を聞く時は心に惑著を生じ惡き聲を聞く時は百八種の煩惱の賊害を起す。此の如き惡聲の報惡事を得恒に惡聲を聞きて諸の攀縁を生ず。顛倒して聽くが故に當に惡道邊地邪見の法を聞かざる處に墮すべし。

と説いて懺悔を勧め、行者は五體を地に投じて過去に犯せる罪を説き、

我多劫より乃至今身まで耳根の因縁をもて聲を聞きて惑著すること膠の艸に著くが如し諸の惡聲を聞く時は煩惱の毒を起し處々に惑著して暫くも停る時無し。此の弊聲を出して我が識神を勞し三塗に墜墮せしむ。今始めて覺知し



て、諸の世尊に向ひて發露懺悔す。

と誠心を以て懺悔する。その時多寶佛の身より大光明を放ち、東方及び十方界を照す。その光明の中に無量の諸佛の姿を見、また言を發して行者を讚め、

汝今大乘經典を讀誦す、汝が誦する所は是れ佛の境界なり。

といひ給ふを聞く。耳根の罪に就ての懺悔こゝに終り、耳根全く清淨である。

次に普賢菩薩は行者に向ひ「汝は無量劫に於て香を食るが故に多くの罪を作つて居る、之に就て懺悔しなければならぬ」と教へ、その懺悔の方法に就ては、

汝今應に大乘の因を觀すべし。大乘の因とは諸法實相なり。

とある。因て行者は五體を地に投じて懺悔し、釋迦多寶その他の諸佛を禮拜し、供養し讚歎し、その前に於て己が鼻根によつて作れる凡ての罪を説き、

此の如き惡業を今日發露し、諸佛正法の王に歸向したてまつりて說罪懺悔す。

といひ、懺悔し已つてなほ身心懈らずして大乘經典を讀誦すること久しくして、鼻根全く清淨である。

時に空中に聲あつて、舌根所作の惡業を懺悔せよと勧め、「妄言、綺語、惡口兩舌、誹謗妄語し、邪見の語を讚歎し、無益の語を説く等の衆罪を皆懺悔すべきである」といひ、

諸佛如來は是れ汝が慈父なり。汝當に自ら舌根所作の不善惡業を説くべし。

といふ。行者は之を聞いて五體を地に投じ、遍く十方の佛を禮拜して

此の舌の過患は無量無邊なり。諸の惡業の刺は舌根より出づ。正法輪を斷ずること此の舌より起る。此の如き惡舌は功德の種を斷ず。非義の中に於て多端に強て説き、邪見を讚歎すること火に薪を益すが如し。猶ほ猛火の衆生を傷害するが如し。毒を飲める者の瘡疣なくして死するが如し。

といひ、諸佛の大乘を説きたまふ聲を聞き心大に歡喜し、更に誦習して、終に懈らざるにより、舌根全く清淨となる。

時にまた空中に聲あつて「汝當に身心懺悔すべし」といひ、また「身には殺盜嬌を行ひ、心には諸の不善を念ずるのである、其等の不善の業を盡く懺悔せよ」といふ。行者は之を聞いて更に「我今何れの處にして懺悔の法を行ふべきか」を問ふ。時にまた空中に聲あつて、

釋迦牟尼佛をば毗盧遮那、遍一切處と名けたてまつる。其の佛の住處を常寂光と名く。

といひ、此の佛と佛の住處とを念じて後、また十方の佛を念すべしといふ。行者が十方の佛を念する時、十方の佛はその前に現はれたまひ、其の能く大乘を讀誦することを稱讚したまひ、

心を觀するに心無し、顛倒の想よりして起る。此の如き相心は妄想よりして起る。空中の風の依止する處無きが如し。是の如き法相は生ぜず没せず。何者



か是れ罪何者か是れ福。我が心自ら空なれば罪福主無し。  
と教へられ更に

諸法は解脱なり滅諦なり寂靜なり。是の如き相をば大懺悔と名け大莊嚴懺悔  
と名け無罪相懺悔と名け破壊心識と名け。此の懺悔を行する者は身心清淨に  
して法の中に住せざること猶ほ流るゝ水の如し。念々の中に普賢菩薩及び十  
方の佛を見たてまつることを得ん。

とある。諸法の實相を知れば、一切の煩惱は痕もなく除かれる。これが即ち眞の懺悔である。故に懺悔の法といふ  
のも要するに大乘を習好するより外にはないのである。

釋迦牟尼佛は阿難等の間に答へて以上の觀普賢行法を説きたまひ、更に重ねて

佛滅度の後佛の諸弟子若し惡不善業を懺悔すること有らば、但だ當に大乘經典  
を誦讀すべし。此の方等經は是れ諸佛の眼なり。諸佛は之によつて五眼を具  
することを得たまへり。

といひ、尙ほまた

其れ大乘方等經典を誦讀すること有らば、當に知るべし此の人は佛の功德を具

して諸惡永く滅し、佛慧より生ずるなり。

と仰せられた。大乘の教へは方正平等なるが故に名けて方等といふのである。佛は斯く説き終つて、更に此の意を  
述べんが爲に偈を説かれた。其の偈に於ては、先づ第一に眼根による不善業を除かんが爲には、

但だ當に大乘を誦し、第一義を思念すべし。

とある。次に耳根に就ては

耳根は亂れたる聲を聞き、和合の義を壞亂す。是に由つて枉心を起すこと猶ほ  
癡なる猿猴の如し。但だ當に大乘を誦して法の空無相を觀すべし。

とある。次には鼻根が諸の香に執著して種々の惑を生ずることを説き、

若し大乘經を誦し、法の如實際を觀すれば、永く諸の惡業を離れて後世に復た生  
ぜず。

とある。次には舌根によつて惡口の不善業を生ずることを説き、

若し自ら調順せんと欲せば、應に勤めて慈悲を修し、法の眞寂の義を思ひて諸の  
分別の想無かるべし。

とある。次には心の常に動いて種々の惑を生ずることを説き、



若し折伏せんと欲せば當に勤めて大乘を誦し佛の大覺身力無畏の所成を念じ  
たてまつるべし。

とある。終りには身に就て、

身はこれ機關の主塵の風に隨ひて轉するが如し。六賊中に遊戯して自在にし  
て罣礙無し。

とある。六賊とは即ち六根によりて生ずる惑のことである。之を除くためには

當に大乘經を誦して諸の菩薩の母を念すべし。

とある。大乘は菩薩を生ずるが故に、之を菩薩の母といふのである。以上六根に就て一々に説き終り、之を收束し  
て、

一切業障海は皆妄想よりして生ず。若し懺悔せんと欲せば端坐して實相を思  
へ。衆罪は霜露の如し慧日能く消除す。是の故に應に至心に六情根を懺悔す  
べし。

といふを以て偈を終られた。

佛は此の偈を説き已り、又此の如き持法者は諸の佛菩薩の共に讚歎する所なることを説かれ、更に御自身及び十  
方の佛の過去を語り、皆大乘を學ぶことによつて佛と成れる者であるとして、

大乘眞實の義を思ふに因るが故に百萬億阿僧祇劫の生死の罪を除却しき。此  
の勝妙の懺悔の法に因るが故に今十方に於て各佛と爲ることを得たまへり。

と告げられた。普賢は文殊と相對するもので、普賢は理を掌り文殊は智を掌るのである。されば普賢を觀する者は  
即ち眞實の理と一致し得るものである。是れ即ち眞の懺悔である。それ故に佛は

佛滅度の後佛の諸の弟子佛語に隨順して懺悔を行ぜん者は當に知るべし是の  
人は普賢の行を行するなり。普賢の行を行する者は惡相及び惡業報を見ず。

と告げられ、又

是を菩薩戒を具足せる者と名く。

と仰せられた。受戒といふは「今より佛の弟子となり、佛法に歸依し、佛戒に背くまい」と誓ふことである。眞に  
懺悔を爲し得た者の行ひは、即ち佛の制せられたる菩薩戒と一致すべきである。

受戒したものでなければ佛弟子とはいはれぬのである。受戒には定まつたる儀式もあるが、それよりも大切な  
は心の持ち方である。若し遍く十方の佛を禮して、己が罪を懺悔し已り、更に

今日方等經典を受持したてまつる。乃至失命し設ひ地獄に墮ちて無量の苦を  
受くるとも終に諸佛の正法を毀謗せじ。

と誓ひ、更にまた



我今日に於て菩提心を發しつ。此の功德を以て普く一切を度せん。

と誓ひ、更に一切の佛及び菩薩を禮し、大乘の經典を誦讀して、心に第一甚深の法を念ずることを怠らぬならば之を菩薩戒を具足せるものと稱すべきである。佛は之を稱して、

當に知るべし此の人は念々の頃に於て、一切の罪垢永く盡きて餘無けん。是を沙門の法戒を具足し諸の威儀を具して、人天一切の供養を受くべきものと名くと仰せられた。

最後に佛の説かれたのは刹利居士の懺悔の法である。刹利とは即ち刹提利のこと、國王及び武士等を含む階級である。居士とは其の中流以上の人々のことで、要するに刹利居士とは國民一般を指導すべき地位に在る人々である。此等の人々は勢力があるだけに、心が正しくなければ世間に及ぼす害毒も極めて大きく、心が正しければ世間に及ぼす善き感化も亦極めて大きい。故に佛は

若し王者大臣婆羅門居士長者宰官是の諸人等貪求して厭くこと無く五逆罪を作り、方等經を謗じ十惡業を具せん。是の大惡報として惡道に墮つべきこと暴雨にも過ぎ、必定して當に阿鼻地獄に墮つべし。

と戒められ、然る後に其の懺悔の法を説かれたのである。其の懺悔の法は凡て五ヶ條に別れて居る。第一には但だ當に正心にして三寶を謗せず、出家を障へず、梵行人の爲に惡留難を作さざ

るべし。應に懸念して六念の法を修すべし。亦當に大乘を持つ者を供給し供養すべし。必ず禮拜すべし。應に甚深の經法、第一義空を憶念すべし。

とある。梵行人とは出家して清淨の行を勵む者である。留難とは之に障礙を與ふることである。六念とは佛を念じ法を念じ、僧を念じ、戒を念じ、施を念じ、天を念ずるのである。第一義空とは即ち絶對の理をいふのである。懺悔法の第二には

父母に孝養し師長を恭敬す。

とある。其の第三には

正法をもて國を治め人民を邪枉せず。

とある。而して其の第四には

六齋日に於て諸の境内に敕して力の及ぶ所の處に不殺を行ぜしむ。

とある。終りの第五には

但だ當に深く因果を信じ、一實の道を信じ佛は滅したまはずと知るべし。

とある。此の五事を修習し、勤めて怠らぬならば過去の有らゆる罪を滅し、永く諸佛の護助を受くべきである。佛は

若し此の如き懺悔の法を修習すること有らん時は、當に知るべし此の人は慚愧



の服くを著き諸佛しよぶつに護助ごじよせられ、久ひさしからずして當まさに阿耨多羅三藐三菩提あうくとらみやくさんぼだいを成じやうすべし。

といふを以て説法を終られた。彌勒等の諸菩薩及び阿難は、佛の所説を聞きたてまつりて歡喜し奉行した。

以上は觀普賢菩薩行法經の梗概であるが、之によつて懺悔といふことの眞の意義を明かにすべきである。懺悔は菩薩行の基礎となるべきものである。大乘の教へに歸依し、佛の御心を以て吾が心と爲し、世のため人のために力を盡さうと思ひ定むることが眞の懺悔である。法華經は成佛の直道を説き示されたものであるが、眞の懺悔の意義を説かれたる觀普賢菩薩行法經が法華經の所説を補ふに力あるものであることは、誰も疑ひ得ぬ所であらう。

此の觀普賢菩薩行法經は無量義經及び法華經と併せて法華三部經と稱せらるゝものである。即ち無量義經は法華經に入るの序となるべき性質のものであるから之を開經といひ、普賢經は法華經の所説を補ふべき性質のものであるから之を結經といひ、此の開結二經を法華經と併せて三部といふのである。但し之を併せて法華三部と稱することは何れの時に始まるか明かでない。尤も天台大師が壯時に大賢山に於て修學せられた時のことを其の弟子の章安が書いた中に、

法華、無量義、普賢觀經を誦し、二句に涉りて三部究竟す。

とあるを以て見れば、その頃から既に定まつて居たものであらう。(時は陳の初年、吾が欽明天皇の御宇である。)吾が國では傳教大師の時から、三部を併せ讀まれ、以て今日に及んで居る。

無量義經には漢譯が二種あるといふが、その一たる劉宋の求那跋陀羅譯のものは散佚して今に傳はらぬ。今に傳はるものは蕭齊の曇摩伽陀耶舍譯の無量義經一卷で、三品に分れて居る。此の譯者は中天竺の僧であるが、蕭齊と

は南北朝時代の齊で、國王が蕭氏であつたので斯く呼ぶものである。此經は永明三年より世に弘まつたといふが、時に吾が國は顯宗天皇の御宇である。(西曆四八五年)

普賢經には三種の漢譯があるといふが、その中に於て東晋の祇多蜜譯の普賢觀經と、後秦の鳩摩羅什(法華經の譯者と同人)譯の觀普賢菩薩經とは散佚して傳はらず、今に傳はつて居るものは劉宋の曇摩蜜多譯の觀普賢菩薩行法經一卷である。曇摩蜜多といふは北天竺の僧であるが、劉宋といふは南北朝時代の宋で、國王が劉氏であつたので斯く呼ぶものである。此の經は宋の元嘉年中の譯といへば、吾が允恭天皇の御宇に當り、三部の中では最も舊い譯である。(西曆四二〇年頃)



## 妙法蓮華經概説

小林 一郎 述

### 一、日本國と法華經

吾が日本國は法華經と特に深き縁ある國である。吾が國に佛教の傳はつたのは何れの時に始まるか明かでないが上古から朝鮮と交通が開けて居たのであるから、佛教もいつとは無しに傳はり來つたものであらう。欽明天皇十三年に百濟より佛像及び經論を獻じたのは日本書紀にも記され、誰もよく知る所であるが、それより前に繼體天皇十六年に當り、支那梁朝の人なる司馬達等が佛像及び佛舍利を携へて來朝し、大和に住して居た。その孫の鞍作鳥といふものは佛師であつたが、推古天皇十四年に此の鞍作鳥に賜へる勅には、彼の一家が代々佛教のために力を盡したことを御稱めになつてある。斯ういふ熱心な者もあつて、佛教が漸く此の國に弘まるべき見込が立つたので、欽明天皇の御宇に百濟王から公式に佛像及び經論を獻じたものであらう。日本書紀、欽明天皇十三年(西曆五五二年)の下には、

冬十月百濟の聖明王、西部姫氏達率怒唎斯致契等を遣はして、釋迦佛の金銅の像一軀、幡蓋若干、經論若干卷を獻ず。



とある。而して之に添へたる百濟王の上表には佛法の功德を説いて、

是の法は諸法の中に於て最も殊勝なり。解し難く入り難く、周公孔子も尙ほ知ること能はず。此の法能く無量無邊の福德果報を生じ、乃至無上菩薩を成辨す。譬へば人の意に隨ふ寶を懐き、用ゆべき所に逐ひて盡く情のまゝなるが如く、此の妙法も亦復た然り。祈願情のまゝに乏しき所無し。且夫れ遠きは天竺より爰に三韓に泊ぶまで教に依りて奉持し、尊敬せざること無し。是に於て百濟の王臣明、謹んで倍臣怒喇斯致契を遣はして帝國に傳へ奉り畿内に流通す。佛の所記に我が法は東に流るといふを果すなり。とある。此の末尾の語は殊に注意すべきものである。

此の佛像經論等を受くべきか否かに就ては諸臣の意見が一致しなかつたので、勅命によつて之を蘇我氏に授けられ、蘇我氏は之を其の家に奉安した。その後敏達天皇十四年には「宜しく佛法を斷つべし」との詔を發せられたこともあり、弘通も思はしくなかつたが、推古天皇二年に至り、初めて佛教を興隆すべき詔が發せられた。日本書紀には、

春二月丙寅朔、皇太子及び大臣に詔して三寶を興隆せしむ。是の時に諸臣連等各君親の恩の爲に競ひて佛舎を造る。即ち是を寺と謂ふ。

とある。皇太子とは即ち聖德太子のことであつて、太子は其の前年即ち推古天皇元年より攝政の大任に就かせられたのである。されば斯る詔を發せられたのも太子の御力に依るものと知るべきである。太子は用明天皇（推古天皇

の御兄に當る）の第二子で、母の皇后を久穗部間人皇女と申し、書紀には

皇后懷妊開胎の日、禁中を巡行し、諸司を監察す。馬官に至り乃ち厩の戸に當りて、勞せずして忽ちに産す。生れながらにして能く言ひ、聖智有り、壯なるに及び、一たびに十人の訴を聞きて、以て失なく能く辨す。兼て未然を知る。且内教を高麗の僧惠慈に習ひ、外典を博士覺智に學び並に悉く達す。

といつてある。此の如くに聰明なる太子が攝政の任に當り、凡て二十九年間御力を此の國の爲に盡させられたのである。日本國中の者が如何に深く太子に懐き奉つて居たかは、太子薨去の時の有様が

是の時諸王諸臣及び天下の百姓、悉く長老は愛兒を失ふが如くにして、鹽酢の味口に在れども嘗めず、少幼の者は慈なる父母を亡へるが如く、以て哭泣の聲行路に滿てり。乃ち耕夫は耜を止め、春女は杵せず。皆曰く、日月輝を失ひ天地既に崩る。今より以後誰をか恃まんやと。

と傳へらるゝによつても知るべきである。殊に永く傳へらるべきは太子が師とせられたる高麗の僧惠慈のことで、皇太子の爲に僧を請じて齋を設け、仍て親ら經を説くの日誓願して曰く、日本國に聖人有り、上宮豊聰耳太子といふ。固に天に縱されたり、玄聖の徳を以て日本の國に生れ、三統を苞貫し、先聖の宏猷を纂ぎ、三寶を恭敬し黎元の厄を救ふ。是れ實に大聖なり。今太子既に薨す。我國を異にすと離も心は斷金に在り。某獨り生くるも何の益有らんや。我來年二月五日を以て必ず死し、因て以て上宮太子に淨土に遇ひ、以て共に衆生を化せんと。是に惠慈期日に當りて死しぬ。



とある。異國人に斯くまで慕はれたる太子の御徳は、まことに古今に比倫すべき者なしとも稱すべきである。

此の如き太子が此の國に降誕せられたのは、佛教の永く此の國に榮ゆべき瑞兆と申すべきである。太子は推古天皇元年(西曆五九三年)に、二十一歳にして攝政となりたまひ、四十九歳にして薨去せられた。此の前後二十九年間、太子は佛教の興隆に全力を注がせられた。而して其の結果として國運は著しく發展したのである。時に支那は隋の代であつた。吾が仁徳天皇の御宇から支那は南北朝に分れ、種々なる國が代り立つて國內に統一がなかつた爲に、自然その勢が外へ延びなかつたのであるが、隋の文帝の興るに及んで全く之を統一した。それは太子が攝政となりたまへる四年前のことである。此より支那の勢力は先づ朝鮮に及び、漸く吾が國にも壓迫を加へ來べき状態となつた。然るに吾が國に於ては久しく豪族が相對立して、互ひに黨を作り派を分つて勢力を争ひ、一致協力して君に仕へ國を護るといふ精神が甚しく缺けて居た。太子が御作りになつた憲法の中に、私を去つて公に奉すべきことを反覆して御教へになつたのを見ても、その當時の時弊の在る所を推すべきである。

斯く内外共に多事多端の際に太子は國政を總攬すべき地位に立たせられたのである。而して先づ著眼せられたのは人の心を根本から立て直すことであつた。人の心が發して人の働きとなる、人の働きが集つて國の力となる。人の心の根本を固くしなければ國力の發展は望まれぬ。然るに人の心の根本が緩んで居る。之を立て直さなければならぬといふのが太子の著眼點であつた。太子は之が爲に佛法の興隆を思ひ立たれたのである。太子は佛に對して一身一家の福を祈ることを勧められたのではない。太子の憲法の第一條には

和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。

とある。眞の和合一致は人々が各その私心を捨つることに依つて、初めて出來得べきである。此の文に續いて、

人皆黨有り、亦達者少し。是を以て或は君父に順ならず、乍ち隣里に違ふ。

とあるは即ち私心の爲に誤られたる者の實狀である。なほ憲法の第十五條に

私に背き公に向ふは是れ臣の道なり。凡そ人私有れば必ず恨有り、憾有れば必ず同に非ず。同に非ざれば則ち私を以て公を妨げ、憾起れば則ち制に違ひ法を害す。

とあるは能く之を悉したる語である。然らば人々は如何にして能くその私を捨て、協力一致の實を擧ぐべきであるか。太子は佛法の力によつて此の事が必ず出來ると信ぜられたのである。故に憲法の第二條には

篤く三寶を敬へ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸萬國の極宗なり。何れの世、何れの人か是の法を貴ばざらん。人尤だ惡きは鮮し、能く教ゆれば之に従ふ。其れ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直うせん。

とある。太子が佛教の興隆に力を用ゐられたる御精神は之によつて充分に窺ひ得らるゝであらう。

太子は御一代の間に四天王寺、法隆寺等凡て十一寺を建立せられたが、それは人々をして一身一家の福を祈らしめんが爲ではなかつた。寺は佛法を弘むる中心である。佛法が弘まつて人の心が正しくなれば、國は必ず榮ゆべきである。此の國の民たる者は誰も皆此の國の爲に力を盡さねばならぬのであるが、就中國家の要路に立つ者は、その責が特に重い。即ち憲法の第七條に、



其れ賢哲官に任ずれば頌音則ち起り、奸者官を有すれば禍亂則ち繁し。世に生れながらにして知るは少きも、克く念へば聖と作る。事大小と無く、人を得れば則ち治まる。時に急緩無く賢に遇へば自ら寛なり。此に因りて國家永久にして社稷危きことなし。

とある通りである。此の趣意によつて、太子は親ら朝廷百官の爲に大乘の經典を講述せられたのである。日本書紀推古天皇十四年の下に、

秋七月天皇、皇太子に請ひて勝鬘經を講ぜしむ。三日にして之を説き竟る。是の歳皇太子また法華經を岡本の宮に講ず。天皇大に喜びて、播磨の國の水田百町を皇太子に施す。因て以て斑鳩寺に納る。

とある。勝鬘經は勝鬘夫人が釋尊の前に立つて、其の領解し得たる所を説き、釋尊は其の全く佛意に稱へることを許され、更に汎く之を世に弘むべきことを勧めたまへる次第を記せるものであるが、此の勝鬘が佛前に於て述べたる十大受なるものは、所謂菩薩行の精神を最もよく現はせるものである。

十大受といふは、即ち勝鬘が今後必ず實行すべきことを誓へる十項目である。その十項目は次の如くである。

世尊、我今日より乃ち菩提に至るまで、所受の戒に於て犯心を起さじ。(菩提に至るまでといふは佛智を具ふるに至るまでといふ意である。)

世尊、我今日より乃ち菩提に至るまで、諸の尊長に於て慢心を起さじ。

世尊我今日より乃ち菩提に至るまで、諸の衆生に於て恚心を起さじ。

世尊、我今日より乃ち菩提に至るまで、他の身色及び外の衆具に於て嫉心を起さじ。

世尊、我今日より乃ち菩提に至るまで、内外の法に於て慳心を起さじ。

世尊、我今日より乃ち菩提に至るまで、自ら己が爲に財物を受畜せず、凡そ受くる所有るは悉く貧苦の衆生を成熟するが爲にせん。

世尊、我今日より乃ち菩提に至るまで、自ら己が爲に四攝法を行ぜず、一切衆生の爲の故に無憂染心、無厭足心、無罣礙心を以て衆生を攝受せん。

世尊、我今日より乃ち菩提に至るまで、若し孤獨幽繫疾病、種々厄難困苦の衆生を見ては、終に暫くも捨てず、必ず安穩ならしめんと欲し、義を以て饒益し、衆苦を脱せしめて然して後に乃ち捨てん。

世尊、我今日より乃ち菩提に至るまで、若し捕と養と、衆の惡律儀のもの及び諸の犯戒のものを見れば終に棄捨てず、我力を得ん時彼々の處に於て此の衆生を見ては、應に折伏すべき者は而も之を折伏し、應に攝受すべき者は而も之を攝受せん。何を以ての故に。折伏と攝受とを以ての故に法をして久しく住せしむ。法久しく住すれば天人充滿し、惡道減少して、能く如來所轉の法輪に於て而も隨て轉ずることを得ん。是の利を見るが故に、救攝して捨てじ。

世尊、我今日より乃ち菩提に至るまで、正法を攝受して終に忘失せじ。何を以ての故に。法を忘失する者は則ち大乘を忘す。大乘を忘する者は則ち波羅蜜を忘す。波羅蜜を忘する者は則ち大乘を欲せず。若し菩薩にして大乘



を決定せざる者は、則ち正法を攝するの欲を得ること能はず、所樂に隨ひ入りて、永く凡夫地を越ゆるに堪任せず。我是の如き無量の大道を見、又未來に正法を攝受する菩薩摩訶薩の無量の福利を見るが故に、此の十大受を受く。

此の十項目を精しく讀むものは、大乘佛教なるものが吾等の實生活と如何に密切なる關係を有するかを知るべきである。太子が法華經を講ずるに先つて、勝鬘經を講ぜられたるは、用意誠に周到と稱すべきである。

太子は朝廷の百官のために此の二經を講ぜらるゝと共に、更に後世の爲にとの深い思召から維摩經、勝鬘經及び法華經の義疏、御作りになつた。此等三經の義疏は何れも今日に傳はつて居る。就中その法華義疏は、太子の親筆が今日でも帝室の御物として保存せられてある。又其の儘に版にされたものも汎く頒布せられて居る。千數百年を隔てた吾等が太子の御著によつて法華經の深義を解し得るのみならず、其の御筆の蹟までも拜し得るのは返す返すも貴い次第である。其の法華義疏の劈頭には次の如くに此の經の貴むべき所以が述べられてある。

夫れ妙法蓮華經は、蓋し是れ總じて萬善を取りて、合して一因と爲るの豐田、七百の近壽轉じて長遠と成るの神藥なり。若し釋迦如來此の土に應現するの大意を論ずれば、將に宜しく此の經教を演べて同歸の妙因を修し、莫二の大果を得しめんと欲す。但し衆生宿殖善微にして神闇根鈍なり。五濁大機を障へ、六弊其の慧眼を掩ふを以て、卒に一乘因果の大理を聞く可からず。所以に如來時の所宜に隨ひて、初には鹿苑に就て三乘の別跡を開き、各趣の近果を感じしめ、此より以來復た平しく無相を説きて同修を勧め、或は中道を明して褒貶すと雖も、猶ほ三

因別果の相を明して物の機を養育したまふ。是に於て衆生年を歴、月を累ね、教を蒙りて修行し、漸々に解を増す。王城に於て始めて一大乘の機を發すに至りて、如來出世の大意に稱會す。是を以て如來即ち萬德の嚴軀を動して眞金の妙口を開き、廣く萬善同歸の理を明して莫二の大果を得しめたまふ。

法華經が諸經の王と稱せらるゝ所以は、之によつてほど悉されて居る。尙ほ此の義疏の初めに、此は是れ大委國上宮王の私集にして、海彼の本に非ず。

とあるも注意すべきである。海彼とは外國のことをいふので、此の義疏は決して支那や朝鮮の學者の著述を寫したものである。日本國の聖德太子が自ら著はす所であるといふことを明記せられたのである。

太子が斯くまでに法華經を重んぜられたのは少しも不思議なことではない。法華經の信仰は眞に國運發展の基礎となるべきものである。釋尊は法華經の方便品に於て

我本誓願を立て、一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき。我が昔の所願の如き、今已に満足しぬ。

と仰せられた。釋尊は其の説法の初めから、吾等一切衆生に佛と成るべき道を御示しにしたいと思はれたのである。しかし聽く者の機根が低くて、左様に高遠なことを説かれても到底之を解すべき力もなく、勿論その教へに隨つて之を實行すべき力もない。それ故に四十餘年の間種々の方便を以て之を教へ導かれ、最後に法華經に至つて眞實を説かれたのである。眞實を説くとは即ち佛と成るべき道を打明けらるゝことである。故に此の經を説くことに



依つて、最初の誓願が達せられたと仰せられたのである。されば此の經を信解するものは皆共に佛と成るべきである。勿論凡夫と佛との距離は非常に遠いものには相違ないが、吾等が共に此の法華經を信じ、此の經の中に教へられた所を吾が身に實行することに努むるならば、吾等は一步より一步と佛の境界に近づき行くべきである。

又法華經の神力品に於ては、十方の世界の衆生が共に此の娑婆世界に向つて『南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛』と稱して禮拜し、種々の物を以て供養したことが記されてあつて、

時に十方世界通達無礙にして一佛土の如し。

とある。抑も吾等の住する所の此の土が娑婆と稱せらるゝのは、吾等が皆凡夫であるからである。娑婆とは即ち堪忍の義である。凡夫の共に住む所は罪過も多く紛争も多くて、堪忍しなければ一日も送り得られぬ状態であるから此處を娑婆と稱するのである。而して佛の住みたまふ所は寂光淨土と名けられてある。寂とは常住不變の義である。凡夫の住む所は娑婆、佛の住みたまふ所は寂光淨土。住む者によつて其の世界がちがふのである。されば凡夫が佛に近きものになるに隨ひ、娑婆世界は漸く寂光淨土に近づき行くべきである。寂光淨土は西方にも東方にも求むるには及ばぬ。法華經の弘まる所は、何れも皆寂光淨土となるべきである。神力品に記さるゝ所は斯る理想的の時代の實況に外ならぬものである。斯る法華經が此の日本國に弘まり、日本國中の人が共に寂光淨土を此處に實現せんと意氣込みを以て世に立つならば、太子の御望みになつた通りの世の中になるべきは、疑ひを容れぬことである。太子が此の經を重んぜられたのも偶然ではない。後に至り傳教大師が四天王寺の聖德太子廟に捧げたる願文には『我

が法華の聖德太子は』云々とある。

太子が攝政となり給へる時に、支那に於ては天台大師が法華經の弘通に力を盡して居た。大師は隋の開皇十七年に六十歳を以て入滅したのであるが、時は吾が推古天皇五年に當るのである。太子は推古天皇元年に二十一歳にして攝政となり四十九歳にして薨去せられたのであるから、太子と天台大師とは暫く時を同うして居られたわけである。しかし恐らく大師は日本に斯る尊い皇太子の在すことを知らず、太子も亦支那に斯る高德の僧あることを知らずして終られたのであらう。支那に於ては天台の著述たる三大部(後の章に委しくいふ)の出るに及んで、法華經が諸經の王たること、釋尊の眞實の教は獨り法華經によつてのみ知らるべきことが初めて明かになつたのである。而して天台の著述は唐僧鑒眞が孝謙天皇の天平勝寶六年に來朝の際(聖德太子薨去後百三十三年に當る)初めて携へ來つたのであるから、太子は天台の説などは全く御存知なく、御自身の御考へを以て法華經を斯くも尊重せられたことは明である。吾等は此の事がまことに貴く存ぜらるゝのである。孟子は舜と文王とを比較して、

地の相去るや千有餘里、世の相後るゝや千有餘歲。志を得て中國に行ふ、符節を合するが若し。先聖後聖その揆一なり。

といつた。それと此とは、やゝ趣を異にするが、相距ること千里なる日本と支那とに、互ひに相識らぬ兩偉人が共に法華經の弘通に力を盡されたといふことは佛教史上に特筆せらるべき事ではないか。

太子は佛教を興隆することによつて國運發展の基礎を固めんとせられたのであるが、太子が攝政の大任に當らせ



られたる二十九年間に、其の實績は美事に擧つたのである。政治上の有らゆる弊害は革まり、蘇我氏その他の豪族も更に横暴なことをせず、國民は皆その業に勵み、國の實力は著しく加はつて來た。推古天皇十六年に隋の煬帝からの使者が持來つた國書には「皇帝倭皇に問ふ」とあり、又「深氣至誠にして遠く朝貢を修む、丹欸の美、朕嘉するあり」ともあつて、強大なる國が弱少の國に對する驕傲の態度が明かに見えて居る。然るに太子が彼に遣はされたる報書には

東天皇敬ひて西皇帝に白す。使人鴻臚寺の掌客裴世清等至り、久憶方に解けぬ。季秋薄冷、尊候何如。云々  
とあつて、全く對等の語氣である。是れは單に國威を傷けまいといふ御考へとのみは思はれぬ。如何に外面を繕つても、國の實力が微弱であれば忽ち彼に見透かされて、侮りを受くるに至るべきである。彼の侮りを受けぬだけの自信があればこそ、斯る堂々たる態度を取らるゝことも出來たのである。太子の御事蹟を明かにすると共に、吾等は正しき信仰の力の如何に偉大なるかを深くも學び知り得べきである。

此より後歲月を経るに隨ひ、佛教は益々世に弘まり、歴代の天皇何れも御歸依あらせられたのであるが、太子の薨去後百六十七年に至り、初めて法華の道場が比叡山に建てられた。之を建てた者は傳教大師（名は最澄、傳教といふは清和天皇の貞觀八年に賜はりたる謚號である。）である。大師は近江の人で、十二歳の時に南都大安寺の行表に従つて出家した。其の頃支那は唐代であつたが、唐より吾が國へ傳はつたものは凡て六宗であつた。即ち小乗の宗では俱舍、成實、律の三宗。大乘の宗では三論、法相、華嚴の三宗である。尤も俱舍成實の二宗は獨立して弘ま

つたのでなく、他の宗の人が之を兼學したのではあるが、兎も角も南都の學僧は此等六宗の教義を共に學んだのである。大師も他の人々と共に六宗を兼學したのであるが、苟くも法師として人を教へ世を導かんとするに、尋常一様の修行で其の力が得らるゝものではないと思ひ定め、延暦四年十九歳の七月、比叡山へ分け上つて草庵を結んだ。大師の父三津百枝が此の山の麓に於て、七日の間至心懺悔したる功德により大師を得たといふ縁で、大師は特に此の山を擇んだものと思はれる。其の時佛前に於て、

得難くして移り易きは其れ人身なり、發し難くして忘れ易きは斯れ善心なり。

と自ら省み、

愚中の極愚、狂中の極狂、塵禿の有情、底下の最澄、上は諸佛に違し、中は皇法に背き、下は孝禮を缺けり。

と深く懺悔し、仍て五大誓願を立てた。即ち

我未だ六根相似の位を得ざるより以還は出假せず。

未だ理を照す心を得ざるより以還は才藝あらず。

未だ淨戒を具足することを得ざるより以還は檀主の法會に預らず。

未だ般若の心を得ざるより以還は世間人事の務に著せず。相似の位を除く。

三際の間、所修の功德、獨り己が身に受けず、普く有識に回旋して悉く皆無上菩提を得しめん。

といふのである。天台大師は吾等が大乘の教を習學して佛の境界に達するまでの間を六段に分けて、之を六即と名



けたのであるが、その中から數へて第四段の所を相似即といふ。此の地位に至れば六根清淨になるのである。六根相似とは即ち此の事である。又出假とは世俗の人の中に交つて教を説くことである。此の第一の誓願は自分の力の足らぬ内に、人の前で法を説くことはすまいと誓つたのである。第四の誓願に般若とあるは即ち智慧のことでこれは菩薩道を勵むことに依つてのみ得らるべきものである。第五の誓願に三際とあるは過去、現在、未來のことで三際の間とは即ち現在をいふのである。僅かに十九歳の青年にして、此の如き誓願を立てたとは驚歎すべきことではないか。

大師は此の誓願を立て、法華、金光明、般若等の大乘經典を日々に讀誦して居たが、時に壽興禪師（此の人は朝廷に召されて内供奉となり、當時學徳共に高きを以て聞えた人である。）が彼の五大誓願のことを聞いて大に敬服し親しき交りを結んで『起信論疏』『華嚴五教華』等を貸し與へた。大師は此等の書の中に屢々天台大師の説を引用してあるのを見て、如何にもして天台の著を究めたいものであると熱望して居たが、遂にその志を達して、曩に唐僧鑒眞が携へ來つたる天台の三大部其の他を借りて寫すことが出來た。斯くて此等天台の著述を精讀するに及んで、釋尊の御本意に一致せるものは此の天台の教より外にないと思ひ定め、天台の志を嗣いで法華經の弘通に力を盡さうといふ決心を固めた。大師は後に至つて、

淺きは易く深きは難しとは釋迦の所判なり。淺きを去りて深きに就くは丈夫の心なり。天台大師は釋迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し、法華宗を助けて日本に弘通す。

といつたが、是れは大師の生涯を一貫したる精神であつた。大師は自ら深く期する所あり、乃ち比叡山の奥から材木を斫り出させ、此處に至てさゝやかながらも法華の道場の礎を据ゑた。

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我が立つ杣に冥加あらせたまへ

とは此の時の詠である。時に桓武天皇の延暦七年（西暦七八八年）大師は二十二歳であつた。

桓武天皇は實に英邁なる君主であらせられ、坂上田村麿、和氣清麿の如き名臣を重用せられて、大に國運發展の策を定められた。此の新時代に適せる新なる國都を奠めんと思召し立たれ、延暦三年には大和を去つて山城國長岡へ遷都せられたが、此の地は種々の點から國都として不適當であつたので、和氣清麿の説を容れて平安の地を相せられ、延暦十三年に至つて新都へ遷らせられた。此の新都の丑寅の方に聳ゆるものは即ち叡山である。天皇は夙に傳教大師の學徳共に高きことを聞召されたと見え、延暦十六年に至つて大師を召して内供奉に列せしめ、又近江國の正税を以て山の供費に充てしめられた。同十七年十一月、叡山に十講法會を開き、南都七大寺の碩學十人を招いて共に法華三部（法華經並に無量義經、觀普賢經）を講じた。これ本邦に於ける法華會の始めである。斯くして大師は朝野の尊信を一身に集めたる觀があつたけれども、是れのみでは未だ叡山の根柢が固まつたとは稱せられぬのであつた。南都は元明天皇の御宇より八朝、七十五年間の國都であり、又日本佛教の中心地である。彼の七大寺は何れも久しい歴史を有し、多くの高僧碩徳と稱せらるゝ人々が此に住して居たのである。如何に傳教大師の名が高くなつても新に興れる叡山が此等七大寺に拮抗し得るものとは遽かに認めらるべきで無い。況して法華經が諸經の



王たることを彼等諸宗の人々に承認せしむる如きは容易の業ではない。茲に於てか大師の歸依者たる和氣弘世、並に同眞綱の發願として、高雄寺に於ける會が開かるゝに至つたのである。

時は延暦二十一年、大師が三十六歳の正月であつた。大師は單身にして南都七大寺の代表的の碩學十餘人と會し天台の教義を談論し、彼等をして法華が最勝の經なることを承認せしめた。其の後南都の善議等の名を以て朝廷へ上つた謝表には、

竊かに天台の玄疏を見れば、釋迦一代の教を總括し、悉く其の趣を顯はして、所として通ぜざる無し。獨り諸宗に逾え、殊に一道を示す。其の中に説く所の甚深の妙理は、七箇の大寺六宗の學生、昔より未だ聞かざる所、會て未だ見ざる所、三論法相久年の諍ひ、渙焉として冰釋し、照然として既に明なり。猶ほ雲霧を披いて三光を見るが如し。聖徳の弘化より以降今に二百年の間講ずる所の經論、其の數多し。彼此理を争ひ、其の疑ひ未だ解けず。而して此の最妙の圓宗猶ほ未だ闡揚せられず。蓋し以ふに此の間の群生未だ圓味に應ぜざるか。伏して惟るに聖朝久しく如來の付屬を受け、深く純圓の機を結び、一妙の義理始めて乃ち興顯し、六宗の學衆初めて至極を悟る。

とあり、

譬へば猶ほ如來成道四十年の後乃ち法華を説き、悉く三乗の侶をして共に一實の車に駕せしむるが如し。

とまでいつてある。是れは天台の教義が諸宗に超え、獨り釋尊の御本意に一致せることを、諸宗に於て承認せるも

のである。

案するに法華經方便品に於て、釋尊は御一代の説法が盡く此の經によつて統一せらるべきことを自ら明言せられたる。

未だ會て説かざる所以は、説く時未だ至らざる故なり。今正しく是れ其の時なり、決定して大乘を説く。

と仰せられ、又獨り釋尊のみならず、有らゆる佛の説法が皆一に歸するものなることを説かれて、

十方佛土の中には唯だ一乗の法のみ有り、二も無く亦三も無し。

と仰せられた。されば此の法華經を弘むる者は諸經の中の所説が佛の方便の教に過ぎぬことを明かにし、諸經を信じたる者が共に皆此の法華經に歸一すべきことを勧めなければならぬ。是れ天台大師が

法華は折伏にして權門の理を破す。

と明言せる所以である。權門とは方便の經によつて立てられたる諸宗のことである。天台は嘗に之を理論として述べたのみでなく、陳の代の末に當つて自ら諸宗の學者と會して法華の教理を談論し、折伏を實行したのである。兎角に世俗の人は勢力ある宗門に歸依せんとする傾向を有するものであるが、涅槃經の中に於て釋尊は、末代の吾等の爲に信仰を決定すべき標準を示されて、

法に依つて人に依らざれ。

と仰せられた。其の説く所の法が正しく佛の御精神を傳へたものであるか否かを見分けて、之を信するか信ぜぬか



と決定するが宜い。説く人の地位とか勢力とかを眼中に置いてはならぬ。又之に歸依する人の數が多いか少いかなどいふことも問ふには及ばぬといふのである。併し諸宗共に我こそ佛の御精神に一致したものであると主張して居るのであるから、一般の人は何れに依るべきかを決定するに當惑せざるを得ぬ。斯る疑惑を除かんがためには、諸宗の代表者たるべき碩學が相會して、各その宗の教義を談論し、その勝劣を決することが最も公明正大なる方法といふべきである。天台傳教二師の心事の高潔にして、一點の私も無かつたことは之によつても推すべきである。

高雄寺に於ける對論によつて、法華經弘通の路にはもはや何の障りも無くなつたのであるが、傳教大師にはなほ最も重大なる事業が残つて居た。それは叡山に戒壇を建立するといふことである。戒壇とは受戒の式場である。苟くも佛敎に歸依したものは誰も皆受戒をしなければならぬ、これは佛敎に於て定まれる掟である。佛の弟子には四種ある、即ち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷である。前二者は出家の男と女、後二者は在家の男と女であるが、何れも受戒した者である。受戒の式に就ては種々の細かなる規定もあるが、其の精神とする所は、佛の敎に歸依するものが『佛の御敎へになつた所は必ず守りませう、佛の御戒めになつた所には必ず背きませぬ』と誓ふことに外ならぬ。佛の在世であれば、佛の御前に立つて斯る誓ひを立てるのであるが、佛の滅後に於ては和上、阿闍梨等を立てて受戒するのである。(前の觀普賢菩薩行法經梗概の末段參照)佛敎の信仰を堅固に保つて行くには、此の受戒といふことが最も大切なのである。受戒をしたものは『吾は佛の御弟子である、佛の敎へたまへる所のまゝに一生を送るべき者である』といふ自覺をいつも持つて居るから、凡夫の境界を一步より一步と離れて行くことも出来るのである。されば梵網經の中には、

一切有心の者は皆應に佛戒に攝すべし。衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入り、位大覺に同じ已りて、直に是れ佛子なり。

とある。受戒は此の如く大切なことである。

吾が國に於ては佛敎が久しく弘まつて居ながら、受戒の式といふものは具はらずに居たのであるが、唐僧鑿眞の説に基いて初めて南都に戒壇が建立せられた。此の鑿眞は揚州の大明寺に住し、學徳共に高きを以て聞えて居たが日本から留學したる榮睿と普照の二人が頻りに日本へ來ることを懇請したのに動され、天寶二年に其の徒弟を率ゐて船出をしたが風雨に阻まれて志を果さず、その後五回までも種々の難にあひ、十年を費したが更に屈することなく、終に孝謙天皇の天平勝寶六年に至つて來朝したのである。しかし度々の難の爲に身を損ひ、來朝の時は全く盲目になつて居た。吾が國では道俗共に非常なる感謝の念を以て此の高僧を迎へた。此の如き人の勸めであるから、戒壇建立の事は直ちに決定せられ、南都東大寺を以て之に充てらるゝ事となつた。戒壇成るに及んでは聖武上皇、孝謙天皇を始めとして公卿等の受戒する者四百三十餘人であつた。その後天平寶字五年に至り下野藥師寺と、筑紫觀音寺に戒壇を建立せられ、之を東大寺のと併せて日本三戒壇と稱せられた。

然るに此の鑿眞は小乘敎の戒律に委しい人であつたので、以上三戒壇を建立するに就ては一切小乘の經典に據り受戒の儀式等も盡く小乘の經典に基いて定めたのである。その後に至つて大乘の諸宗が次第に盛になつても、受戒



の式に於て必ずしも大小乗の別を立つる必要はないといふことで、三戒壇以外に於て別に大乘の戒壇を建立するといふ事もなくて打過ぎた。傳教大師は之を重大なる問題と考へたのである。戒の名目に就て見れば（例へば殺生を禁ずるとか、偷盜を禁ずるとか）大小乗を通じて同一のものが夥しくある。併し戒を制せらるゝ根本の精神に至つては大に相異なるものである。小乗の戒は吾等を凡夫と視て、その言行に過誤なからしめんことを主として立てられたる戒である。然るに大乘の戒は吾等を共に佛と成り得べきものと視て、吾等が佛と成るのに障りを爲すべき缺點を除き去らしめんとの趣意を以て立てられたる戒である。それは釋尊が大乘戒を制せらるゝに當つて、

戒は明なる日月の如く、亦瓔珞の珠の如し。微塵の菩薩衆、是に由りて正覺を成ず。

といひ、若くは

大衆心に諦かに信ぜよ、汝は是れ當に成すべき佛なり、我は是れ已に成せる佛なり。常に是の如き信を作せば、戒品已に具足しぬ。

といふが如くに仰せられたに依つても明白である。斯くも貴き大乘戒に基ける受戒を小乗の戒壇に於て行ふといふは、憾むべきことの限りである。

支那に於ては天台大師が法華經を弘むると共に、大乘戒に重きを置き、梵網經を註して世に弘め、

聲聞の小行すら尙ほ自ら木叉を珍敬す。菩薩の兼懷なる、寧ろ戒品を精持せざらんや。内外の二途咸く皆敬奉し王家度衆委質虔恭す。斯れ乃ち極果に趣くの勝因にして、道場を結ぶの妙業なり。（木叉とは即ち戒のことをいふ

のである。）

といひ、尙ほ厳しく戒めて、

清淨なること明珠を護るが如くせよ。若し毀犯する者は器の已に缺けたるが如く、佛法の邊人なり。

といつた。隨て自ら大乘の受戒に就ての儀式を制定したのであるが、唯だ未だ戒壇を建てるまでには至らなかつた。傳教大師は吾が日本國が聖德太子の出現以來、大乘佛教に特に深い縁のある國であることを考へ、後には此の國の人々が盡く菩薩の行を勵み、盡く此の娑婆世界を寂光淨土と化すべき爲に力を致すに至るべき理想をもつて、是非とも大乘の戒壇を建立せんことを思ひ立つた。

天台の立てたる戒法を稱して圓頓戒といふ。圓とは「諸法を圓融する」の義で、頓とは「頓速に成佛する」の義である。四十餘年の説法が法華經によつて統一せらるべきは釋尊の明言したまへる所である。これ諸法を圓融するといへる所以である。又此の經によつて修行するものは、他の道に依らずして必ず佛と成り得べきである。これ頓速に成佛するといへる所以である。此の法華經の行者となるべき爲の受戒であるから、圓頓戒と稱するのである。傳教大師は此の圓頓の戒壇を叡山に建立せんことの願を立てたのである。叡山に戒壇が立つことは獨り叡山の面目ではない。佛の大乘の法が日本國民の全體によつて信ぜらるゝことを表徴するものであるから、最も意義が深いのである。大師の主張には立派に條理が立つて居たが、勅許は容易に下らなかつた。三戒壇以外に別に大乘の戒壇を建立する。それも南都の七大寺を措いて、新に開かれたる叡山に建立するといふのであるから、是れは極めて重大



な事である。如何に大師に對する朝廷の御信用が厚くても、これは容易に許さるべきものではない。

大師も此の望みの容易に達せられぬことは充分に知つて居た。それ故に其の宗の根據を飽くまで固くして置いて時の到るを待つべきであると決心し、因て支那へ留學することの勅許を乞うた。天台大師が入滅してから幾くも無く隋は亡びて唐の代になつたが、唐になつてからは天台大師の頃に未だ傳はらなかつた經論も多く天竺から傳はつて漢譯せられ、又三論、法相、華嚴、眞言、念佛、禪等の諸宗が何れも盛になつて來た。天台大師は凡ての經論を讀破し、法華經が最勝の經なることを信じて、之に基いて天台宗を立てたのであるが、其後に傳はつたる多くの經論や、諸宗の教義に比べても依然として其の教義に動搖なきを得るであらうか。傳教大師自身には充分の研究を積んで、飽くまでも法華經が最勝の經たることを信じて居たのであるが、唐代に於ける天台宗と諸宗とは如何なる關係になつて居るか。天台宗は果して諸宗の中に立つて、依然として優勢を維持して居るであらうか。此等の事に就て徹底的の研究を積むためには自ら彼の地に渡り、彼の地の學者と面のあたり相接して其の意見を叩くことが最も必要である。大師の渡唐の願は直ちに勅許になり、延暦二十三年七月、遣唐使の船に同乗して發程した。此の時弘法大師も共に留學の途に上つたのであるが、傳教は三十八歳、弘法は三十一歳であつた。

唐代に於ける天台宗は妙樂大師の力によつて非常に盛になつた。彼の天台大師の後を承けた者は章安であるが、それより相傳へて第六祖に當るものが即ち妙樂である。妙樂は前にいへる如き諸宗對立の中に於て、天台大師の遺意を發揮し、天台以後に傳はつたる經論、及び諸宗の教義と對比しても、なほ法華が最勝の經たることに動搖を生

ぜざることを力説し、大に宗勢を發揚した。妙樂の弟子の中で殊に優れたものは道遠と行滿の二人であつた。傳教大師は入唐して此の二人の説を問ひ、自己の見る所の誤りなきことを確めた。又眞言及び禪に就ても研究を積み、翌年の五月を以て彼の地を發し、同六月に歸朝した。此より朝野の尊信愈々篤く、叡山は日を追うて益々榮えた。叡山に於て主として讀誦し講説せる經典は、法華經は勿論、その外に金光明經と仁王經とが擇まれた。此の二經は何れも佛の正法を本として治めらるゝ國は永く和平靜謐にして、國民の康福日に増進せんことを説かれたるものである。以上三部の經典は併せて鎮護國家の三部經と稱せられた。

此の如くに遺漏なく基礎が出來たので、弘仁九年三月に至り傳教大師は初めて圓頓戒壇建立の志を門下の人々に打明け、翌年三月を以て此の事を奏請して勅許を願つた。時に桓武天皇は既に崩じ、次の天子平城天皇は在位四年にして讓位になり、嵯峨天皇の御代であつたが、新帝も大師に對する御信用は桓武天皇と同様に極めて厚くあらせられた。併し從來の小乗戒壇以外に大乘の戒壇を建てんといふは重大な事である。殊に其の大乘の中に於て權實を別ち、其の實經たる法華經の行者の爲の戒壇を建立せんといふに對し、諸宗の異議のなからう筈は無い。果して南都諸寺からは之に對する強硬なる抗議が提出せられた。傳教は直ちに『顯戒論』を著はして之を反駁した。諸宗の學者は之によつて口を閉ぢたが、未だ勅許を受くるに至らぬ内に大師は病を發し、弘仁十三年六月、五十六歳を以て示寂した。(西曆八二二年)其の初七日に當り、嵯峨天皇は右大臣藤原冬嗣をして叡山に戒壇を建立するの勅許を齎らし、之を靈前に供せしめられた。



斯くて傳教大師の後は弟子の義眞が之を承けた。義眞は二十四歳にして師と共に入唐し、歸朝して後も師を輔けて功のあつた人である。淳和天皇の天長元年に至り、天台宗の座主を置かるゝ事となり、義眞はその第一代の座主に補せられた。戒壇建立のことは師の遺志であるから着々として其の準備が進められ、天長四年(西曆八二七年)五月、太政官より近江國へ下されたる符によつて建立せられた。檜皮葺方五間の堂宇に安置せられたるは金色の釋迦牟尼佛像一軀及び綠色の文殊普賢二菩薩の像各一軀である。吾が國に大乘の戒壇の建立を見たのは全く傳教大師の力である。

大師は學徳兼ね備はれる人として一代の崇敬を一身に集めながら少しも自ら高しとせず、終生孜孜として法の爲に盡して倦むを知らなかつた。其の死に先つこと二月、諸弟子に告げたる遺誠の中には、

我が爲に佛を作ること勿れ、我が爲に經を寫すこと勿れ、我が志を述べよ。

とあり、又

毎日諸大乘經を長講し、慇懃に精進して法をして久住せしめん。國家を利益せんがため、群生を度せんが爲なり。努力せよ、努力せよ。

とあり、又

我が同法等四種三昧を懈怠すること勿れ。兼て年月に灌頂し時節に護摩し、佛法を紹隆して以て國恩に答ふべし。とある。尙ほ又

道心の中に衣食有り、衣食の中に道心無し。

といへるが如きは、最も適切なる訓戒と稱すべきである。而して遺誠の最後の一項には

我鄭重に此間に託生して、三學を習學し一乘を弘通せん。若し心を同うする者は、道を守り道を修し、相思ひ相待て。

とある。鄭重とは「幾度も」といふ義である。「此間」とは「此の日本國」といふことである。大師は幾度も此の日本國に生れて來て、此の法華經を弘むることに力を盡さんことを志としたのである。眞に仰ぐべく尊むべき人ではないか。

傳教大師の滅後四百三十一年を経て、日蓮上人が法華經弘通のために起つた。即ち後深草天皇の建長五年、北條時頼執權の時、上人は三十二歳であつた。傳教大師の後に於ても叡山は依然として榮えて居た。又此處から多くの智者學匠も輩出した。けれども歲月を経るに隨ひ、傳教大師が此の山を開いたる精神は漸く失はれて行つた。又法華經は盛に讀誦せられ講説せられ、或は書寫せられた。彼の古今集以下勅選の和歌集に、法華經を題にして詠んだ歌の夥しくあるのを見ても、此の經が如何に重んぜられたかを知るべきである。併しながら此の經がたゞ重んぜられ貴ばれたからとて、それで釋尊が此の經を説かれた御精神が貫徹されたものとはいはれぬ。一切の人が盡く此の經を信じ、その信仰が凡ての行ひの基礎となるやうに至らなければ、釋尊が

我が滅度の後、後の五百歳の中に廣宣流布して、閻浮提に於て斷絶して、惡魔々民、諸天龍夜叉鳩槃荼等に其の



便を得しむること無かれ。(藥王品)

と命ぜられた所が實現されたとはいはれぬのである。是れ實に日蓮上人が奮ひ起たなければならなかつた所以である。上人の家系に就ては種々の傳説もあるが、上人自身は

日蓮は安房國東條片海の石中の賤民が子なり。威徳なく、有徳の者にあらず。といひ、或は

日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出たり。

といつて居る。旃陀羅とは天竺の賤民で、漁業などで生活をして居たものである。上人自身に漁夫の子であるといふのであるから、其より以上に家系の穿鑿などは無用であらう。

四河海に入りて復た何の名無し、四姓沙門となりて皆釋種と稱す。

とは佛の定められた所である。佛の正法を弘むる者の中に於て身分や家系の上下を區別するは愚なる業である。

上人は安房國小湊の海邊に生れ、十二歳の時に同國の清澄寺に入つて道善の弟子となり、十六歳にして受戒して蓮長と稱した。日蓮といふのは、後に法華經の弘通のために起つ時に改めたる名である。清澄寺は天台宗であつた。併し傳教大師の時の天台宗とは大に異なるものであつた。上人が

日本國は叡山ばかりに傳教大師の御時、法華經の行者ましましけり。義眞圓澄は第一第二の座主なり。第一の義眞ばかり傳教大師に似たり。第二の圓澄は半ば傳教の御弟子、半ば弘法の弟子也。

と評した通り、叡山には眞言宗の教義が夙くから採り入れられて居たのである。眞言宗は唐の玄宗の時に天竺から傳はつて、非常なる勢となつたもので、傳教大師も入唐の際に其の教義を研究したものであるが、弘法大師は殊に之が研究に全力を注ぎ、歸朝の後之を吾が國に弘めた。此の宗の主張によれば、釋迦如來の所説は顯教に過ぎず、大日如來の所説のみが密教である。其の密教といふ意は、弘法大師の二教論に、

法佛の談話之を密藏と謂ふ。言秘奥にして實説なればなり。

とあるに依つて明かである。絶對の眞理はたゞ大日如來の所説によつてのみ示さるゝので、釋迦如來の所説の如きは之が階梯たるに過ぎぬといふのである。此の密教が叡山にも採り入れられて、傳教大師の頃とは次第に變つて來た。勿論眞言宗に於て説く所は多少の異同があつて、眞言宗が京都の東寺を以て本寺とする所から「東密」と稱するに對し、天台宗の密教であるから「台密」と稱した。併し釋迦如來を措いて大日如來を崇むるといふ點は全く同一である。

又法然上人の唱へ始めた念佛法の教が、その頃は日本全國に亘つて大なる勢力であつた。之は叡山の一學徒であつた空山上人が京都の辻に立つて念佛を勧めたのは朱雀天皇の天慶元年(西曆九三八年)のことであつたが、その後次第に盛になり、法然上人は高倉天皇の安元元年(西曆一一七五年)に至つて専修念佛を唱へて起つたのである。其の教義は阿彌陀佛以外の神佛を禮拜し、淨土三部經(阿彌陀經、觀無量壽經及び無量壽經をいふ)以外の經典を讀誦するを、一切雜行として排斥し、専ら彌陀の名號を唱へて往生極樂を期すべきことを教ゆるものである。此の



専修念佛の教が創められてから、日蓮上人の出家した時まで六十餘年を隔てゝ居る。此の間に法然上人の教は日本全國を風靡し、何れの宗に屬するものも皆彌陀の名號を唱ふる習はしとなつた。されば清澄寺に於ても大日如來を崇め、法華經を讀誦し、彌陀の名號を唱へて居たのであるが、此の事が青年時代の日蓮上人には極めて奇異なことに思はれたのである。何れの佛も尊く、何れの經も貴いものではあらうが、吾が本尊として歸依すべきものは唯一つでなければならぬ。何れに歸依するのが正しいことであらうか。此の疑問が起ると共に、更に疑問となつて來たのは此の日本國に凡て十余の教義が並び行はれて居ることである。前にいつた通り、奈良朝の末までに三論、法相、華嚴、俱舍、成實、律の六宗が支那から傳はり、平安朝になつて天台、眞宗の二宗が弘まり、武家時代に入つて念佛と禪とが弘まつた。此の十宗の何れが果して佛の御本意に叶へるものであるか。何れに歸依するが正しき事であるか。此の事を根本的に研究しなければならぬ。

又上人の心に湧き起つたる大問題が今一つある。それは佛法が斯くまで盛でありながら、何故に國土が安穩でないかといふことである。佛法の盛に行はるゝ國は天災地變も起らず、人民は皆其の生を樂んで安らかに毎日を送るべきこと、仁王經金光明經その他に明記せらるゝ所である。然るに近年の有様を見れば、國土は少しも安穩でない。此の百年ばかりの間に、さしも盛であつた藤原氏の勢力は地に墮ちて院政の時代となり、それも久しく續かずして平家の全盛時代となり、幾くもなく平家は亡びて源氏の世となつた。それも僅かに三代で亡びて北條氏が政權を執ることになつた。此の間に於ても戰亂の絶え間は無く、四民共にその堵に安んぜざる有様であつた。殊に北條氏

の政權を握るに及んで承久の役が起り、倍臣たる北條義時が三上皇の御遷幸を取計らひ、國中に誰も之を支へ申す者が無かつたのは、空前の一大事といはなければならぬ。又嘉祥二年（上人五歳の時）の頃から、殆んど連年のやうに天災地變が諸國に起り、或は飢饉疫病等のために惱まざるゝ者も夥しくあつた。佛教の盛に行はるゝ時代に於て斯く國土が安穩でないといふのは、世に行はるゝ佛教が佛の御本意に背けるものである爲ではないか。

此等の疑問を解決せずして、妄りに法師の名を冒し、晏然として經を誦し法を説くことは出来ぬ筈である。抑も法師なるものは法華經の法師品に

當に知るべし是の人は則ち如來の使なり。如來の所遣にして如來の事を行するなり。

と説かれてある程に貴い者である。斯く貴い職分を全うせん爲には、是非とも確乎たる信念の上に住しなければならぬ。而して堅固なる信念は徹底せる研究の結果でなければならぬ。

信有りて解無ければ無明を増長し、解有りて信無ければ邪見を増長す。信解圓通して方に行の本と爲る。

とは涅槃經の中に教へらるゝ所である。日蓮上人は其の法師たる職分を果さんが爲に、徹底的なる研究をしやうと決心した。併し之が爲には一切の經論を讀破し、諸宗の教義を究め盡さなければならぬ。それは實に容易なことでは無い。其の頃清澄山には虚空藏菩薩の廟があつた。此の菩薩は智慧を掌る菩薩として知られて居た。仍て上人は虚空藏の廟に參籠して、「日本第一の智者となさしめ給へ」と祈願した。その満願の日に當つて、血を咯いたといふことが言ひ傳へられてある。以て其の必死の意氣込みを推すべきである。



斯る徹底的の研究を積まんがためには、廣く天下の學者に交り、汎く古今の典籍を涉獵しなければならぬ。乃ち上人は十七歳の春清澄を去つて修學の旅に上つた。此より三十二歳の春までが其の研究時代である。先づ鎌倉は幕府の在る所で諸宗の寺も多く、智者學匠として聞えた人々も少からず住して居たから、上人は此處に數年を送つて研鑽を重ね、それより叡山に登り、三井寺に遊び、高野山に登り、或は浪速の四天王寺の經藏に入り、或は奈良、京都に諸宗の學者を訪ひ、獨り佛敎のみならず、儒敎と國學とに就いても深き研究を積んだ。元來非凡なる天分を有せる上人が十數年に亘つて、生命に懸けて研究を重ねたのである。斯る研究の結果として其の信仰を決定したのであるから、如何なる迫害にあつても些かの動搖も無かつた筈である。上人は此より後、法華經の弘通のために其の一身を捧げたのであるが、その壯烈なる活動は實に其の忠實なる研究を基礎とせるものである。さればこそ上人は、開目鈔の中に

善につけ惡につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。日本國の位を譲らん、法華經をすて、觀經等について後生を期せよ。父母の頸を刎ねん、念佛申さずば、なんどの種々大難出來すとも、智者に我が義破られずば用ゐじとなり。

と明言したのである。

十數年に亘る研究の結果として、釋尊の眞實の敎は法華經に於て初めて説き盡されてあるといふことが明かになつた。又此の法華經は末法の世に至つて初めて普く世間に流布すべきものであることも明かになつた。末世に及ん

で佛法が廢れ果つべきことは釋尊の夙に洞見せられたる所である。大集經に據れば、釋尊は其の入滅後の状態を豫想して、次の如くに分けて居らるゝのである。

佛滅後一千年は正法の世

其の初めの五百年は解脫堅固  
次の五百年は禪定堅固

次の一千年は像法の世

其の初めの五百年は讀誦多聞堅固  
次の五百年は多造塔寺堅固

二千年過ぎて後は末法の世——其の初めの五百年は鬪諍堅固

正法とは佛の御心が失はれずして、佛法の世に行はるゝ時代といふ意である。像法とは其の精神が漸く失はれて、佛法の形ばかりが存して居る時代といふ意である。末法とは法が廢れて無くなつた時代といふ意である。其の正法の世が又二つに分けられてあるが、最初の五百年間は佛の直接の感化が遺つて居るから、人々は佛の御示しになつた通りを實行して惑を去り罪に遠ざかるので、之を解脫堅固の時といふ。堅固とは『必ず斯うである、間違ひはない』といふ意で、此の五百年間は人々が必ず解脫を得べき時なのである。次の五百年間に至れば佛を距ること稍遠く世間は益々複雑になる故に、人々は如何にして斯る世間の累ひを去り、心を佛法に專にすべきかに就いて研究を重ね工夫を凝すやうになる。乃ち之を禪定堅固の時といふ。その後に至ると漸く實行に遠ざかり、専ら理論的研究を主とするやうになり、互ひに多く讀み多く識ることを競ふやうになる。所謂讀誦多聞堅固の時である。斯る時代も



過ぎ去ると佛教は全く形骸のみを存し、人々は唯だ寺を作り塔を建て、一身一家の福を祈ることのみを専にする様になる。所謂多造塔寺堅固の時である。以上二千年過ぎて末法の世に入れば、佛法は世に廢れ果て、人々皆我意に慕つて相争ひ相闘ぎ、淺ましい時代となる。即ち鬪諍堅固の時が到來するのである。佛は此の如くに洞見せられたが世間は此の通り少しも違はず變遷して來たやうである。

然るに此の末法の世となつて、初めて法華經の流布すべき機運が開かるゝといふのである。前に引いたる佛語に『我が滅度の後、後の五百歳の中に』といふは、此の鬪諍堅固の時のことである。鬪諍堅固の時となつて、人々の苦惱は其の極點に達する。茲に於て『如何にしたならば此の苦惱の中を脱出すべきか』といふことを最も眞面目に思ひ詰むるものが出て來るのである。斯る眞面目なる要求に應じて之に救護の力を與ふべきものは、實に佛の眞實の教を以て其の内容とする所の法華經でなければならぬ。勿論此の時代に於ける大多數の人は、名利の念に役せられて、法を求むるとか道を學ぶとかいふ考へは無い。しかし千萬人中に唯一人でも法華經の貴いことを知つて、末法の世の苦を救ふべき教は此より外にないといふ確信をもつならば、廣宣流布の機運はこゝに開くるのである。一人が何時までも一人ではない。必ず二人三人より百千萬人となり、後には天下に遍きに至るべきである。此の事は苟しくも此の法華經を信する者の共に確信する所である。彼の天台傳教の諸師は像法の世に生れ、自分達の努力が必ず末法の世に至りて其の効果を顯はすべきことを信じて居たものと思はれる。されば天台は後の五百歳遠く妙道に沾ほはん。

といひ、傳教は

正像稍過ぎ已りて末法太だ近きにあり。

といつた。日蓮上人は十數年の研究の結果として此等の事を明かにし、自ら末法の世に生れ合せたことに思ひ合せて此の時に當つて此の法華經が此の國に弘まるならば、初めて國土が安穩になり、有らゆる災厄が除かるゝに違ひないと思ひ定めたのである。

上人は其の熱心なる研究のかひがあつて、其の少年時代からの疑問に根本的の解決が與へられたことを深く悦んだのであるが、それと同時に又大なる疑惑が起つて來た。法華經の中には『末法の世に當つて必ず此の經を弘むるものが世に出現する』といふことが豫言せられてある。然るに時は既に末法の世に入りながら、此の經を弘むるものが出現せぬのは何故であるか。法華經は既に天竺にも廢れ、支那にも廢れて居るけれども、日本は聖德太子以來此の經には特に縁の深い國である。再び末法の世に生れて此の經を弘めんことを佛前に誓つたる地涌の菩薩の生るべき國は此の國より外にはない。然るに其の人らしい人の影も見えぬ。傳教大師の開いた叡山は依然として榮えて居る。念佛を唱へた空也も慧心も法然も皆叡山から出た。支那へ渡つて臨濟の禪を傳へた榮西も、曹洞の禪を傳へた道元も亦叡山から出た。しかし傳教大師の志を繼いで法華經を弘むべき人が叡山から出やうとは思はれぬ。必ず末法の世に此の經が弘まるといつた釋尊の言は適中せぬのであるか。佛は妄語の人であつたか。

日蓮上人は暫く斯の疑惑の中に沈んだが、終に自ら決心した。今の世に於て、此の法華經が最勝の經たることを



確信する者が吾より外にないとすれば、此の經を世に弘むべき責任は唯だ吾一人のみの負ふ所であると思ひ定むべきである。吾一人の力を以て此の經を世に弘め、一人が二人三人となり、やがて百千萬人となるならば、佛の言の虚しからぬことが其の時證せらるべきである。「佛は妄語の人か」と疑ふは愚かである。「佛を妄語の人にせまい」といふ決心を以て、吾自ら弘通の任に當るべきである。上人は雄々しくも斯く思ひ定めたが、しかし是れは大任である。末法の世に此の經を弘むる人の一身に種々の大難の集り來るべきは、同じく經の中に豫言してあることである。法師品には

如來の現在すら猶ほ怨嫉多し。況んや滅度の後をや。

とある。安樂行品には

一切世間怨多くして信じ難し。

とある。而して勸持品には末法の世を稱して「恐怖惡世」といひ、斯る世に出て法を弘むる者は、或は惡口罵詈せられ、或は刀杖を加へられ、或は國王大臣婆羅門居士等に向つて讒言せられ、或は屢々其の住所を追はるべきことが數へられてある。又寶塔品には凡そ世間に於て最も困難とせらるゝ事を九ヶ條も擧げて、法華經を弘むるために力を盡すに比ぶれば、此等は至て易いことであるといつてある。所謂六難九易の説である。日蓮上人は此等の事を盡く心に藏めて、自ら法華經弘通のために起つたのである。

王難等出來の時退轉すべくば一度に思ひ止むべしと、且らくやすらひし程に、寶塔品の六難九易これなり。我等

程の小力の者須彌山は投ぐとも、我等程の無通の者乾草を負ひて劫火には焼けずとも、我等程の無智の者恒沙の經々をば讀み覺うとも、法華經は一句一偈も末代に持ち難しと説かるゝはこれなるべし。今度強盛の菩提心を起して退轉せじと願しぬ。

とは上人が後に至つて自ら語られる所である。

上人は此の決心を懷いて故郷へ歸り、建長五年四月二十八日(西曆一二五三年)から、弘安五年十月十六日(西曆一二八二年)六十一歳にして入滅するまで前後三十年間、身命を惜まずして法華經の弘通に努めた。法華經に豫言せられた所は果して虚しからず、清澄寺に於て衆を集めて其の研究の結果を打明け、法華經の信心を勸むると共に忽ち迫害がその身に及んだ。地頭東條景信は念佛の信者であつたので、上人の説を聽いて大に憤り、直ちに之を斬らんとしたが、上人は纔かに身を以て免れ、安房を去つて鎌倉に來り、松葉ヶ谷に小庵を結んだ。此より鎌倉に在ること十九年、諸宗に對して絶えず折伏を加へて、法華經弘通の路を開いた。抑も佛法を弘むるには攝受と折伏との二つの方法がある。吾が説く所の佛の正法を悦んで聽く者は順縁のものである。順縁の者は之を奨め勵まして益益其の信を長ぜしむべきで、これ即ち攝受である。吾が弘めんとする佛の正法に反對せんとする者は逆縁のものである。逆縁の者には其の信する所の誤れることを諭し、その信を改めて正法に歸せしむべきで、これ即ち折伏である。攝受を行すべきか、折伏を行すべきかは其の時に依るものである。日蓮上人は折伏を行じたのであるが、其の志とする所は不輕菩薩の跡を追ふことであつた。昔不輕菩薩は行きあふ人毎に必ず合掌して之を禮拜し、



我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、當に作佛することを得べし。といつた。是れは彼等に反省を促さんが爲であつた。何人も皆貴い佛性を具へて居る。此の佛性を開發することに力を盡して怠らぬならば、後には佛の境界にも到達すべきである。之が爲には菩薩の道を行することが必要である。佛の大乗の教は即ち菩薩の道を教ゆるものである。然るに多くの人は折角に佛性を具へながら、大乘の教を學んで佛と成るべく努むることを知らず、小き眼前の利害得失のみに囚はれて、一生を空しく過してしまふのである。不輕菩薩が彼等を禮拜したのは、彼等に反省を促し、彼等をして自ら佛性を具有せる貴き身なることを知り、佛法に歸依して菩薩道を勵まんとの心を起さしめんが爲であつた。日蓮上人が折伏を行じたのも亦之と同じ心であつた。上人は人々が佛の眞實の教たる法華經に歸依することを知らぬために、折角に佛性を具へながら畢に佛と成ることを得ぬを見て、深く之を悼むあまりに、之に反省を促さんが爲に烈しき折伏を加へたのである。烈しい折伏は深い慈悲の心から出たものである。

其の頃までに吾が國に弘まつた佛教は、凡て十宗に分れて居たと前にもいつたが、此の中で實際宗教として勢力のあつたものは、眞言宗と念佛宗と禪宗とであつた。然るに眞言宗の僧良觀は南都に於て戒律の研究を重ね、弘長元年（日蓮上人四十歳の時）からは鎌倉に住して律宗の宣傳に努め、次第に勢力を得て來た。此に至つて當世に普く行はるゝものが四宗となつたのである。此の中に於て、眞言宗は一切の經論の中に於て大日經を第一とし、華嚴經を第二とし、法華經を第三とし、専ら大日如來の信仰を勸むるのであるから、明かに法華經弘通の途を塞ぐもの

といはなければならぬ。次に念佛宗に於ては法華經の貴いことを充分に認むるのであるが、末代に生を受けたものは機根が至て劣つて居るから、法華經の如き深遠なる教理を究めて成佛を期せんとするも到底出來得べきことでは無い。それは『千中無一』である。若し彌陀の名號を唱へて極樂に往生せんことを期するならば、彌陀の本願によつて必ず叶ふに定まつて居る。即ち『百即百生』であると主張するのである。これ亦法華經弘通の途を塞ぐものである。又禪宗は教外別傳と稱し、不立文字といひ、見性成佛を説くものである。經論を究めて成佛を期せんとするが如きは佛意に合せざる者であると主張するのであるから、是れ亦法華經弘通の途を塞ぐ者といはなければならぬ。律宗は戒律の細目にのみ囚はれて、菩薩道の根本を忘れたものである。これも同じく法華經弘通の妨げを爲すものである。日蓮上人は斯る見地から此等四宗に對して折伏を加へたのである。自ら此等四宗以外に別に一宗を開いて之と對抗せんとしたのではない。法華經を世に弘めんが爲に、その弘通の途を塞げるものを排するは、まことに已むを得ぬことなのである。それ故に上人は

斯る時刻に日蓮佛勅を蒙りて此土に生れけるこそ時の不祥なれ。法王の宣旨背き難ければ……

といひ、或はまた

日蓮は何れの宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず。

といつたのである。即ち釋尊の御精神に背かぬ佛教を世に弘めやうといふより外に、何の望みも無かつたのである。上人は諸宗を排撃して自ら一派を開かうといふやうな狭い考へをもたなかつた。それ故に彼の天台傳教の跡を追



ひ、諸宗の學者と一堂に會して互ひに其の信する所を談論し、法華經が最勝の經なること、末法の世は法華經に依りてのみ救はるべきことを彼等に承認せしめんと思ひ立つた。之が爲には政治の局に當れる北條氏を動かさなければならぬ。時に前年から引續いたる各種の天災地變は益々劇しく、殊に正嘉元年の大地震は恐ろしいものであつた。之によつて上人は志を決し、文應元年即ち其の三十九歳の七月を以て立正安國論を前執權北條時頼の許へ提出した。時頼は既に執權の職を同族長時に譲り、髮を剃つて最明寺に閑居してゐたが、大事はなほ自ら之を裁斷した。それ故に立正安國論を時頼へ贈つたのである。立正安國とは「正法を立て國土を安んずる」の義である。正法を立て國民の心を正しくすれば、國土は必ず安らかになるべきである。然るに今國土の安穩ならぬのは、此の國に正法の行はれぬことを證するものである。立正安國論は正法の行はれぬ國に諸種の災難の起るべきことを諸經の文によつて論證したものである。例へば藥師經の中には七難が數へ上げてある。即ち

人衆疾疫の難。佗國侵逼の難。自界叛逆の難。星宿變怪の難。日月薄蝕の難。非時風雨の難。過時不雨の難。

である。此の七難中に於て五難は既に起つて居る。佗國侵逼と自界叛逆との二難も必ず久しからずして起るであらうと斷言してある。(後に北條時輔が六波羅に亂を起し、又蒙古が來襲したのは、即ち此の二難の實現であつて、上人の豫言が正しく適中したものである。)此の立正安國論を讀んで時頼が「然らば正法とは如何なるものであるか」との不審を起すならば、その時上人は諸宗の學者との對論を要求し、法華經の教理を宣揚せんとの計畫であつた。併し此の計畫は行はれず、時頼は安國論を受取つたまゝ何の答へをも與へなかつた。日蓮上人は之に屈せず、益

益折伏を續けた爲に、益々諸人の嫉視を招いた。之によつて各種の難が上人を脅した。此の文應元年八月末には、念佛宗の者等が黨を結んで松葉ヶ谷に於ける上人の庵を焼打ちしたが、上人は幸にして危難を免れ、暫く鎌倉を去つて房總地方を遊歴した。翌弘長元年に至り鎌倉へ返つて間もなく、邪義を唱へて世間の平和を擾すものと認められ、その五月を以て伊豆の伊東へ流された。併し配所に着いて程もなく、地頭の伊東朝高が歸依したので、比較的平和に月日を送ることが出來て、弘長三年二月上人は四十二歳にして赦されてまた鎌倉の舊居へ歸つた。然るに次の年即ち文永元年の秋に至り、父の墓を弔ひ、母の病を問はんが爲に久々で歸郷した時に、また一場の災禍が起つた。前年から上人を憎んで居た地頭東條景信は其の後一層上人に對して恨みを構ふるやうになつた。彼は極樂寺入道重時と謀つて東條の領家に壓迫を加へ、又清澄寺に屬する山林等を奪はんと企て、終に訴訟となつたのであるが、その時日蓮上人は領家及び清澄山の人々に力を添へ、之によつて問註所に於ては景信敗訴の裁斷を與へた。景信は愈々上人に敵意をもち、其の歸郷を機として之を除かんと謀つた。此の年十一月、上人が安房の小松原を通り懸るを窺ひ、景信は百餘人を率ゐて之を襲撃し、上人は傷を負うたのみで免れたが、弟子の鏡忍、及び上人を救はんが爲に駆け附けた工藤吉隆は斬死にした。斯く種々なる迫害が交々々上人の身を襲ひ來つたが、上人は少しも驚かなかつた。此等は皆經文に記されてあることが事實となつて現はるゝものである。之によつて上人が此の經を末法の世に弘むべき任を負へる人であることは愈々明かになるのである。故に上人は自ら

是程の卑賤無智無戒の者の二千餘年已前に説かれて候法華經の文にのせられて、留難に値ふべしと佛記し置かれ



參らせて候事のうれしき申盡し難く候。

といひ、又

いよ／＼法華經こそ信心まさり候へ。

といつて悦んだのである。

此より後も上人は所謂「我身命を愛せず、但だ無上道を惜む」といふ意氣をもつて、其活動を續けたので、諸宗の徒は愈々上人を嫉み、文永八年即ち上人が五十歳の九月に至り、上人を除くべき計を立てた。彼等は之が爲に尼を利用した。其の頃は夫を失つた婦人は勿論、まだ夫があつても尼となるものが少からずあつたが、尼となると身分の差別は非常に緩やかになり、有力者の奥向などへ自由に出入が出来た。此の尼達が頻りに「日蓮といふ者は此頃故最明寺殿、並に故極樂寺殿が地獄に墮ちて居らるゝと申して居る。不敬の甚しき奴である」といひ觸らした。最明寺入道時頼は當時の執權時宗の父であるが、去る文應三年に死んだ。又極樂寺入道重時はその時頼の大叔父であるが、去る弘長元年に死んだのである。此の流言が盛になつたので、幕府でも捨て置き難く上人を呼出して其の實否を質した。その時上人の答へは「決して此頃のことでは無い。最明寺殿や極樂寺殿の御存生の頃から、必ず地獄に墮ちらるゝであらうと申して居たのである。それは正しく經文に據つて申したことである」とあつた。上人はなほ之に附け加へて、佛の正法に背く罪の大なることを説いたが、其の吟味を掌つた平左衛門尉は上人の勢に壓せられて、兎も角も赦して歸した。併し上人は必ず免れ難きことを知り、最後の諫言をしやうとの心から、再び立正

安國論を寫して平左衛門へ贈つた。

世を安んじ國を安んずるを忠と爲し孝となす。是れ偏に身の爲に之を述べず、君のため佛のため神のため、一切衆生の爲に言上せしむる所なり。

とは之に添へたる書簡の結末の一節である。

それは九月十二日の事であるが、同じ日に上人は捕へられた。但し如何に横暴なる人々でも、不敬を名として上人を死に處することは出来なかつた。因て佐渡へ配流するといふ名を以て上人を捕へ、竊かに殺害せんと謀つた。佐渡は北條武藏守宣時の領地であるが、その家人たる本間重連の邸が相州依智にある。此處へ上人を護送する途中で、夜に紛れて龍ノ口に於て殺害するといふ計畫であつた。しかし上人を斬らんとする時に臨み、満月の如き光りが刑場の上を流れたので、人々は氣後れして時を移すうちに夜は明けてしまつた。計畫が齟齬した上は最初の宣告の通りにするより外に途は無いので、上人は圖らずも死を免れて佐渡へ送られた。佐渡に於ける生活は極めて苦しいものであつた。絶海の孤島に於て寒さと飢とに惱まされ、而も周圍には上人を阿彌陀佛の敵として憎み、危害を加へんとする者が多く居た。しかし上人の心は悦びに充ちて居た。法華經の勸持品には末法の世に出て此の經を弘むる者の一身に集るべき危難の數々が擧げられてあるが、今までの十九年間に、それが一つも残らず實現せられた。然るに又安樂行品には

天の諸の童子以て給使を爲さん。刀杖も加へず、毒も害すること能はず、若し人惡み罵らば、口則ち閉塞せん。



とあるが、是れも亦正しく上人の身の上に實現し、如何なる迫害も上人を屈せしむることは出來ず、又上人の生命を奪ふことも出來なかつたのである。斯く經文が一々符合せる上は、上人によつて流布の端を開かれたる法華經が後には天下に弘まるべきも亦疑ひなき所であらう。上人が佐渡に在つて、

當世日本國に第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華經にたてまつる、名をば後代に留むべし。

といひ、或は又

剩へ廣宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經を唱へん事は、大地を的とするなるべし。

といつたのは、誠にさもあるべき事である。

又上人が難にあふ毎に悦びを増したといふに就ては尙ほ一つの理由がある。それは難を忍ぶことに依つて、過去の世の罪を滅し得たといふ自覺が得らるゝからである。苟くも大乘の教を學ぶ者は終に佛となることを理想とするのであるが、過去の世に於て犯したる數々の罪を償ひ終らぬ間は、佛と成られやう筈がない。前にもいふ如く上人は不輕菩薩の跡を追ふことを志としたのであるが、その不輕菩薩は行きあふ人毎に之を禮拜して自覺を促しながら更に感謝せられずして却て彼等の反感を活ひ、彼等の爲に惡口罵詈せられ、或は杖木瓦石を以て打擲せられたが、少しも瞋恚の念を生じなかつた。而して其の多くの難を忍受したる功德によつて、過去の世に於て犯せる罪を償ひ終り、佛と成ることを得たのである。されば日蓮上人も種々の難を忍んで法華經を弘むる功德により、過去に犯せる數々の罪を償ひ得べきことを悦び、

度々失口にあたりて重罪を消してこそ、佛にもなり候はんすれば、我と苦行をいたす事は心がらなり。

といひ、或は

日蓮が流罪は今生の小苦なれば歎かしからず、後生には大樂を受くべければ大に悦ばし。

といひ、或はまた

當世の王臣なくば日蓮が過去謗法の重罪消し難し。日蓮は過去の不輕の如く、當世の人々は彼の輕毀の四衆の如し。人はかはれども因は是れ一なり。……いかなれば不輕の因を行じて、日蓮一人釋迦佛と成らざるべき。

といつたのは之が爲である。苦を避けて樂を求むるは人情である。しかし苦を冒し難を忍ぶことによつて廣宣流布の運を開き、又自ら過去の罪を消して佛と成るべき因を作ると知れば、限りなき満足の念が其の苦難の中より湧き來るのも不思議ではない。

斯くて上人は文永八年十月の末に佐渡に着き、暫くは塚原に住したのであるが、此處は佐渡へ流された者の死骸を埋むる所である。上人は此の塚原に在つて文永九年、五十一歳の二月に開目鈔を完成し、法華經の行者として立てる自己の態度を明かにし、此の年の四月から一ノ谷に移つたが、翌文永十年四月に至り觀心本尊鈔を作り、法華經を信するものは何者を本尊として仰ぐべきかを明かにした。法華經本門の壽量品に「如來秘密神通の力」とある。その如來こそは宇宙間に於ける唯一絶對の佛である。有らゆる佛菩薩の働きは、皆此の神通の力の一部分に外ならぬ。日蓮上人は此の意義を充分に發揮して、末法の始めに於て先づ之を日本に弘め、進んで全世界に及ぼさんとし



たので、即ち

此の時地涌千界出現して、本門の釋尊の脇士と爲り、一閻浮提第一の本尊此の國に立つ可し。月支震旦未だ此の本尊まします。

の言ある所以である。斯くして本尊に於ての根本的の意義を闡明して後、同じ歳の七月八日、所謂十界勸請の大曼荼羅を圖顯して、之を後代に遺した。南無妙法蓮華經といふは經の名にあらずして、經の内容をいふのである。經の内容とは壽量品に顯はれたる久遠の本佛と、その一切の作用のことである。

此の本尊は抑も法華經の弘通の爲に起つた最初から、上人の胸中には明かに描かれて居たものであらう。しかし上人が十九年の活動を経て、其の法華經弘通の大任を負へる人であることを何人も疑ひ得ぬやうになつてから初めて之を圖顯したといふは用意周到と稱すべきである。されば上人は此の大曼荼羅に、

此の法華經の大曼陀羅は、佛滅後二千二百二十餘年、一閻浮提の内に未だ之れ有らず、日蓮始めて之を圖す。如來現在猶多怨嫉、況滅度後と。法華經弘通の故に留難有ること、佛語虚しからざる也。

と附記したのである。曼荼羅とは元來「壇」といふ義である。佛や菩薩の像を共に安置する壇のことを梵語で曼荼羅といふのである。それが後には佛菩薩等の姿を集めて畫いたものゝ名となつた。又曼荼羅の性質に基いて「輪圓具足」とか「功德聚」とかいふ譯語も出來た。曼荼羅にも種々あるが、何れも繪曼荼羅である。その昔からの習はしを脱して、文字のみを以て曼荼羅を成したのは全く日蓮上人の創意といはなければならぬ。

此の曼荼羅の中には十界が漏る所なく現はされてある。而も上は佛界より下は地獄界に至るまでの（其の委しいことは次の段に説くが）十界は、實に悉く吾等の一念の中に具はつてゐるのである。十界が悉く具はつて居る故に、其の一々が時に應じて交る々々勢力をもつて來るのである。或る時は瞋恚の念が全く心中を占領して一切を忘るゝこともあり、或る時は貪欲の念が全く心中を占領することもある。斯る時には此の心中に地獄界が現はれ、或は餓鬼界が現はれて來る。併し又或る時は一切の利害得失を離れて、他の者の爲に力を盡さうといふ念のみとなる。此の時には此の心中に佛界が現はれて來る。而して此の心が地獄界、餓鬼界等となり果てた時でも、佛界や菩薩界が全く無くなつたのではなく、心の奥に潜在して居るのである。若し吾等が久遠の本佛に歸依し、法華經の中に示されたる所に従つて吾等の修行を勵むならば、吾等の心の中に佛界や菩薩界が次第に展開せられて來るに定まつて居る。即ち此の曼荼羅に書き連ねられたる十界は悉く中央の南無妙法蓮華經の中に包容せられてしまふのである。上人は此の事を説明して、

此等の佛菩薩等、總じて序品列生の二界八番の雜衆等一人も漏れず此の御本尊の中に住し給ひ、妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる。是を本尊とは申す也。

といつた。此の本尊は日本國を中心として、やがて全世界に弘まるべきものと考へられたるが故に、其の中央に天照八幡の御名が記されてある。

佐渡に於ける謫居の四ヶ年は斯くして極めて有意義に費された。此までの十九年は烈しい奮闘努力の間に過され



たのであるが、その後佐渡の静かな生活が続いたことは、日蓮上人の教義の基礎を固むるために最も有益であつた。昔から佐渡へ流された者で生きて還つたのは稀であると言ひ傳へられたものであるが、法華經の行者の身は如何なる危難にも負かされずして、上人は文永十一年五十三歳の三月赦されてまた鎌倉へ歸つた。力を以て上人を屈し得なかつた北條氏の一門は、上人を懐柔せんと試み、「若し他宗に對する折伏をやめ、たゞ法華經を弘むることを主にして今より後を送るならば、相當の保護を與へやう」と申入れたが、上人は之に耳を借さなかつた。上人には尙ほ大なる事業が残つて居る。それは上人の志を嗣いで、協力一致して法華經の弘通のために努むる者を養成することである。今までも上人の弟子となり檀那となつた者が少からずあつて、其の中には法華經に就て充分の智解もあり、又信心の堅固なる者も乏しくはない。しかし上人の亡き後に至つて其の遺志を嗣ぎ、益々法華經の弘通に力を盡すやうな人を、一人でも多く作つて置くのが最も大切で、之が爲には其の門下を陶冶し訓練する事に、今より全力を傾注しなければならぬ。

斯く思ひ定めたる日蓮上人は直ちに袂を拂つて鎌倉を去り、甲州身延山に入つて小庵を結んだ。有らゆる迫害に負けなかつた上人は、固より誘惑によつて心を動さるゝやうなことの有るべき筈がない。孔子が曾て「今の世に剛者なし」と歎じた時に、或る人が申根といふ者は剛者として聞えて居るといつた。孔子は之に答へて、根や慾あり、焉んぞ剛なるを得ん。

といつた。日蓮上人は世界に對して何等求むる所の無かつた人で、曾てその志を述べて

日蓮は少きより今生の祈り無し、たゞ佛に成らんと思ふばかりなり。

といつた。此の如き人であればこそ、其の周囲の何事にも、又何者にも動されずして其の志がまゝに行ふことが出来たのである。身延は京や鎌倉の累ひを遠く離れ、萬一蒙古の來襲によつて國中に騷亂が起つても、その渦中に捲き込まるべき恐れのない地である。且その麓の土地を領する南部氏は堅固なる法華經の信者である。上人が隱棲の場所として此處を擇んだのは思慮深き事であつた。上人は文永十一年の五月から弘安五年、六十一歳の冬まで、身延を出なかつたのである。

但し名は隱棲といふが、實は法華經の行者を養成するといふ大事業を果さんが爲の山住居である。彼の天台傳教の諸師は主として法華經の中に含まれたる深遠にして幽微なる意義を發揮し、釋尊が世に出て教を説きたまへる御本意を明かにすることに努めた。日蓮上人は其の後を承けて、此の法華經の中に於て教へられたる所を吾等の日常生活の上に活現せんことに力を盡した。法華經を口に讀むものは眞に法華經を讀むものではない。心に固く之を信じなければならぬ。之を信するを名けて心讀といふ。更に篤く之を身に行はなければならぬ。之を身に行ふを名けて色讀といふ。凡て有形のものを色といふので、色讀とは身に讀むとの義である。心讀色讀の人が即ち法華經の行者である。上人は有ゆる艱苦を冒して自ら其の身を以て法華經の行者の範を示し、以て其の門下の人々を率ゐて共に法華經の行者たらしめんことを期したのである。之を研究するは像法の世の事である、之を實行するは末法の世の事である。之を實行せんが爲には其の心が常に法華經の精神と一致して居なければならぬ。斯る心を作り上げ



んが爲に、上人は本尊を定め、此の本尊に對して題目を唱ふることを人々に勧めた。南無妙法蓮華經と口に唱ふるは唯だ口にのみ之を唱ふるのではない。心に之を信じ、身に之を行ふの力を得んがためである。即ち所謂身口意三業の一致を期するのである。

當に知るべし佛の御心の我等が身に入らせ給はずば唱へ難きか。

の一語がよく此の意を悉して居る。彼の叡山の戒壇は名のみ戒壇となつて、傳教大師の精神は亡びた。しかし法華經の行者が此の國に充滿する時、初めて眞の法華經の戒壇が此の國に建つべきである。上人は斯る時の必ず到來すべきを信じたるが故に、

日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華經は萬年の外未來まで流るべし。

と云ひ、尙ほ

極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか。

といつたのである。

經は此の如くに貴い經である。時は既に此の經の弘まるべき末法の世である。併し此の經の廣宣流布すべき機運を開くには人の力が何より大切である。その人を作ることが身延入山の目的であつた。されば上人は前後九ヶ年間此の山に在つて、日々に弟子を集めて親しく法華經の深義を説いて其の信仰を奨め、又機會のある毎に多くの信者に書を與へて之を教へ勵まし、致々として倦む所は無かつた。その後時によつて盛衰はあるけれども、兎も角も

上人の教義が今日に傳はつて亡びぬのは、上人が身延に於ける懸命の努力の賜といふべきである。唯だ如何せん永年苦勞を重ねた上に、久しい山籠りのために甚しく健康を損ひ、次第に病弱の身となつた。因て常陸の温泉に浴して病を養はうと思ひ立ち、身延を出て武藏の池上まで来て、暫く旅の疲れを休めんが爲に憩うたが終に再び起たず、弘安五年十月十三日の朝、門下の人々が壽量品を讀誦する聲の中で安らかに逝いた。時に西曆一八二二年、支那は元の世祖の至元十九年であつた。

佛教が汎く此の國に弘まるべき機運を開かれたる聖徳太子は特に法華經を重んぜられた。而して此の國に諸宗の教義の弘まれる最後に於て、法華經の行者たる日蓮上人が出た。(尤も其の後に至つて一遍上人の時宗が起つたけれども、その教義に於ては矢張り念佛宗の一派と見るべきものである。)吾が日本國と法華經とは、まことに深い因縁を有するものといふべきである。

## 二、法華經の流布

法華經が此の日本國に弘まる以前に於て、如何なる由來を有し、如何なる經路を経て來たかを今より概観する事としやう。抑も此の經は釋尊が自ら「諸經の中に於て最も其の上在り」とも、或は「諸經の中の王なり」とも仰せられたる經である。併し佛滅後數百年間は主として小乗の教が世に弘まつて居たので、特に此の經を信する者も無かつたやうである。然るに佛滅後七百年に龍樹が出て、盛に大乘を弘めたが、其の著として知らるゝ大智度論の



中に於て法華經を稱讚し、『其の深意は我等論師の知る所に非ず』といつて居る。佛滅後九百年に天親が出て大乘を弘むることに力を盡したが、其の著に法華論がある。此の論は後魏の菩提流支の漢譯があつて、世に行はれて居る。委しくは『妙法蓮華經優婆提舍』(優婆提舍とは論義の意である)といふのであるが、法華論といふ略名を以て知られて居るのである。その外諸種の論の中に法華經の文の引かれたものは、甚だ多く見出される。

支那に佛敎の傳はつたのは後漢の明帝の十年(西曆六七年)といふことであるが、其の後百九十年許を経て三國の魏の時に初めて法華經が漢譯せられ、隋の代までに都合六種の漢譯が出来た。併し支那は幾度か戦亂があつた爲に此の六種の譯本の中の三種は散佚して傳はらず、三種のみが今に傳はつて居る。之を世に三存三没といふのである。之を譯せられたる時代の順に列ねて見ると、

|          |       |                  |    |
|----------|-------|------------------|----|
| △法華三昧經   | 六卷    | 魏正無畏譯            | 散没 |
| △薩菩分陀利經  | 六卷    | 西晋竺法護譯           | 散没 |
| ○正法華經    | 十卷或七卷 | 西晋竺法護譯           | 現存 |
| △方等法華經   | 六卷或五卷 | 東晋支道林譯           | 散没 |
| ○妙法蓮華經   | 八卷    | 後秦鳩摩羅什譯          | 現存 |
| ○添品妙法蓮華經 | 七卷    | 隋闍那崛多譯<br>隋達磨笈多譯 | 現存 |

以上の如くである。斯く六種の譯があつたのは、同一の原本が六通りに譯されたのでは無く、六種の原本があつた

のである。(現存して居る三種がさうであるから、失はれた三種も亦同様と推定されるのである。)何故に原本が幾種もあつたか、之に就ては後段に至つて述べやうと思ふが、以上現存する所の三種を比較して見て、妙法蓮華經が有らゆる點に於て勝つて居ることは、多くの學者の一致する所である。第一に其の原本が最も完備せるものである。第二に其の譯文が最も能く原意を傳へて居る上に、文章としても絶品と稱さるべきものである。

此の譯者の鳩摩羅什は龜茲國の人である。龜茲は天山南路の庫車附近で、今はカンガルと呼ぶ地である。支那の南北朝時代から唐代にかけては、此の地にも佛敎が頗る盛に行はれて居た。羅什の父は天竺の名門の出であつたが、大乘を學んで學徳共に高く、龜茲國へ來て國王の尊信を得、王妹を妻とした。羅什は國王の孫に當るのであるから幼年の時から多くの人に尊敬せられて居たが、父母の感化を受けて佛敎を學ぶことを好んだ。母は羅什が非凡の天性をもつて居るのを見て末頼もしく思つたが、多くの人の尊敬を受くる爲に心驕つて、大成せずして終るであらうと懸念した。それ故に羅什が九歳の時に之を携へて辛頭河を渡り、罽賓國へ移り住んだ。羅什は此處で盤頭達多といふ學者に就て修行を積み、十二歳の時に一度故郷へ歸り、それより諸國を周遊して多くの學者を尋ね、益々大乘を究めたが、中にも沙勒の須利耶蘇摩は優れた人であつた。去るに臨んで彼は最も完備したる法華經の原本を羅什に與へた。彼は左の手に經典を取り、右の手に羅什の頭を摩で(印度の習はしとして、人の頭を摩づるのは其の人を信認する意を表するのである。)之に授與して

佛日西に入りて遺耀將に東に及ばんとす。此の經典は東北に縁有り、汝慎んで傳弘せよ。



といつた。此より羅什は大乘の教を東方へ傳へやうとの志を立てたが、その機會を得ることは固より容易でない。それで暫く故郷の龜茲に住して時の至るを待つて居た。時に支那は所謂五胡十六國分立の時代であつたが、前秦の王符堅は其の將呂光を遣はして龜茲を討つた。呂光は兼て符堅の命を受けて居たので、龜茲に至ると共に羅什を探し求めた。羅什は愈々佛法を東に弘めて、須利耶蘇摩の依託を果すべき時が來たことを知り、喜んで身を呂光の陣に投じた。

たとへ敵の王たる符堅が深く佛法に歸依して居ることが分つて居たにもせよ、兎に角單身敵軍の將に伴はれて數千里の遠きに入ることは、身命を惜まざるの覺悟無くして出来るものではない。羅什が曾て佛法を東方へ傳へんとする志を其の母に告げた時に、母は其の志の篤きを嘉すると共に、彼がその爲に多くの苦難に遭ふべきことを案ずるさまであつた。時に羅什は慨然として、

他の爲に身を惜まざるは菩薩大士の道なり。苟くも斯の乘を傳ふ可くんば、爐鑊の苦に當るも敢て辭する所にあらず。

といつたといふが、今や其の言を實にすべき時が來たのである。さて羅什は呂光に伴はれて支那に入つたが、時に秦王符堅は病死して、その國勢は將に傾かんとする際であつたので、暫く涼州に留つて呂光の保護を受け、何の爲すことも無く空しく日を送るより外はなかつた。

彼此するうちに後秦が起り、其の第二代の王たる姚興が禮を厚うして羅什を迎へた。羅什は弘始三年十二月を以て長安の都に入り、國師を以て待遇せらるゝ事となつた。時に歲六十六であつた。此より同十一年(西曆四〇九年)八月、七十四歳で示寂せるまで前後九年間長安に留まり、大乘の教を弘むることに全力を注いだ。殊に其の不朽の功績として稱ふべきは經論の譯述である。其の譯出したるもの、經に於ては妙法蓮華經の外に維摩經、梵網經、小品般若經等の八種あり、論に於ては大智度論を始めとして數多くあり、凡て三百八十餘卷に達した。其の譯出の方は羅什自ら原本を取つて、其意義を語り、多くの門下の人々が之を筆録したるものを比較討論して、譯文を決定したのである。されば羅什は其の門下の人々に向つて「自分が死んだなら遺骸を茶毘に附するであらうが、若し平生自分の傳ふる所に誤りがないならば舌だけは焼けずに残るであらう」と語つたが、果して其の通りであつたと傳へられて居る。

何れの譯文にも力を籠めぬものは無かつたが、就中法華經の漢譯は羅什の心血を濺げるものであつた。此の漢譯の筆録及び討議に與つたものは八百餘人、其の聽衆等は凡て二千餘人にも達したと傳へられる。而して國王たる姚興も其の譯場に親臨して質問を試みたこともあるといふ。此の如くにして成つた法華經の漢譯が正確に原文の意を傳へ得たのみならず、その文章のみを以てしても古今の絶品と稱せらるゝのは怪むに足らぬことである。但し漢文を以て果して梵語の中に含まれたる意義が遺憾なく言ひ現はし得らるべきか否かに就ては隨分議論のある事で、現代に於ても『漢文と梵文とは全く性質のちがふものであるから、漢譯本によつて佛教を學んでも、正しい理解は得られぬ』と主張する學者もある。自分等のやうな、梵語に就ての智識をもたぬ者は、斯る主張の正否を判すべき力



をもたぬのである。併し例へば英佛等の語と日本語とに就て考へて見ると、それは全く性質のちがふ國語であるから、英文や佛文で書いたものを日本語に其儘譯することは到底困難と思はれる。けれども例へば英文で書いたもの意味を充分咀嚼して自分のものにして居る人が、原文に囚はれずに、自分の獨特の日本語を以て之を言ひ現はすことは確かに出来るわけである。羅什の漢譯は唐の道宣が

悟達を以て先と爲し、佛遺寄の意を得たり。

と評した通り、決して原文の直譯ではなく、其の語に囚はれずして、其の真正の意義を現はすことに苦心したものである。又其の一字一句に就てまでも苦心を重ねたことは、法華傳の中の次の一話によつても知らるべきである。

羅什が原本を取つて其の意を述べ、僧叡等が之を筆受して、五百弟子受記品に至つた時に、羅什は「此の一句が法護の譯には天見人、人見天となつて居る。これで原文の意味は悉されて居るのだが、あまり拙い言ひ現はし方である」といつた。時に僧叡が之に應じて「それは人天交接、兩得相見といふべきではありませんか」といつた。

羅什は「其の通りである」と大に悦んで、此の譯に従ふことにした。

羅什の如き不惜身命の覺悟を以て法を弘めた人が、これ程の苦心努力をした漢譯であるから、吾等は此の漢譯を信じて誤りはあるまいと思ふのである。

羅什が法華經を譯したのは秦の弘始七年（西曆四〇五年）であるが、その後百七十年許にして天台大師が法華經弘通のために起つた。而も此の間に於て法華經の註を作り釋を加へたものは七十餘人に上つたといふことである。

但し支那は内亂外寇が多い國であるために、此等七十餘家の註の大部分は亡びてしまつたが、その中に於て光宅寺の法雲とか、吉藏即ち嘉祥大師とかいふ人々は特に群を抜いて居た。斯く法華經の弘通に力を盡した人が多く出たのは喜ぶべきことであるが、此等の人々は必ずしも法華經を以て諸經の王と爲し、法華經の弘通に全力を注いだのでは無い。此等の人々は何れも華嚴宗又は涅槃宗の學者であつたから、たとへ法華經を重んじたといつても、或は之を以て華嚴に次ぐものとし、或は之を以て涅槃に次ぐものと考へたのである。然るに天台大師の出るに及んで法華經の法華經たる所以が初めて遺憾なく發揮せられた。

天台大師といふは、其の天台山に住したるが故に後世より呼ぶ所であつて、その名は智顛といふのである。其の家は陳氏にして梁の名門である。大師は幼年の時から寺に行つて經を誦することを好んで居たが、其の十五歳の時に内亂が起つて、梁の國は殆んど滅亡に瀕し、陳氏の家も其の地位を失つてしまつた。大師は茲に於て、佛の正法を弘めんが爲に自己の身を捧げんと志を立て、十八歳の時相州の果願寺に於て受戒した。其後慧曠律師の教へを受け、また大賢山に至つて法華の三部經を究め、幾くもなく學問識見に於て何人も其の右に出る者の無きに至つたので、「江東に師無し」と歎息して心甚だ樂まなかつた。時に光州の大蘇山に慧思禪師といふ大徳の人が居るといふことが傳はつたので、是非其の人に於て教へを受けやうと思ひ立つた。併し光州まで達するには兵亂の中を越えて行かなければならぬので、之を止むる者もあつたが、大師は聽かず、「法を求むるためには固より身命を惜まぬ覺悟をしなければならぬ。此儘にして此處で終るならば、自分の生涯は全く無意味であらう。如何なる危難も辭す



る所ではない』といつて、兵刃の中を冒して大蘇山に至り慧思に謁した。

慧思は一代の高僧であつたが、其の師の慧文といふ人が北齊に於て第一の碩學であつた。曾て『我は江淮に獨歩す、誰をか呼んで師とせん。若し經を得ば佛を師とし、若し論を得ば菩薩を師とせん』といひ、獨り經藏に入つて香を焼き花を散じ、手を後にして一卷を抜き出し、開いて見たところが龍樹菩薩の著なる中觀論であつた。之を開

57

因縁所生の法、我即ち是れ空なりと説く。亦是に假の名を爲る。亦是れ中道の義。

といふを読み、心に深く銘する所があつて、何ともいはれぬ悦びを感じた。慧文は此の悟り得た所を慧思に傳へ、慧思は之を天台に傳へたといふことである。空といふは平等觀である、假といふは差別觀である。之を統一するものが即ち中道である。中道の義を明かにすれば、即ち大乘の妙諦を得べきである。

天台大師が初めて慧思(南岳大師)に謁した時、大師は二十三歳で、慧思は四十七歳であつた。慧思は此の青年と相語つて、深くその非凡なる天分を有するに服し、吾が道を傳ふべきは此の人より外にないと感じた。

昔靈山に共に法華を聽く。宿縁の逐ふ所今復た來る。

とは其の悦びを語れる言であつた。大師もまた良き師を得たることを心から悦び、誠心を以て之に仕へた。慧思が法華經の四安樂行を説くを聽いて深く感ずる所があつて、二七日の間經を誦し、藥王品の一切衆生喜見菩薩が其の身を燃して佛に供養したのを、諸佛が共に讃めて『是れ眞の精進なり、是を眞の法をもて如來に供養すと名く』と

いふに至て豁然として心に悟る所があつた。之を慧思に告げて其の批判を求めたところが、慧思も非常に感服して、汝に非ざれば感ぜず、我に非ざれば識らず。

といつた。慧思は光州を去つて故郷へ歸る際に、弘法のことを大師に托したので、大師は即ち金陵に入つて大乘の教を弘めた。金陵は陳の國都で、即ち今の南京である。

金陵に入つたのは大師が三十歳の時であるが、此より凡そ八年の間金陵に居り、法華經、大智度論等を講じて名聲大に揚り、教へを請ふもの其の門に絶えざる有様であつた。陳の宣帝は深く之に歸依し、その他高官名流の歸依する者も頗る多かつた。併し大師は斯る得意の境遇に安んずる考へはなかつた。法華經は如來一代の説法の結論である。法華經が一切の經に勝つて居るといふのは、法華經を説かれたことに依つて、一切の經の用が無くなつたといふ意ではない。法華經を説かれた爲に、今までの説法が何を目的としたものであつたかといふ事が初めて明かになつたのである。即ち一切の經は法華經を得て初めて活きたのである。法華經を説かるゝ前に於ても佛の尊いことは充分に説かれてあつた。凡夫が煩惱に役せられて、淺ましい生活を續けて居る有様も充分委しく説かれてあつた。又その凡夫の境界を脱すべき種々なる修行に就ても精細に説かれてあつた。而も此等の説法を統一して、凡夫の佛と成るべき直道を明かに指示されんが爲に、改めて此の法華經を説かれたのである。法華經によつて一切の經の活きて來る有様は、宛も樹木に根があることによつて其の枝も葉も皆榮えて居るやうなものである。併し枝や葉は根のあるが爲に悉く無用になつたといふことは無い。法華經を讀んで其の深意を知り、然る後に一切の經を讀めば、



何れの經に於て説かれたる所も皆吾等の佛と成るために役立つものであることが明かに分るのである。けれども佛敎は凡ての人の爲の佛敎である、一部の學者の爲の佛敎ではない。若し多くの經を比べて讀んだ後でなければ、成佛の道が見出されぬといふならば、一切衆生を救はんが爲に世に出て法を説かれたといふ佛の御志はいつ迄も達せられぬわけである。此の大なる問題を解決することが、即ち法華經が最勝の經たることを知り得たる自己の任務であると、大師は思ひ定めたのである。

法華經を中心として釋尊御一代の説法を解釋し、之を一の系統として後世に遺すならば、後世の者は初めて其の向ふ所に迷はずして、共に一步より一步と凡夫の境界を離れ、佛の境界に近づいて行くことが出来るであらう。此の大なる事業を爲し遂ぐる事が自己の使命であると共に、大師は金陵の都に居て多くの人の歸依を受け、得意の日を送ることが殆んど無意義に思はれて來た。是れは實に大事業である。之を爲し遂げんが爲には更に深く究めなければならぬ、更に靜かに考へなければならぬ。大師は斯く思ひ定めて陳の大建七年九月、金陵の都を去つて天台山に入つた。時に歳三十八であつた。時にその地方は飢饉に惱まされ、大師に衣食を奉ずる者も稀であつたので、大師は弟子の慧禪等と共に苜蓿を種を橡の實を拾つて、辛うじて生命を保つたといふ。大師は斯る貧乏の生活に甘んじ益々深く其の研鑽を積んだが、其の徳を慕うて來り集る者も漸く多くなり、大建九年に至つて宣帝の勅命により始豐縣の税の一部分を之に給與せらるゝ事となつた。

其の後宣帝から度々の召命があつたので、辭することを得ずして山を下り、また金陵に入つて靈超寺に居り、帝のために太極殿に於て仁王經を講じたが、帝は大に感激して三禮し、百官も皆深き歸依の心を起した。宣帝崩じ、後主の代に至つて陳は亡びて隋の代となつたが、晋王（後に太子となり、帝の後を承けて煬帝となつた人である。）は大に天台大師に歸依し、大師は隋の開皇十一年に晋王の爲に菩薩戒を授けた。時に王は大師に向ひ「師は佛法の燈を傳ふ、稱して智者とすべし」といつた。之によつて後世、大師のことを智者大師とも呼ぶのである。大師はその後荊州に至つて玉泉寺を創し、また天台山へ歸つたが、開皇十七年十月、晋王の使に迎へられ、山を出て石城に至り、疾を發して同十一月を以て寂した。時に歳六十である。大師の説いた所は弟子の灌頂が之を筆受し、書として之を後世に傳へた。其の書の一なる『法華玄義』の序に於て、灌頂は師のために其の十徳を數へて居る。

大法東漸して僧史の載する所、詎に幾人有りて、曾て諸を聽かずして自ら佛乘を解する者ぞ。縱令發悟すとも、復た能く定に入りて陀羅尼を得る者有りや不や。縱令定慧を具すとも、復た帝京に二法を弘むるや不や。縱令席を盛にすとも、徒衆を謝遣して山谷に隱居するや不や。縱令世を避け玄を守るも、徴されて二國の師と爲るや不や。縱令帝者に尊まるゝも、太極に對御して仁王般若を講ずるや不や。縱令正殿にして宣揚すとも、主上の爲に三禮せらるゝや不や。縱令萬乘膝を屈するとも、百高座にして百官稱美讚歎し彈指の殿に喧しき有りや不や。縱令道俗顯々たるも玄に法華の圓意を悟るや不や。縱令經意を得るとも、能く文字なくして樂説辯を以て晝夜流瀉するや不や。唯だ我が智者のみ諸の功徳を具せり。

此の文は眞に能く天台大師の一生を悉せるものである。大師は學徳共に高きを以て王公貴人の歸依を受けたが、之



によつて少しも心を動さず、たゞ佛の正法を世に弘めんことを以て其の志とした。さりながら王公貴人の歸依する所は即ち世俗一般の注目する所であることを知つて居たから、敢て一身の名利の爲でなく、法を弘めんが爲には必ずしも富貴の室に近づくことを避けなかつた。法華經の涌出品に「善く菩薩の道を學して、世間の法に染まざる」と蓮華の水に在るが如し」とあるは、宛ら大師のための語の如くである。

大師の説を知るためには所謂天台の三大部を讀むべきである。尤も其の他にも維摩經、金光明經、仁王經、梵網經等の註釋があり、又四教儀その外の著もあるけれども、三大部は最も重要なものである。それは摩訶止觀十卷、法華玄義十卷、法華文句十卷である。摩訶止觀は天台大師の見識によつて立てられたる大乘佛敎の系統的敘述である。法華玄義は法華經の精神を發揮したる達意的説明である。法華文句は法華經の各品に就て一々其の深意を解釋したるものである。何れも門人灌頂の記する所であつて、能く大師の意を悉して居る。良き師にあふことも難く、良き弟子を得ることも難い。慧思を師とし、灌頂を弟子としたる大師は、まことに幸福な人といふべきである。此の三大部によつて見ると、天台の教學は教相門と觀心門との二つに分れて居るのである。教相門といふのは釋尊御一代の説法に分類を施し、其の説法の順序様式、その究竟の目的等を明かにするものである。觀心門といふのは吾等の内的生活に就て徹底的の觀察を爲し、如何にして凡夫の境界を離れ佛の境界に到達すべきかを究むるのである。此の二門を併せ學ぶことによつて、假令三千年を隔つるとも、眞の佛弟子となることが出来るのである。

其の教相門に於ては五時八敎の説が立てられてある。五時といふのは釋尊御一代の説法を五の時期に分つて、其

の特色を明かにしたのである。即ち

第一華嚴の時、第二阿含の時、第三方等の時、第四般若の時、第五法華涅槃の時。

をいふのである。第一に華嚴といふのは「華を以て嚴飾する」といふ意である。華とは佛の具へたまへる徳に譬へたので、萬徳を以て嚴飾せられたものは即ち佛身である。されば華嚴の時といふのは「佛とは如何なるものか」を説かれた時で、その説法は華嚴經に録せらるゝ所である。其の漢譯は三種ある。即ち佛馱跋陀羅の譯六十卷、實叉難陀の譯八十卷、般若三藏の譯四十卷である。

次に阿含とは譯して法歸といふので、即ち萬法の歸する所といふ義である。吾等凡夫の生活の如何なるものであるか、煩惱は如何にして起るか、其の煩惱を除くには如何にすべきかといふやうな事が悉く説き明されてあるから、之を阿含と稱するのである。此の部類に屬するものが即ち所謂小乘敎である、經典として今に傳はるものは増阿含、長阿含、中阿含、雜阿含等で、之を四阿含と稱するのである。

第三に方等といふは程度の低い者にも、高い者にも共に利益を與ふべき説法をいふので、方とは廣の義、等とは均の義である。(又大乘經のことを凡て方等といふが、それは方正平等の義であつて、此の天台の用語とは意味がちがふのである。)即ち小乘を説き終つて大乘へ移らるゝ時期が此の方等の時である。

第四に般若の時といふは即ち純ら大乘を説かれた時である。般若とは譯して智慧といふので、萬有の實相を明かにするのが眞の智慧である。此の智慧の中よりは一切衆生を救ふべき慈悲の働きが生れるので、般若を得るその修



行が即ち菩薩行である。

第五に法華涅槃の時といふが、涅槃經は釋尊の入滅に先つて説かれたるものである。それ故に之を最も重要なものとするのが涅槃經の主張であるが、天台大師は之を法華經を敷衍したものに過ぎぬと見たのである。此に至つて初めて釋尊の御眞意を打明けられ、今までの説法の歸決を與へられたものである。

以上釋尊御一代の説法を五の時期に分つたのは天台大師獨特の見識に依るものであるが、此の五時を更に五味を以て解釋した。その五味の説は涅槃經に基くものである。即ち涅槃經の聖行品に、

譬へば牛より乳を出し、乳より酪を生じ、酪より生蘇を生じ、生蘇より熟蘇を出し、熟蘇より醍醐を出す。醍醐は最上なり、衆の病皆除かる、所有の諸の薬も悉く其の中に入る。佛も亦是の如し。

とあるにより、之を五時の譬喩に宛てた。生蘇といふは牛酪を以て作つた麤末な酒である。熟蘇とは之を更に精製したるもので、醍醐とは其の最上なるものである。因て之を五時に配當して、

華嚴は乳、阿含は酪、方等は生蘇、般若は熟蘇、法華涅槃は醍醐。

とした。又之を太陽が萬物を照すに比した。それは華嚴經の寶王如來性起品に依るものであるが、太陽が先づ高山を照し、幽谷を照し、平地を照すのを釋尊御一代の説法に比し、太陽が正しく南方に位せる正午の時を法華涅槃の説法に當てたのである。その平地を照すのを更に三つに分つて、

華嚴は高山、阿含は幽谷、方等は食時、般若は禺中、法華涅槃は正中。

とした。食時とは今日でいへば午前九時から十時までのことである。佛弟子たる者は正食を一回、小食を一回攝ることが正しき規定である。その正食といふのは普通の食事で、小食といふのは團子のやうな物を食するのである。而して正食をする時が前にいふやうな時刻なのである。次に禺中といふは將に正午に近づかんとする頃のこと、正中とは即ち正午である。

次に八教といふのは釋尊御一代の説法を其の内容と、其の方式とによつて分類したもので、之を化儀の四教と化法の四教とに別つのである。化儀とは衆生を教化するに就ての方法手段のことである。化法とは之を教化せんが爲に説かるゝことの内容である。譬へていへば化儀とは藥の調合法のやうなもので、化法とは藥材のやうなものである。其の化儀の四教といふは即ち

一に頓教、二に漸教、三に秘密教、四に不定教。

のことである。此の四種の教化の方法は、勿論聽く者の性質により機根に應じて、最もその効果のあるべきやうに之を應用せらるゝのである。先づ頓教といふは最初から大乘の深遠なる教を説かるゝことである。次に漸教といふは、先づ淺い事を説いて漸を以て深きに導き入るゝことである。第三に秘密教といふは多くの人の集つた時に、個々別々に之に適せることを教へられ、各の人は互ひに相知らずして、各得る所あるをいふのである。第四に不定教といふは、多くの人に對して共に教へを與へられ、其の人々の力に應じて得る所あるに任せて置かるゝことである。此の四種の教へ方を宜しきに應じて用ゐらるゝのである。



次に化法の四教といふのは釋尊の説かれたる所の内容を、類によつて分けたものであつて、即ち次の如くである。  
一に藏教、二に通教、三に別教、四に圓教。

第一の藏教といふは三藏が一通り揃つたる教で、これは専ら初歩の人の爲のものである。三藏とは經律論をいふ。經とは佛が吾等に示されたる所を録せるものである。律とは佛弟子たるものが日常に於て守るべき規律のことである。論とは以上の經と論との説明解釋である。此の經律論は何れも夥しい數のものであるから、何れも之を藏と稱するのである。第二に通教といふは初歩の人にも、更に進んで菩薩の行を勵む人にも共に力となるべき教のことである。第三に別教といふは専ら菩薩の道を説かれたるものである。第四に圓教といふは圓滿完全なる教のことで、即ち佛の自ら悟りたまへる所を打明けられたるものである。

以上八種の教が縱横自在に交錯せられたものが釋尊の成道以後、法華を説かるゝまでの説法であつて、即ち方便の教である。之を茲に擧げたる五時に配して見れば、華嚴の時は圓教と別教とを兼ねたる故に之を「兼」といひ、阿含の時は但だ藏教のみである故に之を「但」といふ。方等の時は藏通別圓の四教を併せて説かれたる故に之を「對」といひ、般若の時は圓教に通教と別教とを帶せしめたるが故に之を「帶」といふべきである。而して法華の時に至つては所謂「正直に方便を捨て但だ無上道を説く」のであつて、純圓の教と稱すべきは唯だ是れのみである。されば又法華は以上八教を超越したるものといふ意味で、超八の醍醐と稱せらるゝのである。唐の妙樂大師は  
若し超八の醍醐に非ずんば、安んぞ此の經の所聞と爲さんや。

といつた。

斯く釋尊御一代の説法を分類して、法華經の所説が其の歸着點たることを示すのが即ち天台の教相門である。而して其の純圓の教といふのは即ち三諦圓記の説である。諦とは「確かで動かぬ」といふ意である。三諦とは即ち前に慧文のことを述べた時に引いた「空假中」のことである。萬有が唯一絶対の理の發現せるものなることは疑を容れぬ。これ即ち空諦である。而も其の發現して萬有となれば、無限の差別が此處に生ずる。これ即ち假諦である。此の空も眞實であり、假も亦眞實である。一が發して無限となるのである、無限なるものが一に歸するのである。これ即ち中道である。此の三諦を觀じ得ることを三觀といふ。所謂有空中である。三諦は三といへども畢竟一である。この一なることを知るのが、即ち諸法の實相を知ること、法華經には  
唯だ佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡したまへり。  
とある。それを打明けて説かれたのが即ち純圓の教である。

此の教によつて修行を積んで怠らぬ時には、吾等凡夫と雖も終に佛の境界にも到達し得べきである。但し其の間に限りなき階段の存すべきことは勿論である。其の階段を大別して五十二位とし、或は六即といふのである。五十二位のごとは暫く措き、六即の説の大體をいはう。六即とは六階の位である。而も之を六位といはずして六即といつたのに深い意義がある。即とは「不離」の義である。凡夫と佛とは天地ほどの懸隔があるけれども、全く離れたものではない。凡夫より一歩一歩と進んで行けば、結局佛と成り得べきであるから、實は相連つて居るのである。



此の意によつて、六位といはずして六即と名けたものである。その六即とは次の如くである。

- 一、理 即
- 二、名字 即 外 凡
- 三、觀行 即 内 凡
- 四、相似 即
- 五、分證 即—聖 因
- 六、究竟 即—聖 果

理即といふは凡夫の境界で、究竟即といふは佛の境界である。その一々に就て簡単に説明して見れば、先づ理即といふは佛法の何たるを全く辨へ知らぬ凡夫の境界である。凡夫と雖も佛性を具へて居るのであるから、理に於ては佛と等しきものである。しかし其の佛性を開發せしむべき道を求めぬ故に、いつ迄も凡夫に止まるのである。次に名字即といふは或は聞き或は讀んで、佛法に關する智識を一通り具へ得たものである。けれども其の知り得た所が未だ實行せらるゝ迄には至らぬのである。次に觀行即といふは其の知り得たる所を實行せんことに努め、漸く凡夫の境界を脱せんとする者である。前の理即と名字即の者は全くの凡夫であるけれども、此の觀行即と次の相似即の者は凡夫でありながら、漸く聖者の流に入らんとする者であるから、前二者を外凡といふに對し、此の二者は内凡と稱せらるゝのである。相似即とは其の行に現はれた所は略ぼ聖者に似て、何等の缺點の無いやうになつた者であ

る。しかし其の心の中に於ては未だ煩惱を除き盡したとはいはれぬ。次に分證即といふのは眞に菩薩としての徳を具ふるに至つた者で、其の口に言ふ所と、其の身に行ふ所と、其の心に思ふ所とが能く相一致し、漸く佛の境界に近づかんとするのである。證とは即ち證悟の意で、各その分に應じて悟るのである。終りに究竟即とは一切の煩惱を離れ盡したもので、即ち佛の境界である。聖とは煩惱を脱したものをいふので、眞の聖といふべきは佛のみである。菩薩は佛と成り得べき行を積むものであるから、之を聖因といふ。その結果の現はれたものは聖果、即ち佛である。天台大師は以上の六即を數へ擧げて後に、

此の六即は凡に始まつて聖に終る。凡に始まるが故に疑怯を除き、聖に終るが故に慢大を除け。

といつた。疑怯とは自分のやうな者が佛に成るといふことは到底出來まいと、自ら疑ひ危ぶむことである。しかし如何なる佛でも最初から佛であつたのではなく、凡夫が修行を積んで佛になつたのである。誰でも凡夫から始まるのだと知るならば、疑怯の念を起すには及ばぬことである。慢大とは自ら知り得たる所を恃んで驕慢の念を起すことである。自ら足れりとする者は即ち自ら進歩の路を塞ぐものである。佛法を習學するものは誰も皆佛と成らんことを志すべきで、佛と成らぬまでは修行を止めてはならぬのである。若し佛と成ることを志するならば、中途に於て慢大の念を生じ、自ら足れりとするやうな不心得は無かるべき筈である。

以上は天台の教相門の大體であるが、此より其の觀心門に就て略述しやう。觀心とは吾が心を觀察することである。佛は吾等に對して『我が如く等しくして異ること無からしめんと欲す』と仰せられたのであるから、吾等も皆



佛と成り得べきことは疑ひ無き所であるが、吾等自身に此の心の如何なるものであるかを明かにしなければ、佛の教へに従つて修行すべき正しき途は見出されぬわけである。天台大師は之が爲に一念三千の説を立て、吾等が皆共に佛と成り得べきことを明かにした。其の基く所は固より法華經である。但し法華經には一念三千といふが如き説はない。大師は法華經を精讀し、その文字を離れて其の深意を究め、初めて一念三千といふことを説き出したので、日蓮上人は之を評して

一念三千の法門は但だ法華經の本門壽量品の文の底に沈めたり。

といつた。此の一念三千の説は天台の著たる摩訶止觀の中心となつて居るもので、實に天台の教學の骨髓である。

止觀とは梵語の奢摩他を譯したものであるが、止とは止息の義である、即ち忘念を止むるのである。觀とは觀達の義である、即ち眞理を觀するるのである。天台大師が

法性寂然たるを止と名け、寂にして常に照すを觀と名く。

といつたのは簡にして最も要を得て居る。固より止と觀と二つあるのでなく、忘念を止め得れば即ち眞理を明かにし得らるゝのである。唐の妙樂大師は之を説明して、

中道は即ち法界、法界は即ち止觀なり。止と觀とは不二にして境と智と冥一す。

といひ、更にまた

此の止觀は天台智者、己心中所行の法門を説くなり。

といつて居る、止觀の極致たるものは、即ち一念三千を知ることである。

一念三千とは吾等の一念に三千世間を具するといふことである。此の事を知るためには先づ此の一念の中に十界の存することを知らなければならぬ。十界とは即ち佛界、菩薩界、緣覺界、聲聞界、天上界、人界、修羅界、畜生界、餓鬼界、地獄界である。吾等心の働きは殆んど無量であるけれども、之を大別すれば、以上の十界の何れにか屬すべきものである。此の心の中を如何なる念が支配するかによつて、それ／＼に別なる世界が實現されて來るのである。之を列記して見れば、次の如くである。

|           |   |
|-----------|---|
| 地獄界……………瞋 | 慧 |
| 餓鬼界……………貪 | 欲 |
| 畜生界……………愚 | 癡 |
| 修羅界……………諂 | 曲 |
| 人界……………平  | 正 |
| 天上界……………歡 | 喜 |
| 聲聞界……………無 | 常 |
| 緣覺界……………無 | 常 |
| 菩薩界……………慈 | 悲 |

六凡

四聖



佛界……慈悲

若し瞋恚の念が吾等の心を支配し、反省の餘裕が全く無くなれば、吾等は周圍の一切の者を敵とすることに成る。此の時吾等の心の中には地獄界が實現されて居るのである。若し貪欲の念が吾等の心を支配すれば、何人に對しても、又何事に就ても自己の欲望を満足させることより外は考へず、果てしなく求め求めて已まぬのである。此の時此の心の中に餓鬼界が實現されるのである。次に愚癡とは唯だ眼前の事にのみ心を取られて、その前後の關係に就て考慮する力の全く缺けた状態をいふのである。吾等の心が全く斯うなつてしまへば、畜生界がそこに實現せらるるのである。次に諂曲といふは正しい理を曲げて其の時の便宜を謀る心である。斯ういふ心になれば互ひに其の私を濟さんと相争ふに極つて居る。即ち修羅界が實現せらるゝわけである。又平正といふは何れにも極端までは行かぬ状態である。貪瞋癡の如き煩惱は絶えぬけれども、煩惱ばかりが心の全體を支配してしまふのでもなく、人を愛し人を憐れむ念もあるけれども、慈悲ばかりを行することも出来ぬといふやうなのが即ち普通の人界である。若し又歡喜の念のみが心に充ちて居る時は、即ち天上界がこゝに實現する。以上を併せて六道といふ。又吾等は心の動き方によつて此の六道の何れかへ趣くのであるから、之をまた六趣ともいふのである。

吾等の心は境遇により事情によつて常に動く。或時は非常なる歡びを感じて天上界が此の心に實現するが、又忽ち瞋恚の念を起して地獄界を實現し、或は貪欲の念のみが勢力を得て餓鬼界が實現し、暫くあつて平正に返つて元の人界となるといふやうに、變轉して休まぬのである。此の如き状態を稱して「六道に輪廻する」といふのである。

佛は此の如き状態に在る者の多きを深く憐れみ「唯我一人のみ能く救護を爲す」とて世に出て法を説かれたのである。佛の教へられた所によつて修行を積み、凡夫の境界を離るゝ時は即ち聖者となるのである。眞に聖といふべきは佛のみであるけれども、佛の道に志すものは聖者の流に入ることの出来たものであるから、暫く併せて聖と呼んでも宜いのである。其の中に於て吾等が心を惹かるゝもの、即ち世間の榮華とか名利とかいふものに一も常住不變なるは無く、一も頼むに足らぬといふことを、佛の教へを聞いて深く感じ、其等のものに心を惹かれぬやうになつた者は聲聞と呼ぶるのである。又佛の教へを聞く中に於て特に十二因縁（本文文化城論品に就て其の委しいことを知られたい。）を觀じて、世間の無常を悟り得たものを緣覺といふ。或は又佛と時を同うせぬものが佛の遺されたる教へを、自ら日常に遭遇する事物に思ひ比べて、無常を悟り得たのをも同じく緣覺と呼ぶのである。此の聲聞と緣覺とを併せて二乗といふ。二乗は何れも世間の事物に囚はれぬ境界となり、一切の累ひを離れ、一切の罪に遠ざかり得たものであるが、未だ世間の多くの惱める者を救ふべき力は具はらぬのである。若し己を救ふと共に他を救ひ、自ら覺ると共に他を覺すことを志とし、慈悲の行を積むことを專として修行を續くるならば、即ち菩薩と呼ぶべき者である。菩薩の行を重ねて到達し得たる最後の地位が即ち佛である。以上の四聖は何れも正しき教へに依つて修行を重ねた結果として到達したる地位であるけれども、如何に修行を積めばとて決して無より有を生ずることの出来るものではない。二乗たり、菩薩たり、佛たるべき根本の性質は吾等に本來具はつて居るのである。何人でも咲き充ちた花の散るのを見たり、年の若い人の死んだ噂を聞いた時には、無常を感じぬものはあるまい。其の無常を



感じた刹那には、其の人の心に聲聞界か緣覺界か實現されて居るのである。又全く人の道を學ばぬ者でも、其の子を愛することは知つて居る。或は其の子の病む時に共に憂ふことは知つて居る。斯る時には、自己一身の利害損得の打算は忘れて居る。斯る時に其の人の心に菩薩界乃至佛界が開けて居るのである。唯だそれが久しく續かずして、忽ち種々の煩惱が動いて來るから、また元の凡夫に戻つてしまふのである。

斯く考へ來ると、吾等の一念の中に十界が悉く具はつて居ることは疑へぬ。此の事が明かになれば、次に『十界互具』といふことが考へられなければならないのである。十界互具とは以上の十界の何れもが皆他の界の性質をも具へて居るといふことである。例へば今吾が心を瞋恚の念のみが占領して、吾が心に地獄界が現はれて居るとしやう。此の時に佛界や菩薩界が全く失はれ盡したかといふと、決してさうでは無い。たとへ現はれて活動はして居ないでも、慈悲の念なるものが心の奥底には潜在して居るのである。又慈悲の念が勢力をもつて居る時でも、貪欲や瞋恚の念が全く無くなつてしまつたのでは無く、何處かに潜在して居るのである。斯く十界の何れにも、その背後には他のものが潜在することを十界互具といふので、十界互具なるが故に即ち百界となるのである。

此の百界に十如が具足する故に千如となる。十如とは十如是のことである。十如是といふは凡ての事物の存在するに必ず具へなければならぬ條件をいふのである。如是とは『いつも斯うである、決してちがふことは無い』といふ意である。その十如是といふは即ち

如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等。

である。相といふのは其の物の外にあらはれたる形相のことである。其の形相なるものは其の物の性質の外に現はれたのであるから、既に相があれば必ず性のあることを認むべきである。而して其の性は其の物の本體に具はつて居るのである。既に性を認むれば、その性を具ふる所の體のあることを認めなければならぬ。何物でも其本體に性質が具はり、其の性質が形相となつて現はるゝので、相性體三者はいつも不離である。斯くして此處に一つの物が存在すれば、それには何等かの力が具はり、その力は又何等かの作用を爲すのである。即ち力と作との二者も事物の存在に缺くべからざる條件である。次には因緣果報である。因とは即ち事物の存在するための原因で、緣とは其の原因に伴ふ種々なる事情のことである。果とは其の因緣によつて生み出されたる結果で、報とは其の果の周圍に及ぼす働きのことである。斯く相より報に至るまでの條件は如何なる物にも、如何なる場合にも決して缺くことは無いのである。之を『本より末まで究竟して等し』といふので、究竟して等しとは即ち一も漏るゝこと無きの義である。されば如是本末究竟等とは以上の諸條件を一貫せる統一性に名くるものと見て宜いのである。

最後に考ふべきは三世間である。世間といふは『相並んで存する多くのもの』といふ義である。こゝに三種の世間を認めなければならぬ。その三種とは即ち

五陰世間、衆生世間、國土世間。

である。五陰とは又五蘊ともいふが、色受想行識のことである。色とは外界の刺激に應じて生ずる感覺作用のことである。受とは其の感覺に伴つて起る各種の感情である。



想とは更に之より生み出さるゝ各種の念想である。行とは實行に移らんとする心の働きて、即ち意志作用のことである。識とは以上の諸作用を統一する力をいふのである。此の五蘊がいつも相並んで働いて居るから之を五蘊世間といふので、五蘊あるによつて即ち箇人が存在する。衆生といふは箇人のことである、各箇人が並び存して社會を成す故に、之を稱して衆生世間といふ。國土とは即ち此の社會の成立つ場所である。各種の社會が並び存して、人生を形作つて居る。それが所謂國土世間である。人は自然界にその生を營んで居る。山川草木日月星辰等一として人生に關係なきものはない。吾等各個人の生活は五蘊を集めて成るものであるが、又一方には社會から各種の影響を受けて居る。又自然界からの刺激がなければ五蘊も成立つべきではない。要するに此の三世間は皆吾等の一念の中に具はつて居ることを知るべきである。此の三世間を千如に配して三千世間といふ。而も此の三千世間が一念の中に具はれることを認めて一念三千といふのである。

斯く吾等の一念に三千世間の具はることを知つて、佛が世に出て法を説かれたる御精神を深く考へて見ると、吾等は如何なる苦辛を重ねても、必ず凡夫の境界を離れ、佛の境界に達するまで修行を続けなければならぬといふことが痛感せらるゝのである。華嚴經の中には

心は工なる畫師の如く種々の五陰を畫く。一切世界の中に、法として造らざるは無し。心の如く佛も亦然り。佛の如く衆生も然り。心と佛と及び衆生と、是の三差別無し。

とある。衆生が佛の正法を信することによつて、漸く佛の境界に近づいて行けば、娑婆世界は漸く寂光淨土に近き

ものなるに定まつて居る。天台大師が

豈に迦耶を離れて別に常寂を求めんや。寂光の外に、別に娑婆有るにあらず。

といひ、妙樂大師が更に之を釋して、

土に差別ありと雖も寂光に異らず。寂光寂たりと雖も諸土に異らず。

といつたのは味ふべき言である。

天台の教學の教相門及び觀心門の概略は此の如きものである。大師が法華經の深意を充分に發揮して、一切衆生の悉く佛と成るべきことを明示したる功績は眞に偉大なものである。彼の羅什が法華經を譯して世に弘めた時に於ても、一般には此の經の深義を解せざるものが少くなかつたと見え、羅什門下四傑の一人たる道生は一闡提にも佛性があるといふことを主張して、其の同輩の間に容れられなかつた。一闡提とは譯して不信といふ。即ち佛法といふものゝ有ることを心に止むることすらせぬ者である。此の如き輩と雖も佛性が滅び盡したものではない。それは法華經、涅槃經等を精讀すれば分ることである。然るに道生が之を唱へた時には邪説を立て世を惑はすものとして排斥せられた。而も道生は自ら信すること極めて篤く長安の都を去つて虎邱山に入り、多く石を並べて聽衆と爲し、之に對して法を説き、一闡提も亦佛性ありといふ一段に至つて「我が所説は佛意に叶ふものと思ふが如何」といつた時に、石が皆首肯いたといひ傳へられてある。此の如き時代を経て天台の時に至つたのであるが、天台は學徳共に高き人であつた上に、その時を得たので能く法華經の廣宣流布すべき機運を啓くことが出来たのである。



大師の弟子章安（名は灌頂）が大師の講ずる所を筆受して後世に傳へたる功績の偉なることは前にいふ通りであるが、その外別に自著としては涅槃疏その外數種ある。その後も天台宗は榮えて居たが、唐代に至つて妙樂大師（名は湛然）が出て、天台の三大部に註釋を加へて益々其の深義を發揮せる外に、金錍論等の自著もある。此の人の力によつて、當時諸宗の對立して美を競へる中に於て、天台宗の隆興を見たのは大に注目すべきことである。殊に天台の滅後に至つて天竺より傳はつたる經論も少からずあつたが、妙樂は盡く之を讀破し又唐代に至つて盛になつた眞言、華嚴、念佛、禪等の諸宗の教義と對比して天台の教義の最も勝れたることを明かにしたのは不滅の功績といふべきものであらう。妙樂以後に於ける天台宗は特に言ふべきものが無い。その本邦に傳はつて後のことは前節に略述せる通りである。

### 三、釋尊と法華經

法華經は釋尊が特に其の力を傾けて説かれたるもので「如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の秘要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此の經に於て宣宗顯説す」とは其の自ら明言したまへる所である。されば法華經を知らんが爲には釋尊を知らなければならず、釋尊を知らんが爲には法華經を知らなければならぬ筈である。今は釋尊の御一代の御事蹟に就て叙述すべき暇を有せぬけれども、その重要な一二の點に就て見る所を述べて然る後に法華經のことに及びたいと思ふ。釋尊は中印度迦毘羅城に生れ、父は淨飯王、母は摩耶夫人といつ

た。王國といつても其の版圖は五百餘方里に過ぎなかつたといふから、吾が國封建一時代の大名と同じ程度の者と見て宜いであらう。併し其の地は中印度の最も豊穰なる土地で、雪を戴けるヒマラヤの連峰は北に聳え、田園開け産業盛にして其の地方に對立せる諸王國中に於ては最も富強なるもので、配下には十餘の小城主があつた。其の家はアリアン人種の一支部なる釋迦族であつた。釋迦とは「能」の義である。傳ふる所に依れば昔甘蔗王といふ國王があつて、此の王に四人の王子があつたが、王は後に生れたる少子に國を傳へんとする意があるらしく見えたので、四人は之が爲に其の國に争ひを生ぜんことを恐れ、相携へて憍薩羅の森林中へ隠れた。此の森林中に迦毘羅仙人にあひ、その勧めによつて此處に永住することにしたが、四王子の徳を慕つて來り集るもの多く、忽ちにして一國を成した。これが迦毘羅國の始めであるといふ。斯る傳説を有する國に釋尊の出現せられたのも偶然ではない。

元來印度には四種の階級が儼存して居た。即ち刹帝利、婆羅門、毘舍及び首陀である。刹帝利といふは即ち武士階級で、王者も亦此の中より出るのである。婆羅門といふは即ち神を祀ることを業とするものである。印度の昔は多神教であつて、其の神は何れも天と稱せられた。今日我が國に於ても崇め尊ばるゝ大黒天とか毘舍門とかいふのは皆それである。次に毘舍といふ階級には商人及び地主等が之に屬し、首陀といふは農民及び奴隸の階級である。此の四階級が四姓と稱せらるゝものであるが、此の四姓の外に旃陀羅といふ賤民があつた。此等の中に於て最初は刹帝利が最も勢力を有して居たのであるが、社會が次第に複雑となり、法律制度を立て之を治むる必要を生ずるに及び、法典を作ることを婆羅門に依托したところから、婆羅門が次第に勢力を得、西洋紀元前八百年の頃からは刹帝



利よりも上位を占むるやうになつた。併し國政を執るものは刹帝利であつたから、實際上は此の階級が最も榮えて居た。次には毘舍であるが、此の中で殊に富裕なるものは長者と稱せられ、刹帝利と對等の交際を爲し、中には大臣等に擧げられた者もある、唯だ首陀は常に烈しい勞働に従事しつゝ極めて低い待遇に甘んぜざるを得なかつた。旃陀羅に至つては猶ほ更のことである。

斯る階級制度の嚴しい國に於て、その低い階級の家に生れた者は常に壓迫を受けて、過度の勞役を強ひられ、常に不平苦悶の裏に日を送るのである。彼等が慰安を得べき唯一の途は宗教より外にない。然るに婆羅門の中に於て彼等の力となつてやるやうな人は殆んど無かつたのである。婆羅門は社會上に大なる勢力があり、王者にも尊敬せらるゝやうな地位に在つたことから自然上流の人々にのみ親しみ、自己の利益のみを謀るやうになつた。利養に貪著するが故に白衣のために法を説きて、世に恭敬せらるゝ」と法華經の中にあるのが正しく彼等の實狀であつた。而して彼の首陀とか旃陀羅とかいふ階級の者が彼等に對して教へを求むる時には、彼等は概ね之に對して三世因果を説き「汝は前世に於て惡業を積んだ報として、斯る貧賤の家に生れたのである。此の苦を堪へ忍んで來世の福報を待つがよい」と教ゆるに過ぎなかつた。

但し婆羅門とても此の如き腐敗した者のみではなかつた。彼等の中には宇宙問題、人生問題等に就て深い研究を重ね、哲學説を立つる者も多く出て來た。其の中に於て、人倫を離れて山林の中に住み、多くの學徒を集めて道を講ずる者は仙人と稱せられて居た。而して其の學説に種々異同あるが爲に互ひに派を立て黨を結んで相論難し、一

般の人は果して何れに従ふべきかを判斷するに苦むやうになつた。それで釋尊出世の頃に及んでは婆羅門の學派の數は實に夥しいもので、その中に於て特に勢力あるものだけでも、或は九十五種あつたと稱せられ、或は九類六十二種あつたとも稱せらるゝ程である。斯る間に最も勝れたる哲人が出て紛亂せる思想界を統一すると共に、多くの苦み悩める者を救護せんことは、正に時代の要求であつた。釋尊は此の要求に應じて世に出現したまへる者である。而も身は王者の出にして終生乞食の生活に甘んじ、階級的の思想を打破して平等に一切衆生を救はんことを念願とし、

四河海に入りて復た河の名無し。四姓沙門となつて皆釋種を稱す。

といひ、更にまた

一切衆生悉く佛性有り。

と説かれたのである。其の教へが忽ちにして一代を風靡する勢力をもつたのも更に不思議ではない。

釋尊降誕の時代に就ては種々異説があるが、孔子よりも餘程以前のやうに信ぜられたのは未だ研究の充分でなかつた頃のこと、今日では大體孔子と時を同するものと認められて居る。即ち孔子の誕生は西洋紀元前五五一年であるが、釋尊の降誕は紀元前五五七年の頃と考へられて居る。而して孔子は七十三歳で卒し、釋尊は八十歳を以て入滅せられたのであるから、此の二聖は正しく時を同うして此の地上に住まれたのである。釋尊の太子たりし時の名は悉達多といふのであるが、これは一切成就といふ義である。太子が出生せられた時に阿私陀仙人が之を相し



て「これは實に尊い御姿であつて、三十二相悉く備はつて居る。若し王位を嗣がれたならば五天竺を統一せらるゝであらう。若し出家せられたならば一切衆生の師として仰がるゝであらう。自分は年衰へて、此の太子に就て親しく教へを受くるまで生きて居られぬのが残念である」といつて涕泣したといふ。此の仙人の見る所に違はず、太子は漸く年長するに随つて人生の眞の意義に就て疑問を懐き、之を解決せんとして頻りに思索に耽るやうになつた。父王は太子をして王者の家に生れたることを満足に感ぜしめやうと考へ、出来るだけ榮華の生活に飽かしめ、又姿も美しく且淑徳の聞え高き耶輸陀羅を迎へて太子の妻とした。太子は父王の慈愛に深く感謝すると共に、自分が世の中で最も幸福なる境遇に置かれてあることは充分に知つて居られた。併し人生の無常であることは争はれぬ事實である。如何なる境遇に在るものでも、其の心に其の満足のないことは同一である。此の如きものが眞の人生であるか。此の如き人生以外に別に眞の人生があるのではないか。若し有るならば、その眞の人生を實現せしむべき道は何であるか。斯ういふ大問題に就ての解決を求むるためには、王宮の生活を捨て、遍く有力なる學者の門を叩いて教へを乞ひ、又自ら靜かに思索を凝さなければならぬ。これが即ち太子の出家の動機である。

併し元來情に敦い太子のことであるから、其の出家を斷行することは容易に出来なかつた。自分が出家すれば王位を嗣ぐ者もなくなり、親も妻も歎き悲しみ、多くの臣下も失望するであらうといふことを能く知つて居られたのであるから、其の決心は鈍らざるを得なかつた筈である。けれども終に太子の決心は定まつた。此の問題は自分一人の問題ではない。親にも妻にも、凡ての臣下にも共に大切なる問題である。此の問題を解決することによつて、親

も妻も臣下達も共に眞の悦びが得らるゝのである。自分は出家して修行を積み、幸にして人生の大問題に對する解決が得られたならば、直ちに之を父にも妻にも臣下にも告げて、共に眞の人生を送り得るやうにしてやるであらう。是れが其の恩に報じ其の情に酬ゆる所以である。之が爲に一時歎きをかけるのは據ないことである。太子は斯く思ひ定められた。後年に至り此の意味を明かに説かれたものが清信士度人經の中の語である。

三界の中に流轉して、恩愛斷つこと能はず。恩を棄て無爲に入るは、眞實恩に報ずる者なり。

人生の眞の意義を凡ての人に傳へ、凡ての人を救護することが眞に恩に報ずる道である。太子が斯く思ひ定められた時に、宛も羅睺羅といふ王子が生れたので「王位を嗣ぐべき者も出來た。今自分が出家しても、父王の歎きは以前よりも稍少くてすむであらう」と考へ、終に出家せらるゝことになつた。

太子は出家して後、當時高德の人として世に知られたる仙人を歴訪して其の説を聽き、又其の教ゆる所に隨つて種々の苦行を重ね、或は坐禪をして觀念を凝す等、熱心に修行を續けられたが、終に得る所が無かつた。仍て「これは人の力に依るべきことでは無い。獨り自ら修行して證得すべきである」と決心し、去つて尼連禪河の東岸なる前正覺山に庵を結び、乞食の生活をして六年の苦行を積まれた。初め太子が王城を出られて後、父王は臣下を遣つて太子を探させたが、その臣下は太子にめぐり逢ひ、王城に戻らんことを願うたが、太子は其の決心を告げて之を斥けられた。父王は之を聽いて太子の心の動かし難きを知り、改めて五人の臣下を遣はして太子の從者とし、又太子の爲に衣食の資を送つて居られた。太子は不本意ながらも父の懇情を否むに忍びずして、之を受けて居られたが、



此に至つて斷然之を辭退せられたのである。又乞食といふことは婆羅門の中にも既に之を實行して居るものが多くあつた。一般の人も之を心得て居たから快く食物を供養するものも少くなかつた。又何か困難なる問題があつて自分達の思案に餘る場合には、門に立つて食を乞ふ人を呼び入れて相談することなども度々あつた。これは釋尊が成道後も御弟子達と共に續けられたことであるが、單に自分達の生命を繋ぐためのみならず、道を弘むるためにも大に役に立つたことである。

太子は六年の苦行を續けられたので、身體は瘦せ細つて枯木の如くになられた。乃ち自ら思惟するに、此の身は決して輕んずべきでは無い。此の身は大覺を成じて、一切衆生を救ふべき責任のある身である。此の身を大切にしなければならぬ。太子は斯う思惟して、尼連禪河に入つて沐浴し、河の側に於て難陀婆羅といふ少女に逢つて、其の捧ぐる乳糜を受け、大に氣力を回復せられた。然るに太子と共に苦行して居た憍陳如等五人の臣下は之を見て、太子は墮落してしまつたものと思ひ、斯る人に隨從するの要はないといつて、共に太子を棄て去つた。是に於て太子は獨り正覺山に至つて菩提樹下に坐し、『我一切種智を得ずんば此の座を起たじ』と誓ひ、思惟を續けられた。斯くして三十五歳の十二月八日（或は二月八日といふ説もある）に愈々正覺を成じて、三界の大導師たるべき力を具ふる身となられた。久しい間の疑問が根本から解けたのであるから其の悦びは何にも比べられぬものであつたであらう。併しながら斯る悦びを一身に私すべきでなく、之を凡ての人に頒たなければならぬ。それが出家の最初から太子の覺悟である。但し太子の悟り得られたる甚深の理を凡ての人に知らしめやうとするには、固より尋常一様の努力で出来ることではない。因て太子は猶三七日の間正覺山に在つて、其の教化の方法に就て思ひを凝し、然る後徐かに山を出られたのである。

此より後その入滅に至るまでの間、釋尊は有らゆる勞苦を辭せずして、法を弘むるために努力せられた。釋尊の教へが弘まれば、婆羅門の人々は其の信徒を奪はるゝのであるから、非常に憤慨して、有らゆる手段を講じて釋尊及び其の一門に迫害を加へた。殊に釋尊の從弟たる提婆達多是釋尊に對抗して別に一派を立て、始終最も強い迫害を加へた。併し斯る中に在つて釋尊は少しも屈する所なく、却て種々なる迫害によつて勵まされて、功德の積むことの多いのを感謝せられ、

等正覺を成じて廣く衆生を度すること、皆提婆達多が善知識に因るが故なり。

とさへ仰せられた。又其の日常の生活は極めて質素なるものであつた。釋尊の徳を慕ひ、至心を以て歸依したる王者とか富豪とかいふ者も少くなかつたから、其等の人々が供養をする時には、釋尊もその心を嘉して敢て辭されなかつたけれども、通例の場合には御弟子達と共に乞食によつて毎日を過されたのである。自ら耕さずして食ひ、自ら織らずして着るのである。一粒の米にも、一寸の絲にも人の心身の力が籠められてある。之を得んが爲には人の門に立つて懇ろに乞ふのが當然である。如何に歸依する人が多くても、之が爲に心驕つて華美なる生活をする事は釋尊の固く禁ぜられたる所である。

此の如くにして四十餘年の説法を續けられて後、靈鷲山に於て法華經を説きたまひ、それより山を出て恒河の邊



に於て阿闍世王の newly 築ける城を見たまひ、その後益々榮ゆべきを祝福せられた。阿闍世は頻婆娑羅王と韋提希夫人との間に生れた子であるが、提婆に惑はされて母を幽し父を殺して王位を奪ひ、釋尊に對しても種々の迫害を加へ、惡業の限りを積んだのであるが、後その罪を悔いて佛門に歸依し、熱心なる佛教の保護者となつたものである。彼の城を過ぐることは釋尊に取つて殊に大なる悦びであつたであらう。それより吠舍離城の附近に暫く居られて拘尸那城へ向はれたが、その途中に於て病惱漸く重くなり、拘尸那城外なる醯蘭若河の堤に着かれた時には、最期の時の近かるべきを自覺せられた。その堤には娑羅樹の林があつたが、その中で殊に秀でたる二本の娑羅樹が日の影を受けて美しく見えたので、阿難に命じて其の間に床を設けしめ、頭を北にし面を西にし、夕陽の影の中に横臥せられた。

時に此の拘尸那城に須跋陀羅といふ婆羅門が居た。歳は已に百二十に達し、賢人として聞えた者であるが、釋尊が城外に來たまへることを聞いて、來つて阿難に逢ひ「自分に疑ひの決し難きものがある。願はくば佛に一言の御教示を得たい」と願つた。阿難は「佛今入滅したまはんとする際であるから、安らかにしてお置き申したい」といつて斷つたが「然らば佛には再び逢ひ難いであらう。是非一言の御教へを……」と固く請うて、立去らうとしなかつた。釋尊は阿難を近く召されて、此の事を聞きたまひ「自分の最期に、教へを求むる者の來たのは悦ばしいことである。此處へ呼べ」と仰せられ、病に惱める身を強ひて起して、彼の老人の爲に懇ろに教誨を與へられた。老人が去つて後、阿難等に最後の訓戒を與へられ、その初夜に於て端然として示寂せられた。時は二月十五日であ

る。

釋尊の御生涯は此の如きものであつた。慈悲の一生である。努力の一生である。此の如き釋尊の説かれた教へが永く一切の人の力となり生命となつたのは當然のことである。佛教を消極的のものであるとか、厭世思想であるとかいふのは、其の一端を見て、其の全體を知らぬからである。苟くも釋尊の御事蹟の一端なりとも知るものは、其の教へが決して消極的であつたり、厭世的であつたりする筈はないといふことに思ひ當るべきである。特に此の法華經を讀むに當つて、釋尊の貴い御性格を知つて置くことは極めて必要な義である。

釋尊によつて創められたる佛教は、二千數百年を経た今日に於て依然として榮えて居る。今日吾等は佛に逢つて面のあたり御教へを受くることは出來ぬけれども、佛の遺されたる御教へは經典として傳はつて居るのであるから、之によつて深く究め篤く學びさへすれば吾等の有する凡ての疑問を解くことの出來ぬ筈はない。さて今日佛教の典籍として傳へられて居るのは所謂大藏經であつて、非常に浩瀚なるものであるが、此の中には種々のものが含まれて居る。其の主要なるものは經律論の三種である。三種共に夥くあるので、之を經藏、律藏、論藏と呼び、併せて三藏といふのである。經は佛の説き示されたる所を録せるものである。律は佛弟子たるもの、日常に必ず守るべき規律である。而も其の中に含まれたるもの、大部分は禁戒であるから、之を戒律と呼ぶのである。論は以上の經と律とを解釋したもので、佛の滅後に出て論を作つた學者を論師と稱さるのである。以上は何れも印度で出來たものであるが、佛教の支那へ渡つて後、支那の學者が以上の三藏に就て著はしたる解釋も多くある。此等を盡く包容



するものが所謂大藏經である。

其の中の律と論とは暫く措き、經に就て少しく辨じて置かなければならぬ。吾等は論語を読み又はバイブルを讀んで、孔子や耶蘇の言行を學び大なる益を得るのであるが、若しそれと同様なる期待をもつて佛教の經典を讀むならば、必ずや少からぬ失望を感じるであらう。論語やバイブル(特に四福音書の如き)は、たとへ一枚讀んでも何等か有益なる教訓を受くるのであるが、佛教の經典に在つては必ずしもさうで無い。時によつては何十枚讀んで行つても、殆んど何事をも捉へることの出來ぬやうなことがある。それは經典の性質が論語や福音書など、全く異ふからである。論語は孔子の言行録であつて、全體が或る組織を有するものではない。福音書は論語とやゝ趣を異にする所もあるが、大體に於ては矢張り耶蘇の言行録と見るべきものである。何にせよ聖賢と仰がるゝ人の言行であるから、其の一言一行が盡く吾等に大なる教訓を與ふる筈である。然るに佛教の經典なるものは釋尊の言行録と見るべきものでは無く、全篇が一の結構を有する所の文學的作品なのである其の内容に就いて見れば、釋尊の説法を重なる内容とした經典が勿論多いのであるが、時には釋尊以外の佛の説法を(例へば大日經の如き)内容としたものもあり、又或は菩薩の言行を(例へば維摩經の如き)重なる内容としたものもある。佛にせよ菩薩にせよ、自ら筆を執つて一語たりとも書き記したのでは無く、又傍に居る人が直にそれを書き止めたものでもない。何れもそれが言ひ傳へられ語り傳へられて、後に至つて經典となつたのである。元來經といふのは梵語で修多羅(或は蘇怛纒)といふ語を譯したもので、細い紐のことである。例へば美しい花を紐で貫いて華鬘とすれば、髪飾りとするものが出来る。

宛もその如くに貴い佛や菩薩の言行を一つに纏めて、後の世へ遺すのであるから之を經と呼ぶのである。佛や菩薩の教へを受けて感激した人々は、それを多くの世の人に語り傳へて、其の悦びを頌たうとする。それを聞いた人が又語り傳へる。中にはそれを書き止めて置く人もある。又或るものは歌となつて歌ひ傳へられる。此等のものを取つて資料とし、之を組織的に纏め上げたものが即ち經典である。

されば同じやうな經典が幾種もあるといふことは少しも不思議ではない。例へば釋尊が或る時祇園精舍に於て説法せられたとすれば、その時の説法は唯だ一種であつても、之を多くの人が言ひ傳へ語り傳へ、それを材料として經典が出来る場合に、その纏め方にいろ／＼の異ひも出来るわけである。其の幾種もある中に於て、最も完全なものが久しい生命を有し、缺點の多いものは何時しか亡びてしまふのである。妙法蓮華經の如きは其の内容に於ても、又其の組織結構の技倆に於ても、優れたるものといふべきであらう。佛教の經典は此の如き性質のものであるから、他の聖賢の言行録と同一視してはならぬのである。論語の如き聖人の言行録は、譬へば善く茂つた松や桐の樹を澤山植ゑ並べたやうなものであるから、之を見渡せば一本づゝが皆美しのである。全體を見れば勿論美事であるが、たとへ其の一本だけを見ても充分の價値が認めらるゝのである。然るに佛教の經典は譬へば多くの木や石を集めて建築されたる殿堂の如きものである。其の一本の柱にも、一枚の瓦にも決して龜末なものはないけれども、一本の柱を見たり、一枚の瓦を見たりしただけで、殿堂其の物を批評することの出来るものではない。是非とも此の殿堂の中に入り、細かに其の内部を觀察して見て、初めて其の莊嚴雄大なる規模を知るべきである。



但し言語や文字は要するに思想を傳ふるための用具に過ぎぬものである。言語や文字に囚はれて、其の中に含まるゝ思想を味はふことを知らぬものは假令萬卷の書を讀むとも畢竟何も讀まぬ者と異なる所はない。指を以て月を指し示しても、愚者は其の指を見て月を見ぬ。即ち智度論に、

人の指を以て月を指し以て惑者に示すが如し。或者は指を視て而して月を視ず。人之に語りて言く、我指を以て月を指し、汝をして之を知らしむ。汝何ぞ指を看て而して月を看ざると。此も亦是の如し。語を義の指と爲す、語は義に非ざるなり。

とある通りである。天台大師は法華經の文字のみを讀まず、その文底秘沈の深き意義を捉へ得て、一念三千の説を立てたといふ。此の如き人をこそ能く經を讀む人といふべきであらう。但し吾等には指し示すものが無くては、いつ迄も月が分らぬのであるから、言語文字も亦頗る貴ぶべきである。唯だ言語文字を重んずると共に、言語文字の奥に在るところの眞の經典を讀むことを努むべきのみである。

佛の教へに大乘と小乗との別のあることは、前から度々いつた通りで、法華經の如きは勿論大乘に屬するものである。小乗は吾等をして人生の苦を解脱せしむることを主にして説かれたるものである。苦を脱することは何人も固より望む所であるが、善の本を去らずして苦を除くことは出来ぬ。苦の本は各自の心を充して居る所の煩惱である。煩惱に役せられて居る者が相集つて世の中を作つて居るから、世の中に罪や過が多く、苦惱や煩悶が絶えぬのである。其の煩惱を去るべき道を示されたるものが即ち小乗である。大乘に至つては菩薩の道を示さるゝものである。

菩薩は佛の御心を以て吾が心となし、獨り自己の惑を去り苦を去るのみならず、普く世間の惑へる者を覺らしめ、世間の惱める者を救ふべき力を具ふることを理想として修行を勵む者である。勿論小乗によつて修行したるでも世間に役立たぬといふことは無い。心に煩惱がなくなつて淨らに行ひ澄して居る人の一舉一動は周圍の人に大なる感化を與ふるものである。唯だ其の人自身が他の多くの惱める者を救はうといふ慈悲心を本として修行するか否かによつて、菩薩と小乗の徒との區別が生ずるのである。菩薩は後に必ず佛と成るべき理想をもつて修行を續くるものである。佛に成りたいといふのは自己一身の爲でない、一切衆生を救ふべき力を具へんが爲である。菩薩といふは菩提と薩埵との二語を結び付けたものであるが、天台大師は之を釋して、

菩提を無上道と爲し、薩埵を大心と名く。謂く無上道大心なり。此の人大心を發し、衆生の爲に無上道を求む。故に菩薩と名く。

といつて居る。菩薩を譯して大士といふも此の意に外ならぬのである。

大乘の經典も多くある中に於て、法華經は特別な性質をもつて居るのである。此の法華經が靈鷲山に於て説かれたことは誰もよく知る所であるが、此の山は釋尊が屢々説法せられた所であつて、法華經を説かれたのが其の最後である。即ち前に出せる無量義經の梗概を見ても知らるゝやうに、此の度は長く此處に住して、自ら覺り得たる所を説き盡さんと決心せられ、先づ無量義經を説いて『四十餘年には未だ眞實を顯はさず』と打明けられ、然る後に『正直に方便を捨て但だ無上道を説く』と名乗つて、此の法華經を説かれたのである。此の法華經に於て説かれた所



は、釋尊が成道の初めから説かんと思召されたことであるが、聽く者の機根が未だ熟せぬ爲に、種々の方便を以て彼等に相應したる教へを説きたまひ、四十餘年を経て後に此の法華經を説くに及び、初めて眞實を説かれたのである。法華經は八年を費して説かれたといふが、此の八年あるが爲に、今まで四十餘年の説法が皆生きて來るのである。是れ『今者己に満足しぬ』の語ある所以である。同じく大乘の中に於ても法華經を説かるゝ前の大乘は權大乘と呼ばれ、之に對して法華經は實大乘と呼ばれて居る。權とは即ち方便の義である。方便の説は隨他意の説で、眞實の説は隨自意の説である。他とは聽く者をいひ、自とは佛御自身をいふ。聽く者の力に應じて説くが故に隨他意といひ、佛の自ら信ぜらるゝが儘に説くを以て隨自意といふのである。

此の法華經は釋尊御一代の説法の結論であるが、釋尊は單に自己の説法を完了せんが爲にのみ此の經を説かれたのではなく、更に大なる目的があつたのである。それは前段の『日本國と法華經』の條下に於ても述べたやうに、之を末法の世の人に遺して、闢諍堅固の世相に惱める者を救はうといふことである。抑も佛が法を説いて衆生を利益せらるゝには三段の別がある。その第一は下種益、その第二は熟益、その第三は脱益である。下種とは田に種を播くことである、熟とは之を養つて成熟せしむることである、脱とは收穫をすることである。之を吾等の佛敎を學ぶ上に移していへば、吾等が佛敎の貴いことを知つて之を學び之を信ぜんと志を立てたのは、即ち吾等の心田に種が播かれたものである。次に佛敎の中に於て其の淺きより漸く其の深きに入り、菩薩の道を行ずるに至つたのは、即ち其の種より生じた苗が延びて、實るやうになつたのである。さて愈々佛の法を説かれたる根本の御精神が分つ

て自分も後には佛の境界に到達すべき見込みのついたのは、即ち收穫の時に入つたのである。法華經は四十餘年の説法を経て、一切衆生に成佛の直道を示されたものであるから、釋尊御在世の者の蒙る利益は即ち脱益である。而して末法の世に至つては人心が極端に險惡になり、尋常一様の教へでは到底之を受け容れやうとせぬのであるが、その時に佛の御心を打込まれたる此の法華經が弘まつて、之によつて新なる時代が開かるべきである。されば末法の世のためには是れが下種益となるのである。此の經の中に於て『如來の滅後』といふことが幾度も繰返されてある。これは釋尊の御入滅の後を汎く指されたものゝ如くにも見ゆるが、能く味つて見ると、主として末法の世を指していはれたものである。それで見寶塔品には明かに『佛の滅後に惡世の中に於て』といつてある。斯る惡世に於て此の經を弘め、新なる時代を作るべき路を開く人の功德は莫大なるものである。これ法華經の神力品に、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩をして畢竟して一乘に住せしめん。

とまで言を極めて稱へられたる所以である。

次に此の法華經の區分に就いていへば、此の經は全體が二十八品に分れてあるのであるが、之を大別すると二門となる。即ち迹門と本門とである。迹門には序品から安樂行品までの十四品が含まれ、本門には從地涌出品から終りまでの十四品が含まるゝのである。本と迹とを分つ所以は釋尊が迹佛として顯はれて居ると、本佛として顯はれて居るのよに依るのである。本と迹との別をいへば、譬へば天上に一輪の月がある。此の月が海にも河にも溪にも、



乃至茶碗の水にも影を宿すのである。其の水に映つた月は迹であつて、天上の月は本である。又譬へば一人が道を行けば數多くの足跡を印する。その足跡は迹であつて、その人自身は本である。釋尊は前にもいふ通り、印度の王國の王子として生れ、久しい苦行を重ねて成道し、然る後に說法教化に力を盡して八十歳を以て入滅せられたのである。而して此の釋尊は、此の宇宙間に唯一絶對なる佛が在して、吾等衆生に救護を與へられんが爲に、人の身を取つて吾等の前に出現せられたものであるといふことが、法華經の後半に至つて打明けられてある。されば八十歳にして入滅せられたる釋尊は迹佛と稱せらるべきであるが、此の迹佛は唯一絶對なる本佛の現はれたまへるものと解すべきである。但し本佛が如何に尊くとも、迹佛となつて吾等の前に現はれて下さらなければ、吾等は何の利益をも蒙らぬのであるから、吾等は決して迹佛を輕しむべきではない。實に僧肇が

本に非ざれば以て迹を垂るゝこと無く、迹に非ざれば以て本を顯はすこと無し。本迹殊なりと雖も而も不思議は一なり。

といつた通りである。併しながら若し迹佛たる釋尊のみを知つて、その本佛が人身を取つて現はれたまへる者なることを知らぬならば、それは天台の所謂「天月を觀ずして但だ池月を觀る」ものである。斯く本佛と迹佛の區別を立て、見ると、釋尊がたゞ迹佛としてのみ認めらるゝ前十四品は迹門となり、其の本佛たることを明かにされたる後十四品は本門となるのである。

尙ほ別に序分、正宗分、流通分の區別のあることをも知らなければならぬ。尤もこれは法華經に限つたことでは

なく、凡ての經に施さるべき區分である。此の區分は秦の道安が初めて立てたものである。道安は秦王符堅の保護の下に大乘を弘めた人で、羅什よりは少しく先輩である。その示寂は秦の建元二十一年(西曆三八五年)である。此の道安以來、一經を三段に分けて讀むことになつたのであるが、その序分といふのは即ち序論である。正宗分といふは即ち本論である。而して末段に至つては此の經を信する利益を説いて、凡ての人に之を信すべきことを勧めらるゝので、此の一段を名けて流通分といふのである。天台大師は此の區分法に基き、先づ法華經全體を三段に分ち、更に迹門と本門とを各三段に分つた。即ち次の如くである。

一經三段 序分 一品——序品  
正宗分 十五品半——方便品より分別功德品の前半まで  
流通分 十一品半——分別功德品の後半より勸發品まで

迹經三段 序分 一品——序品  
正宗分 八品——方便品より授學無學人記品まで  
流通分 五品——法師品より安樂行品まで

本經三段 序分 半品——涌出品の前半  
正宗分 一品二半——涌出品の後半、壽量品、及び分別功德品の前半  
流通分 十一品半——分別功德品の後半より勸發品まで



以上であるが、就中迹門の中心となるものは方便品で、本門の中心となるものは壽量品なのである。

先づ序品に於て、靈鷲山に來集せる大衆の種類が數へ擧げられてあるのを見ると、文殊師利、觀世音等の諸菩薩を始めとして、舍利弗、迦葉等の大弟子あり、國王あり、諸天王あり、龍王阿脩羅王あり、其の他天上界の諸神等苟くも生命を有する者の各階級を網羅し、地獄に墮つべき大罪を積んだといはるゝ阿闍世王迄も其の座に列つて居る。一切衆生の悉く佛と成るべき法を説かるゝ座として相應はしき光景である。而して釋尊が白毫相の光を放つて奇瑞を現ぜらるゝに及んで、文殊師利は過去の日月燈明佛の世に於ても同様の奇瑞のあつたことを語る。是れ正しく釋尊が諸佛の説法は其の語異れりと雖も、その意に於て異なること無きを明さるゝ前提と見るべきである。

方便品に入つては最初に佛の智慧の甚深にして、佛より以外の者の窺ひ知り得ざるものなることを説かれ、唯だ佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡したまへり。

とある。此の如き佛が世に出て法を説かるゝのであるから、其の宜しきに隨つて如何様にも説き分けらるゝ筈であるが、要する所は一大事の因縁の爲に世に出られたのであるといふ。其の一大事の因縁とは、即ち一切衆生を教化して盡く佛の境界に到達せしむることである。佛に成る爲には菩薩の道を勵まなければならぬ。即ち

諸佛如來は但だ菩薩を教化したまふ。諸の所作有るは常に一事の爲なり。

とある。苟くも佛法を學ぶものは、小乗を學んで足れりとすべきでなく、誰も皆進んで大乘を學ばなければならぬ。大乘を學ばぬものは眞の佛弟子とはいはれぬのである。佛が種々に法を説かれたのは、結局大乘を學ばせんが爲な

のである。是れ諸佛の共に一致せらるゝ所であつて、釋尊も亦固よりさうである。釋尊は成道以來四十餘年の間種々の方便を以て、聽く人の機根に應じて淺深高下さまざまの教へを説かれたが、其の目的は唯一つで、即ち此の如きは皆一佛乘の一切種智を得しめんが爲の故なり。

とある。今迄に佛は聲聞のため、緣覺のため、菩薩の爲と三種の教へを説かれた。所謂三乘である。併し其の淺い教へによつて覺を得たものは更に進んで深いものを求め、結局皆佛と成るべきものである。是れ釋尊が

方便力を以て、一佛乘に於て分別して三と説く。  
と打明けられ、更に

若し我が弟子自ら阿羅漢、辟支佛なりと謂はん者、諸佛如來の但だ菩薩を教化したまふ事を聞かず知らずんば、此れ佛弟子にあらず、阿羅漢にあらず、辟支佛に非ず。

と告げられたる所以である。

釋尊は久しく菩薩の道を行じて終に佛と成りたまへる者である。若し自ら佛と成りながら他の者に佛と成るべき道を示されぬならば、慈悲の足らぬものといはなければならぬ。故に釋尊は此の意を述べて、

自ら無上道大乘平等の法を證して、若し小乗を以て化すること乃至一人に於てもせば、我則ち慳貪に墮せん。此の事爲めて不可なり。

と仰せられた。初めに小乗を説き、次に大乘を説き、其の終りに於て一切衆生の皆佛と成り得べきことを打明けら



るゝのは、獨り釋尊のみならず、過去の佛も未來の佛も皆同様である。又十方の世界に如何に多くの佛が出現せられても皆同様である。即ち

十方佛土の中には唯だ一乗の法のみ有り、二も無く亦三も無し。

とある。三乗を説き分けらるゝは唯だ一乗に入らしむべき方便に過ぎぬ。即ち

諸佛世に出でたまふには唯だ此の一事のみ實なり、餘の二は則ち眞にあらず。終に小乗を以て衆生を濟度したまはず。

とある。釋尊は最初から此の目的を以て説法せられたのであるが、聽く者の機根を考へて今まで之を明言せられなかつた。しかし其の時が正に到來したのである。故に

未だ會て説かざる所以は説く時未だ至らざるが故なり。今正しく是れ其の時なり、決定して大乘を説く。

と仰せられた。方便品に於ては此の如き重大なることが、極めて明白に説き示されてある。

法華經以前の諸大乘經に於ては、聲聞とか緣覺とかいふ人々に對して「永久に佛にはなれぬ者である」といふことが屢々宣言されてあつた。例へば大乘經には、

二種の人有り、必ず死して活きず、畢竟して恩を知り恩に報すること能はず。一には聲聞、二には緣覺なり。譬へば人有りて深坑に墮墜し、是の人自ら利し佗を利すること能はざるが如く、聲聞緣覺も亦復た是の如し。解脱の坑に墮ちて自ら利し及び佗を利すること能はず。

とある。それは小乗の教へによつて覺を得たる者は、自ら世間の煩累を脱し得たるに満足し、多くの苦み惱める者の爲に心を痛め、之を救護すべく努力しやうといふ念が起らぬからである。抑も吾等が生を此の世に受け、道を學んで覺を得るには、或は直接或は間接に多くの人の恩を負うて居る。佛は之を大別して父母の恩、衆生の恩、國王の恩及び三寶の恩と説かれた。斯る多くの恩を負ひながら、自ら世の煩累を脱し得たるを以て足れりとし、人のために力を盡さんともせず、佛の化導を賛げんともせぬのは恩を知らざるものである。坑に墮ちた者は身動きが出来ぬから人を助くることは出来ず、自身も亦先へ進むことは出来ぬ。聲聞緣覺の如きは「解脱」といふ坑へ墮ちたもので、世間の爲にもならず、又自身も此以上に進歩することが出来ずして終るのである。又維摩經には、

已に阿羅漢を得て應眞と爲る者は、終に復た道意を起して佛法を具すること能はざるなり。

とある。其の外種々の經に此に類したる語は多く見出さるゝのである。

然るに法華經方便品に至りて、釋尊は前に小乗を説いたのも、又大乘を説いたのも、皆一切衆生を佛にしやうといふ大目的のためであると打明けられたのである。自ら世間の煩累を脱し、世間に對して何等の求むる所無き者が更に進んで世間のために力を盡すならば、初めて世を導き人を救ふ働きが充分に出来る筈である。佛が世の無常を觀ぜよと教へられたのは、世を疎み人を避けて獨り己を善くせよとの意ではない。世の多くの人と共に無意義なる生活をやめ、眞に意義ある生活を爲し得るやうに努力せよとの意である。苟くも佛法の片端なりとも學んだものは、佛の境界に到達するまでは決して自ら足れりとせず修行を續けて行くべきである。さすれば其の人々の機根によつ



て遅速はあるにしても、終には共に佛と成り得べきである。方便品の中に、過去の世に於て佛法を學んだる種々の階級、種々の程度の人を擧げて、

是の如き諸人等漸々に功德を積み、大悲心を具足して皆已に佛道を成じて……

とあるが、それは獨り過去のこのみでは無い。斯くして今までは永く佛に成らずとまでいはれた聲聞緣覺に、佛と成るべき道が示されたのである。此の二乗作佛といふことは實に法華經の特色の一として認めらるべきものである。

次の譬諭品に入つては、有名なる三界火宅の譬へを設けて、佛の說法は一切衆生を皆佛とすべきためであることが極めて懇切に説かれてある。

今此の三界は皆是れ我が有なり。其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり。而も今此の處は諸の患難多し、唯だ我一人のみ能く救護を爲す。

の一語は佛の大慈悲を言ひ現はして遺憾なきものである。此の譬諭品の說法を聽聞して感激したる迦葉等四人は長者と窮子との譬へを説いて、自ら佛の御本意を覺り得たるを感謝する。是れが即ち次の信解品の内容である。子は父を捨て去つても、父は決して子を忘れぬ。終に苦心のかひ有つて邂逅したが、久しい流浪の生活に心の荒んだ子は、容易にその父を父と認めぬ。併し父の慈悲によつて子の心も次第に改まり、終に父家を嗣いで長者となるのである。迦葉等は自ら此の多幸なる長者の子であつたことを知つて、

本心に稀求する所有ること無かりしも、今法王の大寶自然にして至れり。佛子の應に得べき所の如きは、皆已に之を得たり。  
といつて悦んだ。

釋尊の御弟子の中で最も機根の優れた舍利弗は、方便品を聽問して直に佛の御心の在る所を覺つたので、釋尊は即ち之に授記せられた。今又迦葉等は譬諭品を聽聞して、舍利弗と同様の覺を得たので、釋尊は之を嘉せられて、更に藥艸諭品を説かれ、然る後に同じく授記せられた。授記とは其の佛と成るべきことを認めらるゝのである。但し今直ちに佛と成り得らるゝと申すのではない。例へば舍利弗に對しての授記には、  
汝未來世に於て、無量無邊不可思議劫を過ぎて、若干千萬億の佛を供養し、正法を奉持し、菩薩所行の道を具足して當に作佛することを得べし。

とある。その他の者に對しても皆同様に、それ〴〵の條件が附せられてある。要するに『今の心を失はずに、尙ほ修行を重ねるならば、末には佛と成る』といふことを證せらるゝのである。尙ほ迦葉等よりも一段機根の下れる者の爲に化城諭品が説かれた。

化城諭品に於ては、遠き過去の世に於ける大通智勝如來のことが説かれてある。此の佛の御一代の化導は釋尊の御一代と全く異なる所がない。是れ方便品に於て『諸佛の說法は皆同一である』といはれた事を、更に事實によつて説明せられたのである。然る後に譬諭に入り、長い險路を越えんとして疲勞の極に達した多勢の人を勵まさんが爲



に、その導師が幻術を以て途上に一の城を現じ、その中に於て暫く憩はしめて更に前進せしめたることを説かれ、諸佛は方便力をもて分別して三乗と説きたまふ。唯だ一佛乗のみ有り、息處の故に二を説く。

と告げられた。斯く聽く者の機根によつて、或は其の實理を説き、或は譬諭を擧げ、或は過去の因縁によつて説き示された所は『三乗は方便にして、一乗のみ眞實なること』である。之を名けて『開三顯一』といふのである。例へば箱を開いて其の中にある物を示すが如く、三乗を説かれたる所以を究めて、其の畢竟一に歸することを顯はさるゝのである。

以上は迹門の中心となつて居る思想であるが、迹門の正宗分は學無學二千人の授記を以て終り、次は法師品である。此處に法師といふのは如來の滅後に出て、如來の眞實の教へを弘むる人のことである。法師は『如來の使』と稱せらるゝ程に貴い者であるが、その如來の使たる職責を果すのには、固よりそれだけの覺悟がなければならぬ。

その要項を示されたものが所謂『弘經の三軌』である。それは

如來の室に入り、如來の衣を着、如來の座に坐して、乃し應に四衆の爲に廣く斯の經を説くべし。

といふので、更に之を説明せられて、

如來の室とは一切衆生の中の大慈悲心是なり。如來の衣とは柔和忍辱の心是なり。如來の座とは一切法空是なり。とある。此の最も貴い職分を果すためには、此の如き特別の覺悟が無ければならぬのである。尙ほ釋尊の説きたまへる所が永遠に傳はるためには、それが絶對の眞理であることを確信して、之を世に弘むる人の努力が最も必要である。

ある。是れ即ち多寶如來の出現せらるゝ所以である。多寶如來は釋尊のために證明をせんとして出現せられたのである。

見寶塔品に於ては、先づ佛前に七寶の塔の涌出せることが記されてある。此の塔中より多寶如來は大音聲を出して釋尊の説法を『善哉善哉』と讃め、更に

釋迦牟尼世尊の所説の如きは、皆是れ眞實なり。

と告げられた。而して後に十方の世界より諸佛の來集せらるゝに及んで、その七寶の塔の戸が開かれ、釋迦多寶の二佛は塔の中に並び坐せられた。釋迦は眞實の教へを説き、多寶は其の眞實なることを證明せらるゝのであるが、此の證明によつて、釋尊の説かれた所が永遠に傳はるべき價值のあることを誰も疑へぬやうになつたのである。多寶如來の功德は實に莫大なものである。故に釋尊は

久しく滅度したまふと雖も、寶塔の中に在して尙ほ法の爲に來りたまへり。諸人云何ぞ、勤めて法の爲にせざらん。

とて衆を勵まされ、また

法をして久しく住せしめんが故に此に來至したまへり。

とて多寶如來に、感謝せられたのである。

既に釋尊の説きたまへる所が眞實であると定まつたのであるから、釋尊は塔中より大音聲を出して普く大衆に向



ひ、

誰か能く此の娑婆國土に於て廣く妙法華經を説かん。今正しく是れ時なり。如來久しからずして當に涅槃に入るべし。佛此の妙法華經を以て付屬して在ること有らしめんと欲す。

と勧められた。法華經を永く此の娑婆に流布せしめんとするは、即ち一切衆生をして共に佛と成るべき目的を以て行ひを磨かさうといふのである。人々が佛となれば、娑婆世界は即ち寂光淨土となるべきである。此の經の弘通に力を盡すのは此の如くに貴いことであるが、而も最も困難なることである。故に釋尊は此の經を弘むる者の決心を促さんが爲に六難九易を説かれたのである。六難九易とは此の經を弘むるために最も困難なるべきことを六箇條に分けて擧げられ、之に比すれば世間に於て最も困難と見做さるゝ九事も寧ろ容易なることであると説かれたのである。此より提婆達多品、勸特品、安樂行品等が續いて、此の法を世に弘むる功德の洪大なることも明かになり、又之を弘むるに就ての覺悟も審かに示されたので、諸菩薩は何れも末法の世に再び出て、此の經を弘むるといふ大任を果さんことを望んだ。然るに意外にも釋尊は之を許されなかつた。

前には此の經を弘めんことを勧められたる釋尊は、從地涌出品に至つて遂かに之を止められて、

止みね善男子、汝等が此の經を護持せんことを須るす。所以は何ん、我が娑婆世界に自ら六萬恒河沙等の菩薩摩訶薩有り。

と仰せられ、それと同時に大地より夥しい數の菩薩が涌出して佛前に到り、娑婆世界に於ける御化導につきて懇ろ

に御慰め申した。而して釋尊は之に答へて、

善男子、如來は安樂にして少病少惱なり。諸の衆生等は化度す可きこと易し、疲勞有ること無し。

と仰せられた。抑も此の娑婆世界の衆生は皆煩惱に役せられて居る者のみで、佛の御化導は實に容易な業ではない。然るに此の如くに仰せられたのは、久しい後には必ず佛法が汎く世に弘まり、世を擧つて佛法に歸依するやうになるといふ確信をもつて居られたからであらう。さて此の新に現はれたる諸菩薩は何れも非常なる高德の菩薩のやうに見えたので、今まで説法の座に在つた者は皆深き疑ひを懷き、彌勒菩薩は一同を代表して釋尊に向ひ、此の諸菩薩の何者なるかを質すことになる。此より後、壽量品を経て、次の分別功德品の前半までが、所謂「一品二半」で法華經中に在つて最も肝要なる部分である。此の涌出品からは本門の部に入るのであるが、本門の中に於ても特に大切なのが此の一品二半である。

釋尊は彌勒の問に答へられて、先づ此等諸菩薩の特色を説かれた。此の事は眞に大乘の教へを學ばんとする者の特に心を致すべき所と思はるのである。釋尊は此の諸菩薩を「此等は是れ我が子なり」と仰せられ、更に

常に頭陀の事を行じて靜なる處を志樂し、大衆の憤鬧を捨て、所説多きことを樂はず。

といひ、又

志念力堅固にして、常に智慧を勤求し、種々の妙法を説きて其の心畏るゝ所無し。

とある。靜なる處を志樂するといひ、所説多きことを望まぬといふは、世間に對して毫も求むる所の無い者である。



唯だ自身は佛の如き智慧を具へんことをのみ志とし、又世間に苦み惱める者の夥しきを見ては之を其儘に打棄て置くに忍びずして之が爲に妙法を説くのである。之を説いて何物をも求めやうとするので無いから、其の心には畏る所が無いのである。末法の世に出て大乘を弘むる者は、此の如き心をもつ者でなければならぬ。

さて釋尊は彼の諸菩薩を稱讃せられて後、彼等は皆吾が教化を受けた者であると告げられた。これは彌勒を始め多くの者の了解し難き所である。釋尊は

我伽耶城菩提樹下に於て坐して最正覺を成ずることを得、無上の法輪を轉じ、爾して乃ち之を教化して初めて道心を發さしむ。

と仰せられながら、又同時に

我久遠より來、是等の衆を教化せり。

とも仰せられた。釋尊が最正覺を成ぜられてより以來といへば四十餘年である。久遠よりといへば果てもなき昔よりのことである。此の如き矛盾をその儘にして置くことの出来るものには無い。之に就て彌勒菩薩等が徹底的の説明を求むるによつて、即ち壽量品を説かるべき順序となるのである。

壽量品に於て示さるゝ所は、唯一絶對なる佛の在しますことである。絶對の存在であるが故に其の壽は固より無限である。又絶對の力を有せらるゝが故に、吾等を救はんが爲に、如何なる働きをもせらるゝのである。釋尊が汝等諦かに聽け、如來の秘密神通の力を。

と仰せられたのは即ち此の義である。吾等衆生と雖も皆佛性を具へて居る。此の佛性が充分に開發せらるゝならば後には佛の境界にも到達し得べきである。而も吾等は煩惱に役せられて、殆んど無意義なる生活を續け、いつ迄も佛性の光りを放つことが出来ぬのである。之を深く憐れまれて、彼の佛が人の身を取つて、此の娑婆世界に出現されたのが即ち釋尊である。此處に前節にいふ所の本迹の關係が存するのである。獨り釋尊のみならず、一切の諸佛は此の一佛と本迹の關係をもつて居るのである。

尤も斯る唯一絶對の佛の存在することは、法華經以外の經典に於ても説かれぬわけではない。即ち或は毘盧遮那といひ、或は盧遮那といふも絶對の佛の意である。然るに獨り此の法華經に於て、釋尊が自ら『此の絶對の佛の娑婆世界に出現せる者』なることを名乗られたのが、吾等に取つて最も貴いのである。吾等は釋尊を通じて、彼の一佛を仰ぎ得るのである。而して釋尊は言語を以て吾等に説法せられたのみならず、釋尊御一代の事蹟が悉く吾等に對する説法である。釋尊は吾等と同じ此の地上に生を受けられ、吾等と同じく赤子の時から少年時代、青年時代を経過せられ、人生の問題に就て煩惱し、出家して教へを求め、苦行を積んで覺を得、而して其の覺り得たる所を吾等に説かれたのである。釋尊御一代の事蹟は吾等の共に歩んで行くべき道を、吾等の前に示されたものである。而して釋尊が其の説法を終つて入滅したまへることも、吾等に與へられたる大なる教訓である。若し佛にはいつでも遭へるもの、佛の説法はいつでも拜聽し得らるゝものといふことであれば、吾等は之に狎れて、之を貴び之を重んずる念が無くなるであらう。即ち釋尊が



若し如來は常に在りて滅せずと見ば、便ち憍恣を起して厭怠を懷き、難遭の想、恭敬の心を生ずること能はず。と仰せられた通りである。然るに佛が入滅せられたといふことになれば、

必ず當に難遭の想を生じ、心に戀慕を懷き、佛を渴仰して便ち善根を種ゆべし。

とある如く、眞面目に佛の遺されたる教へを學ぶものも出来るであらう。釋尊の此の娑婆世界に出られたのも、又八十歳にして入滅せられたのも、共に吾等を教へ導かんが爲の大慈悲の働きである。即ち「神通の力」の現はれたものに外ならぬのである。

壽量品に於ては更に此の理を明かにせんが爲に、良醫と其の子の譬へが説かれてある。或る良醫が家を離れて旅行して居る間に、その子が毒を飲んで非常なる苦みをして居た。そこへ父が戻つて來て彼等の爲に良藥を調へて與へたが、彼等は心が毒の爲に昏んで居るので、此の良藥を飲まなかつた。因て父の良醫は再び旅行に出て、途中から使を遣はし、「汝等の父は死んだ」と其の子に告げしめた。子等は之を聞いて、父の命に従はなかつたことを後悔し、父の遺して置いた藥を飲んで皆健全になつたといふのである。釋尊の入滅も亦之と同様であると説明されてある。而して特に注意すべきは、以上の譬喩談の終りに、

其の父、子の悉く己に差ゆることを得つと聞き、尋で便ち來り歸り、咸く之に見えしむ。

と説かれてあることである。釋尊は御入滅になつても、釋尊となつて出現せられたる本佛は永久に生きて居たまふのである。されば吾等が釋尊の御教へを信じて淨らかなる生活に入るならば、吾等の心と彼の本佛の御心とは相感

應し、吾等は常に佛と共に活くるの悦びを感じて、毎日を最も有意義に過し得べきである。即ち釋尊が

一心に佛を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜まず。

といふ決心の者とは、いつも共に在るのであると仰せられ、

我時に衆生に語る、常に此に在りて滅せず。

と仰せられたのは此の意である。

斯く迹佛は即ち本佛の出現であることを打明けられたのを稱して「開迹顯本」といふのである。此の思想を更に推し擴めて行くと、獨り「佛」と稱せらるゝ者のみならず、苟くも世に出て法を説き、一切の人をして意義ある生活を送らしむるやうに力を盡した人は、何れも本佛の御力の現はれたものであると見て宜いのである。壽量品には、如來の演ぶる所の經典は皆衆生を度脱せんが爲なり。或は己身を説き、或は佗身を説き、或は己身を示し、或は佗身を示し、或は己事を示し、或は佗事を示す。

とある。古今の聖人賢人と呼ばれるゝ人は皆佛の「佗身を示したるもの」と見るべきである。斯れば何れの教へでも全く價値のないものは無いわけである。併しながら久しく並び存して居る間には其の最高最善なるものによつて統一せらるべきことは疑ひなき所であらう。

法華經の壽量品は吾等に何を吾等の信仰の目標とすべきか、何を理想として吾等の行ひを勵むべきかを明かに示したものと稱すべきである。吾等が唯一絶對なる佛の實在を信じ、此の佛が特に吾等の住する娑婆世界に釋迦牟尼



佛として現はれたまへることを信じ、此の釋迦牟尼佛の御教へによつて修行すれば、吾等も亦佛と成り得べきことを信するならば、吾等の一日一日は何れも光輝に充ち希望に充ちたものとなるべきである。此の如き人が多くなれば此の娑婆世界が次第に寂光淨土に近づき行くべきである。此の娑婆世界の者に此の如き教へを與へられたる釋尊の慈悲こそは眞に洪大無邊と申すべきであらう。法華經の神力品に、十方世界の衆生が吾等の世界に向つて、釋尊を拜んだことが記されてある。即ち

彼の諸の衆生、虚空の中の聲を聞き已りて、合掌して娑婆世界に向ひて是の如き言を作さく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛。

とある。而して之に續いて

時に十方世界通達無礙にして一佛土の如し。

とある。極樂淨土を西の空に向つて求むるにも及ばず、東の空に向つて尋ぬるにも及ばぬ。佛の大乗の教への弘まる所は皆淨土となるべきで、十方世界が悉く通じて一の淨土とならんことは苟くも此の道を信じて行ひを勵む者の共に理想とする所でなければならぬ。

法華經の藥王品以下は、斯る信仰をもつて世に立つた者の活きた事實を擧げられたもので、何れも有益なる教訓の多くを望んで居るが、其の中心を爲して居る所の思想は略ぼ以上に説く所で盡されて居ると思ふ。釋尊は此の經を特に鬪諍堅固の世に生れた者の爲に説き遺されたと申すことである。今や鬪諍堅固の世相は遺憾なく現はれて居

る。此の時に當つて名利の念を離れて此の法華經を弘め、斯る世相を一轉して、此の地上に寂光淨土の實現せらるべき機運を開くために力を盡す者があるならば、釋尊は定めし満足せらるゝことであらう。見寶塔品に

此の經は持ち難し、若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す。諸佛も亦然なり。

とあり、更にまた

恐畏の世に於て能く須臾も説かんは、一切天人皆應に供養すべし。

とあるは、現代の吾等に最も適切なる語である。



新國註譯  
妙法蓮華經終

昭和五年六月十五日印刷  
昭和五年六月廿五日發行

定價金四圓五十錢

著者 小林 一郎

發行者 原 瀧 三郎

印刷者 中 村 修 二

印刷所 株式會社開明堂支店

禁 複 製



東京市日本橋區表發樂町二

東京市日本橋區表發樂町二

發行所

東京市日本橋區  
通三丁目一ノ六

文原堂書店

電話日本橋四五一九番  
振替東京七一七一番



中央大學教授 小林一郎著

# 實踐倫理講話

價 三・五〇 送 二八

裝布判六四  
頁〇三六

一名人生道德の宗教的講話とも稱すべきもの、古今の聖人、賢人の言行等をも例にとつて行爲の規範と實踐とを教へんとするものである、全卷の十九章に分ちそのどの一章をとつてもそれだけで纏つた思想をつかむことが出来ると同時に全體が渾然融和して一體をなしてゐる。人生の教科書であり、正しき羅針盤である。

法政大學教授 見尾勝馬著

# 東洋哲學史概説

價 一・八〇 送 二二

裝布判六四  
頁五三

本書は東洋哲學思想の起源發達の史的考察を系統的に記述されたるもの、支那哲學及印度哲學を極めて容易に識しめ且つ纏て吾が日本哲學即ち我が精神文化の眞髓を穿つるの道程たらんとするものである。専門學校の教科書及び東洋哲學研究學徒の爲に廣く各位の机前に捧ぐ。

文學士 中島萬次郎 共著

# 論理學

價 二・五〇 送 二二

裝布判六四  
頁一〇四

(讀實新聞批評) 初學入門の絶好書また専門學校、高等學校程度の参考書、教科書として快適である、と云ふのは著者が既に多年斯學の講師として、三四の學校に經驗があり、學生に對する手心の親切さ並に斯學一般の重要問題全部の扱ひ方の老練明快さに於いて、本書が實證してゐる。

東京市日本橋區  
通三丁目一ノ六

## 原文堂

電話日本橋一五九一  
振替東京一七一七



612  
19

5年 7月 24日 107

|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|---|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 地 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 山 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

調查濟



